Plastic opera

まぅ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｐｌａｓｔｉｃ　ｏｐｅｒａ

【Ｎコード】
Ｎ３１０３Ｄ

【作者名】
まぅ

【あらすじ】
触れた人を溶かしてしまう奇病を持つ少女と少女に唯一触れることのできる謎の男。二人が織りなす年の差恋愛ファンタジー。

一章一話（前書き）

謎の奇病を持つアリカはアポトーシス故、人々から忌み嫌われていた。
殴られるのも日常になりつつあるある日―謎の男が迎えに来て―？

一章一話

酷く虚ろな曇り空だった。
暑い日差しは分厚く灰色に頭をもげる塊にさえぎられ、体温すら奪っていく。
世界が灰色の水に浸されたように、辺り一面が色彩を、彩度を失っていく。
何もかもが暗雲に包まれる—それはアリカの錯覚だったかもしれない。
年の頃はまだ十代前半から半ばあたりだろう。顔つき、体つき、すべてがまだ柔らかくて幼い。触れればとたんにくにゃり、と倒れてしまいそうだ。
そんな不完全な体を揺らし、アリカは走る。艶やかな短い黒髪に混じったピンクと青のメッシュが歩調に合わせて弾むように上下した。
見開かれた紫紺の瞳が何度も何度も激しく瞬かれ、口元は恐怖にひきつり、顔全体は強張りながら痙攣していた。—それさえなければ、アリカは間違いなく美少女の部類だった。
（マント…ちゃんと着てくればよかった。まさか、追われるなんて…）
アリカは心の中でそっと舌打ちをする。心のどこかではまだ余裕のようだった。
（ゴーグルも…。ついてないな…近くだからいいと思ったのに）
心の中の声はひどく怯えている。そして今にも泣きそうに、上ずった声で息を切らしている。
やっぱり余裕じゃないかも。
アリカは拳を握りしめ、ただひたすら走った。足が痛くなっても、倒れそうになっても。
—だって、俺は人を傷つけるから。

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

戦争という言葉が過去のものになったのは最近だ。

つい今しがたまで―とは表現できないが、比較的最近まで争いがあった。どうでもいい、醜い争い。

ただお互いの利益を会得するため、繁栄させるため―戦っている人にはわからない、指導している者たちだけで通じる子供の戯れのような出来事だった。争った期間はそう、長くはない。五本の指に収まる程度のものだった。

結果、世界は指導している者たちの思った通り、戦争という礎をもった「平和」を会得した。修復した現在は、とても住みやすい世界になっている。不自由もなく、痛みもない。

しかし代償というものは何に対しても生じる。

この戦いで出してしまった犠牲は、多い。

両手から溢れてしまう。―…体に収めることもできない被害だった。

それを何人の人がわかっているだろう、と街を歩きながらティシーは思う。

今日は午後から雨が降るだろう、と予報されていた。どうやら当たるようだ。町並みは徐々に灰色の雲に覆われていく。

（確かこのあたり…）

ティシーはあたりを見渡す。雨が降るとわかっているのか、人の数は少ない。細い瞳をさらに凝らして細く見るが、道を聞いてくれそうな人物はいない。

ティシーはやれやれ、と腰に手をあてた。

年の頃は二十代もそろそろ終わりにさしかかっているだろう。細身だがばねのありそうな長身の体、特徴的な細い瞳。眼鏡越しに時折涼しげなターキスブルーがちらちらと輝く。まるで猫のような印象を受ける、飄々とした男だった。

時を止めたように、動かなかった風がかすかに動く。
ふわりとティシーの灰色の髪が揺れた。彼の毛は癖が強いため、ふんわりとおいしそうに揺れる。
しかし彼はこの髪が嫌なのか、少々嫌そうに払いのけた。
（どうしようか）
細い顎をなでると、向こうの通りが何やら騒がしかった。
平和とはいえ、多少の恐喝やスリなどは日常茶飯事だ。
そういった出来事にティシーは興味が湧かなかったが、この人のいない状況を打破すべくそちらに向かった。

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

「この野郎！」
汚らしい声が湿り気の強くなってきた街をさらに陰鬱にしていく。
「のこのこ出てきやがって・・・！」
「家にいろっていっただろう！」
「俺たちを殺す気か！」
野太い男の声が次々と小さな体を刺す。言葉を浴びせられるたびに少女の体はびくびくと痙攣した。
「誰のおかげでここに住めると思ってるんだ」
「本来なら、お前は病院の施設にいるんだぞ」
「それを俺たちの好意でここにいさせてやってるんだ」
男たちはどんどん語尾を強めていく。しかし少女には近寄らない。逃げられないように囲み、次々と罵声を殴りつける。
「で―でも！俺、何も触ってない…」
「あのなあ。ちっともわかってないようだな！」
リーダーであろう、一番体格の大きい男の足が少女の体を蹴倒す。少女は小さくうめいたが、回りの男たちは軽蔑の視線を送るだけだ。反対に、蹴った男に心配そうに声をかけた。
「おい…いいのかよ。感染するぞ」

「平気だ。服越しなら大丈夫だと聞いてるからな」
それを聞いた途端、他の男たちの足が一歩前に出た。
「いいか？二度と家から出るな！」
太い足が少女の体をえぐる。
「どこにも触るな！」
日に焼けた足が少女の足を踏みつける。
「地面にもだ。後で消毒しろよ！」
傷だらけの足が少女の腕を蹴り飛ばした。小石をけるように軽々と手は持ちあがり、反対側へと飛んでいき、少女の体は仰向けになった。
蹴られた左手の甲には火傷の跡に似た、紫色の斑の痣が浮かび上がっている。今できたものではない。もう随分と前にできたもののようだ。染み付いていて、治りそうもない。
男は紫の痣を見て苦々しく目を細めた。
「アポトーシス…」
男たちの歯の隙間からおぞましい声が這い出る。
少女は大きく震えると、再び体をくの字に曲げた。今はこれが最良の防御で打開策なのだ—悲しいことに、少女はこういった事態に慣れていた。
もう少ししたら意識がなくなり、罵倒も痛みをなくなる。
そうしたら家に急いで帰って、とっておいたチョコレートを食べよう。
それだけで、すべてが休まるのだから。
少女は体をきつく抱きしめ、小さく丸まった。
「そこで何をしている？」
「…はあ？何だ、お前」
男は少女に落とす予定だった足をどかし、後ろに振り向いた。
そこには眼鏡をかけた男が一人、立っていた。
細身で長身の体に、肩が見えそうな緩い服装。髪は灰色だが、年はまだ若いように見える。

いたって普通の一般人だが、目だけみると猫のように細かった。
「にやにやしやがって…薄気味悪いやつだな」
「おい、何かようか」
リーダーである男が他の男たちを制して前に出る。眼鏡の男よりは背は低い。しかし体格が倍以上あり、すべて筋肉で構成されていた。
その体としかめた獣のような顔で男を威嚇するが、眼鏡の男は動じない。ただにやにや笑って見下していた。
男は猫のように笑う男が気に食わなかったのか、腕を伸ばす。
「おい…何かあんのか？ああ？」
「いやあ…」
胸倉をつかまれ、猫のように笑うのをやめて両手を振った。
「文句はないけど…いいんですかねえ？小さな子をいじめて」
「ふん。こいつはなあ。アポトーシスなんだよ、わかるよなあ？俺たちを殺す人種なんだよ、街の厄病神だよ！」
「へえ？普通に住んでるんですか？」
「俺たちは優しいからなあ」
対峙する二人の男の後ろでほかの男が笑い、ちらりとだけ少女を見下した。
「なら、ヤサシク。してあげればいいじゃないですか」
「してやりたいのは山々だが…こいつは約束を破った」
「そうだ、そうだ。こいつは街に出てこない約束になっている。理由は…わかるよなあ？俺たちのため、街の人たちのためだ」
「そりゃまあ…わかりますけど」
眼鏡の男は胸倉をつかまれたまま、そっぽを向いて鼻で息を漏らした。
「だからといって、こんな幼い子を」
「よそ者が。俺たちの邪魔をするのか？…それとも、お前」
今まで強気に、眼鏡の男を掴んでいたリーダーが手を離した。そしてそのまま一歩下がる。しかし眼鏡の男は素早い動作で男の手を

取った。小さな悲鳴が上がる。
「僕もアポトーシスって…言ったらどうする？」
まるでいたずらをけしかける子供のように、眼鏡の向こうでターキスブルーの瞳が細く笑った。
「う…そんな嘘に…」
「嘘…嘘ねえ。別にいいけど」
男はずれた眼鏡を直すと、表情を消して肩をすくめた。
その無駄のない言葉と飄々とした態度で、男たちは悟った。
「う…うわあああああ！」
先ほどまで威勢よく少女をいたぶっていた人達とは思えない、甲高い声で群がっていた男たちは一目散で逃げた。
それもそうだろうな、と残された男は頭をかきながら、もう姿の見えない男たちの姿を追う。
「…あ、いけない」
男は少女に歩み寄り、しゃがんだ。
少女は小刻みに震えながら小さく丸まったまま、顔すら上げずにひたすら怯えている。彼女をいたぶった者たちはもういないのに、恐怖に体をうずめていた。
「ねえ」
男は極めて優しい声を出した。とろんとまろやかな声は甘そうだ。
だが少女は震える一方。
「もう大丈夫。君をいじめていた人はどこかに行ってしまった」
男が優しく少女の肩に触れると、少女の体は一層強く震えた。
「かわいそうに…辛い目に合わせてしまったね、アリカ・ランザート…」
その時、少女の体が大きく痙攣した。
恐怖からではない。
驚愕からだ。
ただ純粋に驚き、その反動で顔をあげてしまった。
紫紺の瞳が揺れながら男の眼鏡を見上げる。

「どうして…俺の名前…」
男は笑う。満腹の猫のように、顔いっぱいに口を広げて。
「迎えに来たよ、アリカ・ランザート」
両手が広がる。とても大きな手だ。
「僕と一緒に、おいで」
ふと、少女の視界が真っ黒に塗りつぶされた。
少女―アリカはこの時の彼の顔をよく覚えていない。
気を緩めた神経は一瞬にして眠りへと引っ張っていってしまったのだから。
だが、アリカは忘れない。
体いっぱいに広がる、暖かい「人」というぬくもりを。
初めて触れてくれた、熱い肌を。

一章二話

アポトーシス。
人間の細胞に組み込まれた「自殺プログラム」。
死と名がつくが、悲観してはいけない。これは絶対に必要な「死」なのだから。
これがなければ、人は人の形を造ることはできない。
胎児が夢を見ている間、肉の塊だった手は細胞を死滅させて指を作る。そして体や顔の凹凸、人間のデザインを考えて削り取られていく。
人の形になり、生まれた胎児はその後も巡りゆく細胞の成長により大きく育ち、やがて枯れるように死んでいく。
自殺を促す細胞は人にとってなくてはならない。
だが、もし。
もしもそれを誘発できたら？成長に関係なく細胞をひたすら死滅させることができてしまうなら。
人は脆い。
ひたすらに細胞を殺された指先は、溶ける。
そういった呪われた力をを持つ人々を皮肉にも「アポトーシス」と、人とそれをと分けるためにそう名付けられた。。
彼らは普通の人に生まれたにも関わらず、人を殺す。それも無意識に。触れるだけで。
だから恐れられ、蔑まれる。どんなに弱く、幼い子でも。
そういった者は生まれてすぐに判断できた。
手に痣があるのだ。
紫色の、花びらのような呪われた痣が。
胎児はその後、施設へ送られる。もしくは—最悪、殺された。
本人の意思とは関係ない呪いが、すべてを狂わせる。身内であろうと他人であろうと無差別に。人という人を飲み込んで。

アポトーシスと呼ばれる人々は故に、被害者だ。
だが、回りはそう認めない。
迫害すべき、人種なのだ。
一生他人に触れてもらえない、寂しい人種なのだ。

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

白い光が薄い瞼を刺し、朝だよと目を呼び起こす。
湿り気の帯びた朝の光にアリカは目をこすり、ぼんやりと瞼をあげた。きっとまだ早い。
（あれ…ベッド…）
アカリは自分の記憶が曖昧なことに気づいた。
再び目をつむり、昨日の出来事を思い返す。
母親が死んで数年。本来ならアポトーシスは施設で集団生活を送る。しかしアリカは母のいた家で暮らしたいと、街に降りない約束で一人村はずれに住み続けていた。
大体は自給自足で足りたが、どうしても雑貨面で足りないものが出てくる。
昨日は紐がなかった。いらなくなった段ボールなどをまとめようとしたが、括るものがなかったのだ。だからアリカは仕方なく、街に降りて買い物をしようとしたのだ。
普段ならばれないよう、ゴーグルとマントをぐるぐるに身に付けていくのだが、近くだしすぐすむと油断して…男たちに襲われた。
街の大半がアリカのことを知らないが、男たち（どういったわけか、柄の悪い連中ばかり）は知っている。おそらく街の防衛のためなのだろうが…会うたびにアリカは物を投げつけられ、罵倒を浴びた。
慣れているしすぐに済む…と、昨日もそのはずだった。
（あれ、どうしたんだっけ…）
アリカは再び目を開いた。今度は頭がはっきりしてきたため、し

っかりと。
ふいに目の前に灰色の草原が揺れた。
そう、比喩した言いかたがしっくりくるほど、やわらかく、風を含みながらゆっくりと髪が揺れていたのだ。
アリカの思考が一瞬どこかに飛ぶ。
そして勢いよく飛びあがった。
知らない家のベッド、隣には見知らぬ男。それもぴったりと、アリカにくっついている。
どう理解していいかわからない状況にアリカの脳内はひたすらに混乱した。
整理整頓のしようもない。
とにかく混乱し、とにかく隣の人物とベッドとあたりを見回し、やはり混乱した。
「あわ…あわわ…な、何…これ……えっと」
アリカは頭を抱え、布団に顔をうずめてみた。そして呼吸を数回。
「……」
もう一度顔を上げる。
「やっぱり…夢…じゃない…。…だ、誰…」
独り言だけが虚しく通り過ぎていく。
自分の声に落ち着いたのか、アリカの目は彼に釘付けになった。
柔らかい灰色の髪、白い肌、整った顔立ち。体は大きく、しかしやせている。でも不思議とたくましく見える。
こうして間近で人を見ることは初めてに等しかった。アリカの中で嬉しいような、恐ろしいような感情が渦を巻いた。
「ち…違った！…ねえ、ねえってば！起きて…」
アリカは自分がよっぽどあわてていたことに気づいた。布団越しに手を当て、彼の体を激しく揺さぶる。
「うーん……もうちょっと寝ていたいんだけど」
「だ―だめ！起きて、起きてってば！」
彼はしぶしぶ頭を揺らし、顔に手をあてながらゆっくりと起き上

った。
「うーん……。あ…。アリカちゃん。おはよう。具合はどう？」
「ど…い…い、いいですけど…じゃ…じゃなくて！」
アリカは彼が起きるのを確認すると、急いでベッドから降りた。そんな彼女を、彼は首をかしげながら見つめて手を振った。
「アリカちゃん。遠慮せずにこっちにおいでよ」
「な…！何言ってるんだよ！」
「だってアリカちゃん、こうやって人と寝たことないでしょ？」
男はベッドの脇にある小さなテーブルの上に置いてある眼鏡を取ると、優雅なしぐさで素早く眼鏡をかけた。そして数度瞬きし、にっこりとアリカを見て笑った。
「ほらほら。もうちょっと寝てないと体に悪いよ」
「じゃなーい！！って、さっきから言ってるでしょ！…俺が言いたいのは、そういうことじゃなくて…」
アリカの声が止まる。
自分はアポトーシスだというのが怖いのだ。昨日の男たちのように、暴行を加えるかもしれない。黙って蔑むかもしれない。もしかすると、感染したと叫ぶかもしれない。
アリカにとってどの想像も耐えがたい恐怖だった。
しかし男の口調はわかっているのか、単に寝ぼけているのか、軽い調子だった。
「感染のこと？それなら大丈夫。僕ねえ、丈夫なんだよ」
アリカは警戒して、男を上目に睨む。しかし彼の口調は変わらず軽い。
「だから感染しないし、死にもしない」
「嘘だ。……もしそれが本当だとしたら…あんたも、アポトーシス？」
「警戒してるんだか、してないんだか…。まだ君は小さいから仕方ないかなあ」
男は独り言をつぶやくと、頭をかいた。

「まあ、正確にいえば。僕はアポトーシスじゃない。でも感染はしない。それどころか、君を救いにきた。…昨日のこと、覚えてる？」
「昨日…？…昨日は…男たちに絡まれた」
「そう、そうだったね。それを僕が助けた。さて、覚えてるかな」
男は楽しそうに人差し指をあげ、くるくると回している。しかしアリカは眉間にしわを入れるだけだった。
「僕はね、君を探しにきたんだ」
「どうして。俺を売るつもり？それとも、殺すの。復讐？」
「…君はそうやって育ったんだね。かわいそうに」
「かわいそうなんて、言うな！ちっとも、怖くない。さびしくもない。……一人な、だけだ」
アリカは語尾を弱めてうつむいた。言葉がうまく喉を通らずに不完全燃焼を起こしている。泣く直前に似ていた。ひりひりと、吐き出したくなる痛みが喉を這い、たまらず目から水を零すあの感覚に。
そんなアリカに男はそっと手を差し伸べる。
「それを寂しいって言うんだよ。ねえ。一緒に帝都に行こう？」
「……お願い。もっと、展開の見える話をして」
男はおや、と目を見開いた。
彼女の年は十四と聞いていたからだ。確かに見た目は年相応だが、頭の回転は速いようだ。それに言葉も知っている。
男の顔はますます嬉しそうにゆるんでいく。
「そうだね、そうしよう。だとしたら、まずは自己紹介だ。
僕はティシー。ティシー・エイルワンダー。君をよく知る人物に頼まれてここまで来たんだ。もちろん、いやいやのお使いじゃない。僕もそのあたり、いい加減大人だからね。…君に興味があったんだ」
男―ティシーは歌うように軽い調子でとんとんと語る。アリカの警戒は少し解けたが、それでも眉間のしわは消えない。
「写真を見てね。僕の好みだなあって思ってさあ」
「…そういうのって、ロリコンって言うんだよ。だって、あんた。どう考えても二十代だもん。もしかして三十ぐらい？」

「ええーひどい。僕は二十七だよ」
「立派なおじさんだよ」
「おじさんっていうのは、もっと加齢臭がしてからだよ。僕はしないでしょ？どっちかっていうとフローラル。匂い、うつってるでしょ？」
　言われて、アリカは無意識に鼻を動かす。その動作にティシーは笑い、アリカはそれに気づいて急いで顔をこわばらせ、思い切り半眼に睨んだ。
「ほらほら。そんなに警戒しないで。僕は味方なんだ。それにアポトーシスが感染しない。それどころか、君の傷を治してあげることができる」
　言って、ティシーはポケットからチューブを出した。
「これ、傷薬。治りがよくて評判なんだよ。昨日の傷、まだ痛むでしょ？塗っておいた方がいいと思うけどなあ」
「そんなので信用しない」
「ふうーん。案外と冷静なんだ。でもね、アリカちゃん。僕は本当に君の味方なんだ…どうしたら信じてくれる？」
　ティシーは布団を退けると、ベッドからゆっくり立ち上がった。スプリングがかすかにきしみ、揺れた。アリカはそのかすかな音に反応すると、ゆっくりと後ろに下がった。まるで野生動物が警戒するように、音がなく静かな退却だった。
「まずは感染しないことをわかってもらおうか？君の手を触ろうか？それとも体を掴もうか？キスでもしようか？僕としては三番目の手段を取りたいんだけど」
「な…何言ってるんだよ！」
　アリカは真っ赤に顔を腫れあがらせ、口もとを押さえてまた一歩下がった。しかしティシーも一歩進む。二人の身長差は頭一個分以上。彼の進む一歩は大きく、ティシーの影にアリカはすっかりおさまってしまった。
「君が認めるまで、僕はどこまでもやるよ？」

長い手が槍のように一瞬にして伸び、アリカの細い手を握った。予想以上に強い力で掴まれ、アリカは顔をしかめた。眉間のしわはもうなくなり、代わりに頬が恐怖で引き攣っていた。
「ほら、触ってる。でも平気だ」
息がかかる位置まで、ティシーの顔が近寄った。アリカは目をそむけ、顔をそむけたがティシーの顔は近づく一方だ。鼻息がかかり、お互いの体温が感じるまで接近する。
「うー……」
アリカは苦しそうにうめき、唇をかみしめた。混乱はさらに混乱を招き、感情の起伏で心音もばらばら、体もはじけ飛びそうだ。
どうしてこんな目に。
アリカは自分の不幸を呪い、逃げられない状況に震えた。
その時、くすりとティシーがアリカの耳元で笑った。
「冗談だよ。ほら、そんなにおびえないで」
ティシーの声が軽い調子に戻った。
アリカは目を開き、恐る恐る顔を元の位置に戻した。
「信じてもらえた？」
アリカは無言で頷き、もうやめてと目で訴えた。紫紺の瞳の表面がうるみ、光がぼやけている。
ティシーは満足そうに微笑み、アリカの頬に唇をあてた。
「聞き分けがよくてよろしい」
「……っ！！」
ティシーの力が緩み、アリカは急いで手を振りほどいて後ろに飛び退いた。
「ちょ、ちょ、ちょ…！！」
「あはは、まだ純情なんだねえ」
「うー！！！」
アリカは言葉を忘れた子のように頬を抑えながら呻き、ティシーは笑い続けた。
「これからもっと楽しいことしてあげるからね。もう寂しくないよ」

「だ、だ、誰が！さ、寂しくなんて…！そ、それ、に！何するんだよ！」
「いいから、いいから。スキンシップは大切だよ」
「な、なんなん……」
アリカはひたすら言葉を繰り返す。ティシーはますます笑みを深めた。
「これから一緒に。まずは帝都に。色々なことは先々で言えばいいね？はい、決定～」
ティシーは両手をたたくと、ベッドを直した。
「あ、ここは街の宿屋だよ。アリカちゃんの家は？もっと向こう？」
アリカは答えれず、ただひたすら頬を押さえて部屋をぐるぐると回った。
ピンクと青のメッシュがきらめき、心なしか嬉しそうに跳ねるのだった。

一章三話

「お母さん」
小さな石しか転がっていない草原でアリカはそっと手を合わせる。小さいが、母の墓だった。
「よくわかんないことになっちゃった」
突然現れた男―ティシーはここにはいない。少し離れた後方にある小さな小屋ことアリカの家で待ってもらっている。
アリカは何となく背中でティシーを感じながらため息をついた。
まだ信用したわけではない。彼が感染しないことはよくわかった。それに触れることをためらわないのも。しかし理由がわからない。名前を知っていることや、アリカをよく知る人物に頼まれたこと、全てにおいて。
どこかに置いて行かれたような感覚を覚え、アリカはぼんやりと空を見上げた。
「全然よくわかんない…でも…」
アリカはそっと目をつむる。ピンクと青にそまった前髪が風に優しく流れていく。
「いい機会だと思うんだ。もう…ここにはいれないから」
街の好意(かどうかはわからないが)で彼女はここにいさせてもらった。しかし昨日起こった出来事を考えると、やはりいてはいけないのだ。
だからといって、他の街にも居場所があるかと聞かれればうつむくしかできない。
最終的には、やはりここがアリカの居場所なんだと思う。小さくて傾いたぼろぼろの木の小屋と、母親が眠っている苔むした石が転がった草原。木や花だけがアリカに何のためらいもなく触れ、生き生きと輝く。
でも彼女は生きなくてはいけない。まだ生きる意味などわからないけれど、生きるか死ぬかと言われれば生きたいと願ってしまう。

そのためには色々と欲しいものが出てくる…そこまで考えて、アリカは首を横に振る。
やっぱりここは違う場所に行こう。
ここにはいつでも帰れる。
「遅いから迎えに来ちゃった」
飄々とした声が風に乗って現れる。ティシーはゆっくりとなだらかな丘を登り、時折吹く風に目を細めた。
「今、戻ろうと思った」
「そう。でもお迎え、嬉しいでしょ」
「……どうして、そうやって…。別に俺、寂しいって言ってない」
「またそうやって突っ張って。まあいいよ。言わなくても僕はわかるから」
ティシーの体がアリカの隣に並ぶ。こうして並ぶと親子と間違うほどの身長差があったが、彼は見下したりしない。穏やかな目で嬉しそうに、彼女を見るのだった。
アリカは口をとがらせると、もう一度母親に手を合わせた。
「ここが…墓なんだね」
ティシーがしみじみ呟いたが、アリカはそれを聞き流した。
「僕もお参りしておこうっと」
アリカが顔を上げると、ティシーもアリカと同じように手を合わせて目を瞑った。いったい何を考えているんだろう、とアリカは端麗な横顔をぼんやりと眺めてから背を向けた。
「帰るの？」
「違う。ここを出るんだったら、おばちゃんに挨拶しなきゃ」
「おばちゃん？身内、他にいたんだ」
「それも違うよ。おばちゃんは、アポトーシスの子供を預かっている孤児院のお母さんなんだ。時々お水とか食べ物をわけてくれたんだ」
「へえ…いい人もいるんだ」
「おばちゃんもアポトーシスだから」

アリカは言いながら歩き、その後ろをティシーがつく。二人はゆっくりと並びながら歩く。黒い影が草原にのびのびと広がり、風がそっと揺らす。
「ありこちゃんはどうしてそのおばさんのところに行かなかったの？」
「…待って。ありこちゃんって—俺のこと言ってる？」
「他に誰がいる？それにかわいいでしょ。ありこちゃん。蟻みたいで」
「ば…ばかにして！」
アリカは一瞬にして飛び跳ね、ティシーの傍を離れる。その顔は真っ赤に膨れ上がり、いかにも怒っていると目がとがっていた。
ティシーは口元を押さえて笑い、困った子どもを見るように目をたらした。
「蟻は冗談だけど…でもかわいいと思わない？ありこちゃんって。響きも感じいいし」
「よくない！」
「そうかなあ…」
ティシーは心底不思議そうに首をかしげ、もう一度「ありこちゃん」と口にした。
「変なやつ変なやつ！」
「あはは。僕はそんな名前じゃないよ。ほらほら、仲良くなるためにはまずお互いを知る前に名前から。言ってごらん。僕の名前」
「忘れた！」
「あはは。もう…恥ずかしがりだなあ…」
ティシーは再び笑い始め、逃げるアリカの腕を取った。華奢な腕はティシーの手の中では無力だ。動こうにも動けない。
「は、放せ！」
「だーめ。さあ、行こう。そのおばさんの家とやらに」
ティシーは笑いながらアリカを引きずり、アリカはひたすら怒ってはぐいぐいと彼の手を押したがびくともしなかった。

怒り以上に、アリカの胸に言葉にできぬ温かさが灯っていた。
人ってあったかいなあ、そんなのんびりした気持ちだった。
しかしアリカ自身は気づいていない。ほのかな温かさも今は怒れてしまうのだった。

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

アリカの家は街をかなり離れた、何もない草原にぽつんと立った寂しい家だった。母親と二人で暮らしていた頃は寂しくなかっただろうが、一人の今はとても耐えきれないようなぽつんとした虚しさが家から漂っていた。それはアリカの心を表しているのかもしれない。
アポトーシスたちを預かっているという孤児院も同じく、草原にぽつんと立っていた。子供たちが暮らしているという割に小さかったが、五人は余裕で暮らせそうな感じはした。
そして何より、アリカの家にある悲壮感がない。同じように木でできている小屋なのに、暖かく賑やかな声であふれかえっている。
庭には小さな子供が数人、じゃれ合っていた。
洗濯物をしていたのだろうか、真っ白なシーツがはためき、その間を甲高い声がすり抜ける。
「あ！アリカちゃん！」
一人の子供がアリカの姿を見て大きく手を振った。しかし急に立ち止まったため、後ろから次々に子供たちがなだれ込み、サンドイッチのような山が出来上がってしまった。
アリカは少し笑うと両手を振った。
「今そっちに行くから！おばちゃんはいる？」
「い…いるよお～…」
子供たちはお互いの体に呻きながらも何とか手を振る。
「へえ～かわいい子たちばっかりで楽しそうだねえ」
その光景を目を細めながらティシーはしみじみ言い、眩しそうに

手で太陽をふさいだ。
「…やっぱりロリコンなんだ」
「そうです、僕はロリコン。じゃあありこちゃんをくださいって言ってこようか」
「…ば、ばかじゃない！？どうしてそういう言い方しかできないんだ…」
アリカはいつまでもなれない、彼の飄々としたとらえどころのなさにため息をつき、必死に頬の熱さを両手で隠した。

子供たちを通り過ぎ、可愛く花の模様にデコレーションされた木の扉を開ける。からんからんと乾いた鈴が鳴り、同時にぱたぱたとせわしなくスリッパの音が近づいてきた。
「まあまあ、アリカちゃん！どうしたの？ああ、もしかしてお水がなくなっちゃった？」
出てきたのは恰幅の良い、いわゆるおばちゃんだった。ふくよかな白い肌はもっちりとしておいしそうで、丸い指はいつでも優しそうに手招く。所々白髪交じりの薄茶色の髪はまだまだたっぷりとあり、後ろでくくっていた。
たった今、料理をしていたのだろうか。フリルのついたエプロンの所々に小さなシミができていた。匂いがしないところをみると、まだ食材を切っているだけのようだ。
アリカは優しく出迎えてくれるおばちゃん・シルオアに微笑みかけ、頭を下げた。
「シルオアおばちゃん…実はね」
「どうも」
ティシーの大きな体がアリカの一歩手前に現れる。突然のことでシルオアは肉に埋もれていた目を見開き、「あれまあ」と口をふさいで見上げた。
「アリカちゃん、こちらの方は？」
アリカはティシーがどんな発言をしてしまうのか、内心びくびく

と震えていたが、彼は彼女が思った以上に礼儀正しくお辞儀をして少しかがんだ。
「僕の名前はティシー・エイルワンダーと申します。実はアリカさんの親が…随分と前に亡くなっていますよね」
ティシーの声はアリカが始めて聞く、極めて低調で物静かな調子だった。アリカは少し拍子ぬけし、ティシーを見たが後ろばかりで顔が見えなかった。
「…こんなところじゃ悪いから、こっちでお茶を飲みながら聞きましょう」
シルオアは首を軽く振ると、顔を引き締めた。
和やかだった空気が一気に冷たく無機質なものに変わり、アリカは呼吸が苦しくなるのを覚えて自然と胸を押さえた。
「ありこちゃん」
ティシーはゆっくり振り返り、意味もなく微笑んだ。だが空気は変わらず緊張している。
「な…何」
「外で遊んでおいで。難しい話は眠くなっちゃうでしょ」
「な、ならないよ。それに俺のことなんででしょう？じゃあ一緒に…」
「ありこちゃん。…後で簡単に説明してあげるから。今は外にいてね」
「う…」
アリカは呻いたが、ティシーは聞こえなかったのかさっさとシルオアと共に奥へ行ってしまった。
ティシーの言動も驚いたが、シルオアもまた緊張していた。
きっと何かある、と思ったがアリカは追えずにただ呆然と入口に立つしかできなかった。

一章四話

ティシーとシルオアは居間に行くと、同時にソファーに腰掛けた。子供たちがいつもふざけて飛び跳ねているため、あちこちに穴が開いている。何度も修正したのだろう、つぎはぎだらけだったがパズルのようで返ってかわいらしく見えた。

シルオアはティシーに一言言うと、立ちあがった。

「ねーねー、アリカー。何見てるの？」

アリカよりも小さな女の子がぴょこぴょこ飛び跳ねる。

「しぃ。静かに」

「ねえねえ。それって盗み聞きって言うんだよ～」

「だから、静かにだってば！」

は、とアリカは口をふさいでしゃがむ。

「…アリカが一番大きな声出してるじゃん」

アリカは口をふさぎながら女の子・メルを横目で睨み、もう一度立ち上がった。今度こそ騒がないよう、やはり口をふさぎながら。

外に出されてしまったアリカは、遊んでいろと言われたが気になってこうして外から覗き見をしているのだった。幸い、居間は庭からよく見えるし窓も大きく、下に付いている。覗き見るには最適だったが見つかる可能性も高い。

しかし先ほどから騒いでしまっているのだが、窓の向こうの二人は気づく気配がない。よほど窓が防音しているのか、実は気づいているのか。それとも集中しているのかはわからない。

シルオアが何かいいながら戻ってきた。

ふわりと湯気が見える。シルオアはお茶を汲みに行っていたのだろう。香りはわからないが、おそらく彼女の大好きな紅茶に違いない、とアリカは一人想像する。

「ねえーアリカー。あのお兄さん、誰？」

「うー。俺も知りたいところだけど…」

「何よーそれ」
メルは舌っ足らずな声で文句を言うと、つまらなさそうに口を尖らせてどこかに行ってしまった。
仕方なくというわけではないが、アリカは一人で二人の会話をがんばって盗み聞くことにした。

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

「どうぞ。粗茶で申し訳ないですが」
「いえいえ、どうぞお気遣いなく…」
二人は社交辞令的な会話を短く済ませると、再び向かい合って座った。
ティシーはずずっと音を立てて紅茶を一口飲むと、そっと音を立てずにカップを置いて両手を組んだ。まだ何も言っていないのに、シルオアはなぜか体を震わせた。
「一体、どういうことだい？」
最初に切り出したのはシルオアからだった。
「あの子の母親の話を出して…。何の関係があるのか、そしてあんたは何者かはっきりさせておくれ。…ところで、あんたはアポトーシスかい？」
シルオアは幾分か攻撃的な口調で言うが、ティシーは表情を変えず静かに首を横に振るだけだった。
その答えにシルオアは目を見開かせ、すぐに警戒した気配をにじませた。
「アポトーシスではありません。しかし感染はしない。それに差別もしなければ、あなたたちを蔑むこともしません。…ただ、アリカさんのことだけでいいんです」
その言葉を聞いてもシルオアの警戒心は解けない。それどころかさらに口調をとがらせる。
「感染しないだって？一体どういうことだい」

「詳しくは言えません。しかし感染はしない…とりあえずでいいですから信じてください。…では本題に入ります。
それこそ詳しい事情は申し上げることはできませんが、アリカさんを帝都につれていきます。これは希望ではなく、絶対です。あなたが何と言おうと連れて行きます」
「誰からそれを」
「秘密です。とにかく、連れていかなくてはいけません」
「それをなぜあたしに言うんだい？それに帝都って…」
ティシーは頷き、小さく「帝国です」とつぶやいた。
「最初は普通に連れていくつもりでした。しかしあなたたちがアポトーシスと知ったので、こうして御挨拶にと。それにアリカさんとつながりがある。…あまり表だってアリカさんがこの街を出たと知られたくないんですよ」
ティシーの言い方はどこか堅苦しい。しわが一切寄っていないスーツのようにぱりっとしているが、とても冷たい。
何と機械的だろう、とシルオアはどこか掴めないこの男に対して不審をもつしかできなかった。
「あんた…何者なんだい？アリカをどうしようって言うんだい！」
シルオアの優しさが消え、一気に語尾を強めて立ち上がった。がたん、と机が震え、カップが揺れて紅茶がこぼれる。普段のシルオアだったら気にするのだが、彼女は気にするどころか気付かない。
ティシーは怒る彼女を冷静に見つめ、眼鏡を指で直した。
「詳しくは言えません。ただ…」
ティシーは立ち上がり、シルオアの傍に近寄った。シルオアは警戒しながらも逃げず、にらみながらティシーの行動を厳しく見つめる。
そして彼はそのままシルオアの耳元で囁いた。

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

（結局何も聞こえなかった）
アリカは肩を落とすと、ずるずると下にしゃがんで壁に寄り掛かった。
白いシーツが風にはためき、眩しいまでに太陽を反射させている。子供たちの声が心から楽しそうに響き、風に乗ってどこかに消える。
アリカにとって眩しすぎて、虚しい光景だ。
アリカと同じアポトーシスであるシルオアと子供たち。なのに別の人種に見えた。
どうして自分はあんなにはしゃげないんだろう。
アリカは膝を立て、顔をうずめた。
「また寂しくなっちゃったの？」
ふいに辺りが暗くなり、アリカはちらりと目だけを起き上がらせた。目の前には見なくてもわかっていた、ティシーの猫のように笑う顔があった。彼はアリカにこにこことほほ笑みかけ、同じ目線になるようにしゃがんだ。影はなくなったが、ティシーの顔が近くなる。
アリカは再び膝に顔をうずめると、「なんの話」と地面に向かってしゃべった。
「大人の話」
「はぐらかさないで。俺の話なんでしょ？だったら俺に…」
「ほら、顔を上げて。そうしたら少し話てあげるから」
「少し、なんでしょ。じゃあやだ」
ティシーは頭をくしゃりとあて、「わがままだなあ」と苦笑いを浮かべた。だが声は困っていない。むしろ嬉しそうに弾んでいた。
「とにかく、ちゃんと少しずつ話していってあげるから。顔上げて」
ティシーのどこまでも優しい声にアリカはしぶしぶ顔をあげたが、目はどこかそっぽを向いている。彼女なりの抵抗の仕方だった。
ティシーは大きな手で彼女の頭をぐしゃぐしゃと撫でると、無防備な頬に唇をつけた。
「！！」

アリカの顔が一気に上昇、真っ赤にヒートアップした。しかしもう動揺はしないぞ、と頑固になっているらしくそれ以上は反応せず、ひたすらあさっての方向を見続けた。
くすくすくす、とティシーが声を押し殺して笑っているがアリカは気付かないふりをし続ける。
「ありこちゃん。とにかく今は僕を信用して、一緒に行こう。…おばさんも承諾してくれたよ。これで僕らは晴れて公認だ」
「！」
アリカの顔がようやくティシーに向いた。彼は先ほどと同じように、にこにこと笑っているだけだった。
「おばちゃんが…？」
「うん、そうだよ。気を付けてってさ」
アリカはまじまじとティシーのターキスブルーの瞳を見つめ、声を失った。
どこか引き留めてくれると、思っていたからだった。危ないから、やっぱり一緒に暮らそうと。何かの期待をしていた。
裏切られたとは思わない。ティシーという男と一緒に行こうと思っていたのだから。
なのに急に胸が痛くなった。搾り取られて血や体液が全て出てしまいそうな、ぎりぎりと締め付けられる痛みだ。
「…泣きそうなの？」
ティシーは下から覗きこむ。だがアリカは無言で激しく首を振るだけだった。
「だから、大丈夫だって。僕と行こう」
今度は両手、ティシーの手がアリカの肩にかかる。
「君はいつでもここに帰ってこれる。今から…そうだなあ。ちょっとデートにいくつもりでいけば気が軽いよ」
「デ…」
「そう、デート。僕と一緒に」
ティシーはアリカの肩に手を乗せたまま、そっと近寄る。

「ち…近い、近いよ！」
アリカはずんずんと近寄ってくるティシーの顔をどけるが、彼は引くどころかかえって抵抗してしまい、距離が短くなる。それに比例してアリカの顔がどんどん赤くなった。
「近い…！や、やめてってば！もう、いい加減にして！」
「そう言われると…近づきたくなっちゃうなあ」
「だ、だから！」
アリカの手はいつの間にかティシーに捉えられている。アリカは抵抗する術をなくし、慌てふためいて俯こうとしたが、すでに彼の鼻が自分の鼻に当たっている。
「なーんて」
ふ、と視界が明るくなった。
「僕たち、まだ出会ったばかりだから。ほっぺたちゅーまでね」
ティシーは満面の笑みを浮かべると、そのままアリカの頬に再び唇を当て、ぽんぽんと頭をたたいた。
「うー！うー！」
アリカは声にならない悲鳴をあげ、どうしていいかわからずに涙を浮かばせた。そして悔しそうに唇を噛み、「ばか！」と精一杯の悪口を叫んでみた。しかしティシーは返って喜んでしまい、もう一度頭をなでてきた。
「さあ、行こうか。ゆっくりでいいから、とりあえず帝都へ。その間に色々お話、しようね～」
どこまでもおどけた口調でティシーは立ち上がり、手を差し伸べた。
アリカは威嚇する猫のように毛を逆立てていたが、結局手を受け取って立ち上がった。
「手、つないでてあげようか？」
「いい！放して！」
無理やり引きちぎると、ティシーは残念そうに肩をすくめ、アリカは先に進んでしまった。

「俺、おばちゃんに挨拶してくる！」
「はいはい」
ティシーは手を振り、アリカは大股で進んでいった。

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

「じゃあ、おばちゃん」
「…気を付けていくんだよ」
シルオアは元の優しい顔に戻っていた。何度も何度も、愛しそうにアリカの髪を撫で、服装を整える。そしてポケットからそっと、小さなネックレスを取り出した。
「これをお守りに持って行きなさい」
小指にも満たない真っ赤な石が、太陽に照らされてきらきらと赤い閃光をほとばせる。
「え、い、いいの！？」
アリカは飛び上りそうなほど大きな声を出して、まじまじと赤い石を見つめた。
「もちろん。…また戻っておいで。ここはアリカの家でもあるんだから。またおいしいご飯作ってあげるからね」
「うん…。メルたちにも、よろしくって」
「言っておくさ」
アリカはネックレスを受け取ると、しばらく無言で手の中で転がした。石が鎖と混じってちゃらちゃらとか細い音を立てる音だけが響く。
そして決心したのか、顔をしっかりとシルオアに向けた。
「ねえ…おばちゃん。さっき何を…話してたの？」
シルオアは一瞬だが目をこわばらせた。しかし次の瞬間にはとろんと優しい瞳に戻り、アリカの頭をなでた。
「あの人にお聞き。…これはおばちゃんが言っていい問題じゃないからねえ」

「……」
置いてきぼりをくらってしまったように、アリカはぼんやりとシルオアを見たが彼女はこれ以上何も言わなさそうだったので、聞きたかったこと全てを腹に飲み込んだ。
「じゃあ…行ってきます」
「行ってらっしゃい！」
アリカはシルオアの手を離れると、一気に駈け出した。
振り切るようにして走る彼女を、シルオアは精いっぱい手を振って送り出す。
「あれえ。アリカ、もう帰っちゃうの？」
追いかけっこから戻ってきたメルは不思議そうにアリカとその向こうで待つティシーを見つめる。
「しばらく…いや、もう帰ってこないかもしれないねえ」
「え？どうして？」
「あ…いや」
シルオアは気まずそうに口を押さえ、メルの頭をなでた。
「何でもないよ。…さあ、そろそろご飯にするかねえ」
「うん！」
アリカとティシーの姿が消え、シルオアたちも中に入った。
（ごめんね、アリカ…）
シルオアの内心は謝罪の気持ちでいっぱいだった。
しかし、それは誰にも知られず今日という一日は過ぎていくのだった。

一章五話

太陽の匂いを振りまき、マントが翻る。小さな体に巻きつけ、全身を覆い隠す。そして黒い手袋で烙印を消し、顔の半分ほどもある大きなゴーグルを着用した。

「えー。かわいくなーい」

ばさ、とマントが重苦しい音を立てて振り返る。もはやそこにいるのは人間ではなくマント怪人と名付けられてしまいそうな、布しか見えない物体だった。

「いいの！どうしてあんたに文句言われなきゃいけないんだよ！」

「だって…これから一緒に行動するんだよ？」

「意味わかんない！」

「そう怒らないで。つまり、ありこちゃんはかわいいんだから男の子みたいな格好しなくてもいいのに」

アリカはぐっと息をのんで黙り込んでしまった。

アリカも好きで男の子の格好をしているのではない。アポトーシスは布越しなら感染しない。媒体は皮膚からにじみ出る体液―つまり、汗などで感染するのだ。布についた汗（沢山汗をかかない限り）なら平気なのだ。だからこれでもかと身に付けているうちにこうなってしまった。

それに女でいると何かと不便だった。まだ幼いので他の人から見れば、男女で変わる態度はわかりにくい。しかし当の本人はよくわかっている。―とにかく、不便なのだ。

それを言えばいいだけなのだが、生憎とこのティシーには伝わらない。彼は感染しないのだから。

アリカは無言で目を横に動かし、ティシーを少しだけ見て無視した。

「とにかく、俺はこれで行くの」

何も言わせぬうちにアリカは扉を蹴るように強く開け放し、外へ

出て行った。
「あれれ、もう行くの？もうちょっと家に別れの挨拶とか」
「いい…またすぐに帰ってくるんだから」
「ふうん」
思いのほか、ティシーはそれ以上言わず、黙って外に出て扉を閉めた。一瞬にして主を失った家はますます寂しそうに暗い影を落とす。
まるで主人が、二度と帰ってこないと本能で悟る犬のように鼻を鳴らす—ように見えたのは、ティシーの錯覚だろう。
ティシーは眼鏡を上げると、大股でアリカに追いつき、隣を歩いた。もしゃもしゃという擬音が似合う、見事なほどマントの塊になっているアリカをにんまりとティシーは見つめる。細い瞳は水のように透通り、どこまでもアリカを愛しそうに見つめる。
しかし彼女は気付かず、ちまちまと小股で素早く前に進む。
「ところで、ありこちゃん。僕たちは今からどこに行くかわかってるかな？」
「ばかにしないで。帝都って、言っただろ」
「うん、そうなんだけどね」
二人は歩きながら会話を続ける。
「どうやって行くつもり？」
訪ねたのはティシーだった。この旅の張本人であり、全てを知っている者。
アリカはゴーグルの向こうで大きく瞬きをし、おもむろにゴーグルを額まで上げた。紫紺の瞳がこれでもかと大きく開き、まじまじとティシーを見つめている。
「そう、そう。せめてゴーグルははずそうね。かわいい目が見れないから」
「ばかなこと言ってないで！…どうやって、って…もしかして何も」
「もちろん、考えてるよ」
ティシーは肩をすくめ、腰に手を当てて立ち止まった。

「ただ、ありこちゃんはどこに行くつもりかなって…」
「ど、どういうこと」
「だって、ありこちゃん。君、どんどんと森の方に進んでるよね？国を超えるにはまず街にでて、車とか馬車とか借りなきゃいけないんだよ」
「ば…ばかに、しないでって！」
「…知らなかったんだね。それはごめん」
ティシーは心底かわいそうな子を見るように眉毛をハの時に垂らし、アリカの頭をなでた。艶やかな黒髪はつるつるとしていて絡むことがない。
「だから、ばかにして！」
「してない、してない。大丈夫、わかってるよ。ありこちゃんは今まで外に行ったことがなかったからね…知らないのも無理ないと思うよ」
「ちょ、ちょっと待ってよ！どうして俺が、外に出たことないって…」
「推理っていうほどたいそうなものじゃないけど。想像できるんだよ。…アポトーシスとして生まれ、人に触れることができないと知り…そしてそれを知る街の人々…。あんなに暴行を受けたぐらい、君を嫌ってるんだ。それ以上先に進めば何が来るのか…君は想像して行けなかっただろうし、知ろうとも思わなかった。その年で、わかってしまったんだね」
ティシーは口調を早めた。覇気のない声は彼女を憐れんでいるが、蔑んでいない。妙な同情の色は見えず、ただアリカをひたすらに心配していることが、眼鏡の向こうに佇むターキスブルーの瞳でわかる。それはアリカに通じたのかはわからなかったが、彼女はそれ以上何も言わなかった。
「…じゃあ、先に行って。俺が後ろ、歩くから」
何かしら怒ると思ったティシーは「おや」と片眉だけを器用にあげ、アリカを見つめた。

「案外と冷静なんだね。感心、関心。じゃあ、手をつないで行こうか？」
「ヤだ！」
差し伸べた手を叩き、アリカは一歩下がった。
「早く！行ってよ！」
「はいはい、わかってますよ。絶対に離れちゃだめだよ？…逃げようと思っても、だめだからね」
「…どうして逃げなきゃいけないんだよ。もう、行くところなんてないのに」
ティシーは満足そうに笑って「そうだね」と背を向けた。
「これで僕の名前を呼んでくれたらいいんだけどなあ」
「何か言ったか？」
「いいや、何も。…じゃあ行こうか。大丈夫。変な奴が来てもちゃんと助けてあげるからね」
こっちだよ、とティシーは軽く片手を上げてアリカを誘う。
アリカは街に行ってはいけない。だから行くとしたら森か、シルオアの家か、それとも草原をむやみに駆け回るかだった。それが今、こうして街に行こうとしている—それどころか、それすら越えようとしている。
自然とアリカの胸に期待という文字が水を含み、膨らんでいく。何に手招かれているかまだわからぬまま。誰がこの先にあるかわからぬまま。
何もわからないというのに、不思議とアリカは嬉しくなった。

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

日がとろりと落ち始め、辺りを朱に染め始めた町並みはどこか薄暗く、人の輪郭を曖昧にする。道行く人は皆朧げで影が浮遊しているように見えた。
アリカは久々に沢山の人を見た。夕方の今頃は買い物帰りの人や

仕事帰りなどの、帰宅ラッシュだ。いつもの倍以上の人で街は溢れかえる。
アリカははぐれないように、時折ティシーを見上げた。夕陽を吸いこんだ灰色の髪はぴょこ、ぴょこ、と歩くペースに合わせてリズミカルに跳ねる。ティシーは長身のためすぐに見つかるが、こうして人が多いとやはりまぎれてしまいそうだ。
会ったばかりの人物を見失うということが恐ろしかった。しかしそれ以上に、人がいることにアリカはたまらなく怖くて仕方がない。
触れた瞬間に、彼らは死ぬのだ。
蝋燭が溶けていくように、どろりどろりと、皮膚を滴らせる。
アリカは知っている。どういった末路をたどるのか。その瞬間から起きてしまう、悲劇が。
「ありこちゃん、大丈夫？」
は、と気づくとアリカは立ち止まっていた。ゴーグルに隠れた瞳は戦慄き、前後左右に震えていた。ティシーは挙動不審に顔を震わせる彼女の顔を覗き込み、数度頭を撫でて立ち上がった。
「まだ…無理だよね。…うん、僕が悪かった。…ありこちゃん。とりあえず今日は宿に泊まろう」
「や…やだ、やだよ」
「大丈夫。僕がいれば何も言われないよ。それに昨日泊まったところだよ。宿の人はもうわかってるから、安心して」
「でも…」
「いいからいいから。ほら、こっち」
ティシーは自分の手の半分にも満たない小さな手を強く握ると、慣れた様子で足を再び動かした。アリカの足は何度かもつれたが、進むことができた。
「これはこれは…昨夜はご利用、ありがとうございました。ええ、今日もですか？もちろんいいですよ。部屋は…」
宿に着くなり、待遇がこれだった。太った宿屋の亭主は文字通り

ゴマをすりながら体を丸め、情けないほど何度もティシーに頭を下げた。アリカは思わず不気味に思い、急いでティシーの影に隠れた。
「昨日と同じ部屋でいいよ。ああ、あと一つで構わないから」
「はい、わかりました」
「って」
宿屋の亭主が奥に消えると同時に、アリカは飛び出してティシーをにらんだ。
「どうして、同じ部屋なんだよー！」
「いいじゃない。もう一緒に寝た仲だし」
「誤解を招くような言い方しないで！」
ぱ、とティシーの表情が明るく花開いた。アリカは背中に悪寒を感じ、思わず一歩下がった。
「へえ…ちゃんと知ってることは知ってるんだ、色々と。ふうーん」
「な、何だよ…」
「いやあ、これからの旅が楽しそうかもしれないなあと」
ティシーは目を細め、顎を撫でてにやにやと口元を緩めた。そのしぐさはどことなくいやらしく、アリカの体温を下げるのだった。
アリカが身震いを起こすと同時に宿屋の亭主は戻り、ティシーに鍵を手渡した。そしてまた頭を下げると、奥に消えてしまった。この宿は繁盛していないのだろうか、亭主はそれきり出てこない。
「さあ、行こうか。二階だから、こっちだよ」
ティシーは慣れた足取りでアリカを引っ張り、きしむ廊下を歩く。一歩踏むたびに床が鳴り、階段も一段上がるたびにぎいぎいと苦しそうな音を立てた。やはり繁盛していないせいだろうか、とアリカは薄暗い廊下を目を凝らしながら見つめた。
ティシーは番号を確認すると、一番奥の部屋に進んで扉を開く。二階は埃っぽく、蛍光灯の光に混じって塵が舞い上がっているのが目に見えてわかった。アリカは少しむせたが、すぐに部屋の中に入れたのでひどく咳はでなかった。
「さ、ちょっと座ろうね」

中は案外と奇麗に整っていた。天井には蜘蛛が巣を張っていたが、気になるほどすごくはない。ベッドは大きく、真っ白に漂白されたシーツがしわ一つなくパリっと敷かれている。枕も同じく、しわがない。そして窓は大きく、夕闇迫る空をくっきり通す。

アリカはあたりを見回しながら、近くにあった木の椅子に腰かけた。床を歩いた時のようにかすかにきしんだ。

ぼろぼろだがテーブルセットがきっちりセットしてあるのだから、この部屋は宿で一番高いのだろうとアリカが思っていると、ティシーも目の前に座った。

「今日はこのままのんびり話そうか。よく考えたら、あんまりしゃべってない」

「…そう？俺は何も言うことないけど」

「それこそ。そう？って聞きたくなるよ。君は色々と聞きたいんじゃないかい？僕が来た理由とか、僕のこととか」

「俺が聞いて、それに答えてくれるのか？」

「それは内容によりけり、だよ。僕のスリーサイズとか、色々なテクニックとかだったらすぐに教えれそうだけど」

アリカは答えず、きょとんと瞬きを一つした。

「ありゃ、わからないか。まあそれは追々…」

「なんのことかよくわからないけど…とにかく、話して。どうして、俺が帝都に？」

アリカは椅子の上でうずくまり、上目にティシーを見つめた。その姿に彼はとろんと目をたらし、頬を赤らめた。口元がだらしなく微笑み、「かわいい」と両手を固める。

「そのかわいさに免じて、答えてあげるから何でも言って」

「……、へ、変なの…。…じゃ、じゃあ」

アリカはやりにくそうに目線をそらし、手に力を入れた。

「じゃ、じゃあ…。どうして、俺が帝都に？」

ティシーはとろとろに甘い表情を浮かべながら人差し指をあげた。

「それはだね、うーん。何とも説明しがたいけど…。

帝都に君のことよく知っている人物がいてね、その人が会いたいってさ。ああ、でもありこちゃんの知らない人だと思うよ、多分」
「何、その曖昧な言い方…。俺のこと知ってるのに、俺は知らない？それって、会ったことないってこと？」
「頭いいね、ありこちゃん。そうだよ」
「でもそれっておかしいよ。俺、今までそんな…帝都にいるような人に会ったことない」
「それは」
ティシーは上げた人差し指をくるくると回す。
「行ってからのお楽しみ、じゃないかな」
アリカは黙って横目でティシーを睨んだが、彼に睨みは通用しない。むしろ彼の笑顔を誘ってしまう。
「じゃあ…次。あんたは、何？」
「名前で呼んでくれたら答えてあげてもいいよ」
「……」
アリカはやはり黙ってしまった。名前を呼ぶ、たったそれだけなのだがアリカはどこか恥ずかしかった。初対面の人というだけでなく、この男に対して何らかの疑問がわいてるからだった。その疑問が何かはわからなかったが、とにかく口にすることが許されないように、声は出ようとしない。
ティシーはくすくすとかすれた笑いを浮かべ、もう一度指を回した。
「じゃあこの質問は終わり。…他は？」
「うー…。うー」
アリカは目を泳がせ、必死に質問を考える。しかしなかなか浮かばないのか、アリカはうなり続ける。
「他はない？質問タイム終了しちゃうよ？」
「ま、待って！……じゃあ…次は。…どうして、アポトーシスが感染しないんだ？アポトーシスじゃないのに…。…本当はアポトーシスじゃないの？」

「違うよ」
ティシーはゆっくりと首を横に振り、にこにこと笑みで何かを隠した。
「僕はアポトーシスじゃない。でも、アポトーシスは触れるよ」
「でも…実は、本当は感染してるんじゃあ」
アリカの声がどんどんかすれ、消えていく。アポトーシスである人なら一度は感じ、恐れる部分だ。
感染にはタイプがある。
一気に感染して、振れたとたんにどろどろと骨まで溶ける人物と、時間をおいてじわじわと溶けていくタイプ。時間も数時間単位から数年単位に及ぶ。
どちらがでるかは人により違うが、確立としては半分半分だ。どちらにしても、溶けて死にいたる。
「実は感染してて…明日には溶けてるかもしれない」
アリカは独り言のようにつぶやき、恐る恐るティシーを横目に入れる。しかし彼の表情は全く変わらず、猫のような笑みを浮かべているだけだ。
「大丈夫なんだって。僕は感染しない。そういう人だからね」
「せ、説明になってない…」
「そんなに説明してほしいんだったら、ずっと僕といればわかるよ。僕が感染してないことが。…ほら、旅する理由が増えた。これでありこちゃんと僕は疑問なく旅できるねえ」
ティシーは穏やかに、そして実に軽く言うとからからと喉を鳴らして笑った。しかしアリカの表情から曇りが取れない。どうしても、想像せずにはいられないのだろう。まだ幼いが、アリカは悲しいほどアポトーシスなのだった。自らのことをよく知っている。
「よし、じゃあ、今日はここまで。いっぺんに話すとつまらなくなっちゃうでしょ？続きはまた明日にして、今日はご飯でも食べようか」
「で、でも…」

「大丈夫。僕が何か買ってきてあげるから、ありこちゃんはここにいて。すぐに帰ってくるからね」
ティシーは立ち上がってアリカの頭をなでた。アリカはくすぐったそうに目を細め、小さくうなずいた。
「じゃあ行ってくるからね」
ティシーは軽く手を振ると、飛ぶように軽く外に出て行った。
アリカはしばらく扉を見つめていたが、気配がなくなるとベッドに倒れこんだ。シーツから糊の、花に似たうそつきの匂いがたちこめ、アリカを包み込む。しわのないシーツは冷たく、芯が火照っていたアリカの体を優しく冷やしていく。
「変なの…。いったい、どうしちゃったんだろ」
何のための旅だろう、どうしてここにいるのだろう。
数々の疑問が押し寄せてくる。その波にのまれ、アリカはそっと暗闇に意識を落とした。

一章六話

真っ赤に熟れた夕日が少しずつ、溶けるように沈む。同時に人々も家に溶けるように姿を消していく。雑多にごった返していた人々の波は徐々に引き、ティシーがパン屋に着く頃にはほとんどいなかった。

代わりに点々とクリーム色の光が灯り、夕闇を呼ぶ。

（女の子と言ったらやっぱりパンとか…甘いものがいいかな。それとも夕飯だから、もうちょっとおかずっぽいものの方が…？）

ティシーはパン屋を目の前に、一人首をかしげてぼんやりと看板を見つめていた。

ティシーにとって女の子の為に買う、という行為は辞書にない。一度もしたことがなかったということはなかったが、自主的にするというのは初めてに等しいかもしれない。それも、小さな女の子のために。

（よかった…予想よりもいい子で）

ティシーは一人くふくふと含み笑いを浮かべ、扉に手をあてた。鈴がちりん、とかすかに鳴ったがティシーはすぐに扉を閉めて後ろを振りかえった。

「ティシー・エイルワンダー殿」

唐突にぽつん、と一人の青年が立っていた。いつの間に、と驚くのは愚かしい。彼は気配というものを持っていないのだから…そしてティシーは、そのことをよく知っている。今さら驚くものではない。

ティシーは眼鏡を軽くあげると、ポケットに手を突っ込んでにやにやと細い目で青年を見下げた。

ティシーの記憶が間違いでなければ、彼の年齢はまだ二十になっていない…確か十八ほどだったはずだ。この年ならまだやんちゃで、遊びたくてうずうずしているだろう。抑えきれない黄色の叫びがあ

りありと見える…はずだ。しかし青年はいたって落ち着いた様子で、冷たいエメラルドグリーンの瞳でティシーを見据える。怒っているようにも見えるが、何も見えていないようにも見える…それは仕方がないことで、彼の瞳は獣のように鋭くとがっているのだから。

「やあ、リリーシアくん。こんなところで会うなんて奇遇だね」

ティシーは軽く言って手を振った。声は笑っているが、目は真剣だ。

リリーシアと呼ばれた青年は目だけでお辞儀をすると、一歩近づいた。耳まできっちり揃った時折青く光る黒髪がわずかに揺れた。

お互い、ここで会ったのが偶然ではないとわかっている…だからリリーシアは小さな声でつぶやいた。

「店の前で話す内容ではありません。場所を移しましょう」

青年の声とは思えないほど、落ち着いた低い声だ。ティシーの軽い調子とは全くの逆だ。

「生憎と、僕はこの店にようがあるんだ。…要件はすぐに済むだろう？言っちゃっていいよ」

「しかしこれは」

「一応、秘密の話でしょ？秘密っていうのはね、どっかでひっくり返すと、その本人しかわからないことなんだ。この街の人たちが僕たちのことを知ってるかい？それどころか、帝都だって僕たちのことを知ってる人はほとんどいない…なら、一般市民の戯言として普通に話してもいいんじゃないかなあ？…あ、わかりにくかったかな？

とにかく、その内容は聞かれても大したことないってことさ。てことだから、話して」

ティシーは早口で一気にまくしたてると、リリーシアに近づいた。彼は目でため息をつくと、表情を変えずに「では」と口を開いた。リリーシアは所謂カタブツではない、と判断できてティシーは満足げにうなずいた。

「アリカ・ランザートと接触したそうですね」

「したよ。今は宿屋にいる」

「もし接触し、共にいるのであれば早く戻って来いとのことです」
「ふうん…相変わらずせっかちだなあ…。あんまりがっつくと逃げられるよって言っておいて」
リリーシアは反応しない。自分に不利益なことには反応しないようだった。まるでロボットのようだな、とティシーは口元だけ苦笑いを浮かべると、ポケットから手を出した。
「僕はもうちょっと旅してから帰るよ」
「しかし、命令があります。それにアポトーシス…」
「もちろんわかってる」
ティシーは眼鏡をあげる。彼の口調はいつの間にかトーンが落ち、目も深い青をひそめて真剣な面持ちになっていた。
「しかし僕には効かない…それはわかってるはずだ」
「では命令の方は」
「別に無視したくて無視している訳じゃあないよ。…ただ、もうちょっと観察すべきことがある。それは報告書を送るよ。不定期かもしれないけど…郵便は君の鳥にでも渡すから、笛頂戴」
リリーシアは微動だにしない。何か深く考えているのだろう…しかし彼はこうしてしっかりした意見を言われると弱い、そのことも含めティシーは彼のことをよく理解していた。
ややあって、リリーシアはポケットから小指ほどの銀色の棒を差出、「二回吹けば来ます。人間の耳には聞こえないものなので安心してお使いください」と丁寧な口調で手渡した。
「じゃあ、報告書は出すということで…。…言っておいて。アリカのアポトーシスは一体どういったものなのか、それをもう少し観察する時間をくれ、と。その結果わかったことを報告書で出す…って言っておけばいいでしょ。
そういうわけだから、もう行っていいよ」
「わかりました。…もう一つ。これは情報です」
「情報？」
オウム返しにする、ということは情報の内容に予想がつかないか

らだ。ティシーは何があるんだと、眉間に軽くしわを寄せてリリーシアに近づいた。幸いなことに、人通りは全くない。
「何？」
「まだはっきりとはしてませんが、最近アポトーシスが行方不明になっているとのこと…単なる病死かどうかは判断できませんが、かすかに誘拐の足跡が残っていたそうです」
「ふむ…誘拐…。それまたどうして…。心当たりがないわけじゃないけど、おかしな話だねえ。もしかして、他国が何か気付いたとか？」
「不明です」
　リリーシアの顔がようやく動く…といっても、首が横に振られただけだ。ティシーは残念そうに肩をすくめ、手をポケットに入れなおした。
「一応気を付けておくよ。…じゃあ、僕はこの辺で。アリカちゃんにご飯買ってあげなきゃ。お腹空かせてまってるからね」
「……何でそんな楽しそうなんですか。これはティシー殿とアリカ・ランザートを親密にするものではないのですが」
　リリーシアは初めて表情を変えた。相手を疑うような、目を細めて真意を覗き込もうとするしぐさをする。
「んん？何でそんなに疑ってるのかな？…楽しいよ、とっても。思ってた以上にいい子だし、かわいい。いじり倒したくなっちゃうよ」
　リリーシアは「はあ」と曖昧な返事をし、しかしすぐに姿勢をただした。気配が希薄になっていく。
「では、また来ます」
「僕とアリカちゃんの旅を邪魔しないでね」
「……」
　最後にあきれたため息だけを残し、リリーシアは空気と混じるように一瞬にして消えた。同時にあたりの雑音が戻り、ティシーの肌に生活の空気が流れる。時々ふんわりとシチューの香りが漂い、胃を刺激する。

辺りはすっかり暗く落ちてしまった。いくら文明が発達してきたとはいえ、このように田舎にくると道の電燈すらあやしく、街は闇色に染まる。
ティシーの眼鏡も黒く染まり、瞳が奥に消える。
もしも「このこと」がアリカを騙しているのなら。
それに負けないぐらいアリカのことをまず知らなくてはいけない。
ティシーは罪悪感に似た切なさを感じ、何も見えない空を見上げた。

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

「遅いな…」
と、言っては自分の言動に恥ずかしくなり、枕を殴る—それをもう何度繰り返しているかわからない。
すでに原型が怪しくなっている枕をアリカは抱きしめ、ベッドにしゃがみ込む。
（だって、しょうがないじゃないか…人といるなんて、今までなかったし…。それに、触ることもできる…あったかい…・・・って！）
まただ！
アリカは絶叫し、枕を放り投げた。
「…ありこちゃん？それはどんなスポーツ？」
アリカは全身の毛を逆立てて、急いで振り返った。部屋にはふわふわと枕に入っていた羽毛が飛び交っている。そんな中、長身の彼は不思議そうに首を傾けてアリカを見ていた。
ティシーは頭に落ちた羽を一枚拾い上げ、くすりと声を漏らした。
「だめだなあ。枕がだめになっちゃった」
アリカはティシーを上目に睨むと、ぷいとそっぽを向いた。これといって何かに怒っているわけではなかったが、どことなく腹がもやもやしていた。アリカは訳も分からず、ティシーを無視し続ける。
「遅くなって、ごめんね。何がいいか、迷っちゃった。で」

ティシーはベッドの脇にある小さなテーブルに荷物をどさ、と置くと色々なものを次々に出していく。それと同時に甘い匂いが部屋にふわりふわりと漂い始めた。アリカは無意識のうちに匂いを嗅ぎ、空腹で切なく呻こうとする腹を必死に抑えた。

「色々買ってきたんだけどねーパンばっかりだけど。ありこちゃん、何がいい？クリームパン？アンパン？それともレーズン？…サンドイッチもあるし、ハンバーガーもあるよ。飲み物もミルク、コーヒー、紅茶。好きなの選んで」

アリカはちらりと横目でそれらを見つめ、口中に唾液が広がるのを必死に抑えてまたぷいと横を向いた。腹は減っているが、何かに許してはいけないとアリカの本能が言っている。こうして何かと親切にしてくれるティシーを、アリカはまだ信用していない。

何者なのか、なぜここにるのか。話せば話すほどわからなくなるし、行動も意味不明だった。どうして初対面の自分にここまで親切にするのか。それに、手や肌に触れる。いくらアポトーシスに感染しないからといって、多少の抵抗はあるだろうに…いや、彼から抵抗の字は見えない。

普通に、人と接触している。

ティシーの前では、アリカはアポトーシスではない…そんな錯覚が起きてしまう。

でももし…と想像してみようとしたが、何も出てこない。どこかのお姫様のように誘拐される理由もないし、まだ子供なので何かをされることもない。

何もないことだらけなのに、信用できない。

それは悲しいことだろうか。アポトーシスであるうちに、誰も信用できなくなってしまったのだろうか。

どうして自分は、ここまで頭を回してしまうのだろう…アリカは自分の考えにだんだんおぼれていくのを感じた。このまま飲まれて、全てに疑心暗鬼を持って行動する…そんな風になってしまったらどうしよう…。いらない心配ばかりがよぎってしまう。

「ありこちゃん？…お腹、空いてなかった？それともパンは苦手だったかなあ」
「…あんたは、どうして…俺、俺。何も、ない…うちにお金もないし、俺も何もない…」
「ん？？」
急に不安げに声を震わせるアリカにティシーは首をかしげ、次には優しく笑った。
「いきなりどうしたの？」
「だって、俺、こんな風に、ご飯買ってもらう理由なんてない…。帝都に行くのも…」
二人の間に沈黙が流れる。ようやく床に落ちた枕の羽毛がかすかにさざめく。
ティシーは黙ってベッドに腰掛け、前かがみになった。
「ありこちゃん。そりゃね、疑うと思うよ。色々とね。君には理由が何一つわからない。僕のことも何かわからない。…でも僕はまだ答えてない。それはね、徐々に知っていけばいいことだと思ったから。今すぐ知るよりも、徐々に知っていった方が飲み込めると思ったからなんだ。すべて、すべてそうなんだ…。
だから今はとりあえず話せないけど、僕のことは信用して。僕はアポトーシスに感染しないだけじゃなく、偏見も持たない。それに今一番、ありこちゃんが信用していい人間はこの僕だよ。…ねえ、ありこちゃん」
ティシーは大きな手でアリカの頭を優しく撫でる。今にも壊れてしまいそうな、脆い頬を触る。まだ幼い顔つき、ふにゃふにゃの体…しかし頭の中は、大人よりも沢山の糸が紡がれ、膨大な「悲しみ」が詰まっている。
アリカは年齢よりも大人で、生まれたての赤ん坊よりも弱い存在だ。
笑ったり、頬を赤らめたり、怒ったり…表情は変われども、根本は孤独過ぎて人が怖くなっている。

仕方のないことなのだろうか、とティシーは目を細め、自分がよくわからない、とアリカ自身は戸惑う。
ティシーはもう一度声をかけると、手をアリカの肩に滑らせた。
「今は何もわからないと思う…でも、今はとりあえず楽しく旅をしよう。ありこちゃんの知らないものがたくさんあるから。それを知って、もっと楽しく過ごそう…今はそれだけで、それだけでいいから。ね？」
アリカは答えず、代わりにティシーの手を見た。
傷のない白い手は男の手とは思えなかったが、アリカの肩よりも大きい。すっぽり覆い隠し、骨や筋が浮かんでいる。繊細な石膏像のようで、どこか美しかった。
アリカはぼんやりとティシーの眼鏡の向こう―ターキスブルーの瞳を見詰めた。
「わ…わかった。…わかってたつもりだったけど、わかってなかった…」
「それは仕方ないこと」
「よ、よくわかんない…。…今は、ティシーを、信用しても…大丈夫、ってこと、だよね？」
アリカは恐る恐るティシーを見上げた。
彼は満足そうにうなずき、笑い声をあげた。
「ようやく僕の名前を呼んでくれたね」
「だって…変なやつなんだもん…。そんなに早く、信用なんてできないよ」
「それもそうかもね。でも大丈夫。僕は君の味方だし、すべては君に味方してくれるよ」
「何、それ」
「今は秘密」
「そればっかり」
アリカは頬を膨らまし、目をそらした。不器用な彼女なりの、信用の仕方なのかもしれない…とティシーはたまらなく嬉しくなった。

抑えきれないほどの笑顔がほとばしり、目が熱くなるのを感じる。
初めてなのに、どうしてだろうね。
それは二人のどちらの台詞でもなければ、どちらの台詞でもあった。
「ありこちゃん」
ティシーの甘い声がアリカの耳元でささやかれる。アリカはくすぐったさと、人に慣れていないのとで体を震わせ、きつく目を閉じて体をこわばらせた。
「これからもよろしくね」
言いながらティシーはアリカの柔らかい頬に口づけをし、頬をすりよせた。まるで犬のような仕草にアリカは嫌がったが、抵抗はしなかった。ティシーは再びアリカの耳元で笑い、顔を離した。
「次は口かな？」
「何が？」
「キスするところ」
「え」
アリカの目が点になるのと目の前が暗くなるのと、ティシーの髪がふわりとアリカの髪を撫でるのと…どれが一番早かったかわからない。
アリカは理解する前に体中が熱くなるのを感じ、たまらない高揚感に襲われた。今、どうなっているかはさっぱりわからない。何せ目の前は真っ暗なのだから。
なのに体はわかっているようだ。つま先から頭までぞわぞわと悪寒に似た…でも胸が満たされていくこそばゆい感覚。体と気持ちが離され、頭の芯がとろけていく。
たった一瞬だったはずなのに、アリカにはずいぶんと長い時間に感じられた。
気がつくとティシーが目の前で笑っていた。もう先にご飯を食べてしまったのだろうか、と錯覚させるほど満たされた顔でアリカはじっと見つめている。

「さて、ご飯にしようか」
「ま、ま、待って…！い、今何…」
「くふふ、さてなんでしょう～？答えれたらクリームパンをあげるよ」
「い、い、い、いら、いらない！」
アリカは口を思い切り両手で覆い隠し、壁際で丸まった。
「あは、かわいいなあ～」
ティシーだけが余裕にパンを選んでいる。
アリカはそのことが悔しくて、でもなんだか満たされていて、なのにお腹が空いていて…自分の理不尽さに怒るに怒れずただ丸まるのだった。

一章七話

報告。

アリカ・ランザート（性別：女　年齢：十四↑大人びてるよ　スリーサイズ：図ってないけど、年ごろにしては結構いいかも。ふにゃふにゃしてて気持ちいいよ。あ、でも身長は低い。僕と頭一個分以上違うから、多分１５０とかそのあたり。その小ささがいいんだよねー）

アリカちゃん（あ、僕はありこちゃんって呼んでる）と旅してまだ日は経たないけど、もーかわいくて。

添い寝してあげると嬉しそうにくっついてくるし、不安だと服の裾掴むし、からかうと真っ赤になるし、キスの耐性も全くついてないから遣り甲斐があるし、とにかく全部の行動が楽しい。小さいから頭も撫でれるし。怒りっぽいけど、それだけ反応してるってことだよねえ～。

アポトーシスの具合だけど、今のところ他人が感染している様子はなし。僕は効かないからちょっと疑問だけど、どうやら直接皮膚や体液（あ、何かちょっとやらしいね）を介して他人が触れるとアウトみたいだ。なぜなら、シーツやカップなど、本体から離れた体液に他人が触れても大丈夫だからだ。体温が関係するのか、それとも皮膚が関係しているのかは今のところわからない。

ああ、君にもわかるように言ってあげるとね。

本来のアポトーシスは手の温度と発汗による体液が他人の皮膚に沁み込むことで発病、数時間で死に到る。それは国民にも伝わってるかと思ったんだけど…やっぱりアポトーシスというものそのものが嫌われるようだね。平気だっていってるのに、存在そのものを否定する。…まあ、当たり前といえば当たり前だね。怖いし。

でもアリカちゃんのアポトーシスは多分、違うはずだ。そのための僕だし、そのために派遣されたんだけどね。それは君が命令元な

んだからわかってるよね？
今のところまだわからないところばっかりだけど、とりあえず今日はここまで。また後日送るよ。
その時にはアリカちゃんの細部までわかってたりしてね。楽しみにしててよ。
ティシー・エイルワンダー

「……」
闇夜をかいくぐり、黒い塊が一つ。月明かりを持ってしても輪郭を浮かび上がらせることのできない黒さは誰の目にも捉えることはできない。しかし黒い塊は戻るべき場所を知っている。塊は徐々に、もう一つの黒い塊に近づくと優雅に着陸し、声を発した。これでこの塊が鳥であったと確認される。
そしてこの鳥の主・リリーシア・アイリシアは足に巻きついていた手紙を受け取り、読むこと数分。
ため息しか出てこなかった。
いくら無愛想で動くこともしない、ティシーに言わせるとロボットのような彼がこのように落胆した息を漏らすのは滅多にないし、あったとしたらそれはよほどくだらなく、この世にあってはいけないものだと認識された場合だ。
リリーシアはもう一度ため息をつくと、手紙を丁寧に畳んだ。内容は恐ろしくくだらないものなのだが、きちんと畳んでしまう自分が愚かしい。
「こんな報告書…提出できるはずがない」
思わず出てきてしまった声に、鳥は同情するように鳴いて再び空に舞い戻った。

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

前回も宿というものに泊まったが、やはり家以外の寝床というの

は緊張する。ましてや、シルオアの家のようなアポトーシスばかりが集まる家とも違う、普通の一般的宿。家があるからという以前、病気を持たない人種ばかりがいるというのがアリカを臆病にさせていた。なので宿だけではない。普通の食堂や八百屋、出店ですら近付いたことはそうなかった。

加えて、隣には出会ったばかりの妙な男。

彼は寝ているにも関わらず、くふくふと笑っては寝返り打つことなくアリカの方向を見ている。起きているんじゃないか、とアリカは彼の顔の前で振ってみたが反応がなかった。

やれやれ、とアリカはため息をつくと壁にもたれかかった。

窓は大きいが、月や星は見えない。よく見ると薄らとほの暗い雲がかかっている。明日は曇りか、下手すると雨かもしれない。

空を見るのは好きだが、置いていかれるような気がする。

ごうごうと音を立てて流れる雲の行先、夕暮れ時に見せる淡い残像、暗闇に浮かぶ散り散りに浮かぶ星、瞬くことを忘れ、いつ消えるかわからない。

アリカがもう少し大人で、言葉を知っていたならそれを「焦燥」と表しただろう。

何に焦るのかはわからない。大人たちは「まだ子供だから」と慰めてくれるかもしれないが、意味はない。

彼女にとっての焦りは、おそらく自分の病気についてだ。生まれ持っての「能力」といっても過言ではない、アポトーシスという力、そして総称。

「…寝れないの？」

「べ、別に…」

いつの間に起きていたのか、それともやはり起きていたのだろうか。隣で寝ていたティシーはいつの間にか目を開けていた。うっすらと光る蛍光灯にもターキスブルーの瞳はよく輝く。今は眼鏡をしていないため、より強く見えた。

ティシーは起き上がると、アリカの隣に同じくよりかかって座っ

た。
　いつものようにティシーはこれでもかとしゃべるのかと思いきや、彼は何も言わずに同じように空を見ていた。
　アリカは少しだけティシーを見ると、同じく空を見た。やはり星も月も見えず、雲ばかりが広がっている。暗闇だというのに「雲」と認識できるほど薄く、白い。漆黒の闇じゃないんだなあ、とアリカはぼんやり考えた。
「空ってね。不思議だよ」
「ふうん…」
　何か思い立ったのか、ティシーが口を開く。
「僕たちの世界はさ、床の上に立っている状態と変わりない。だから地面から離れた上半分は空ってことになってるけど。ある人が言うんだ。世界は丸くて、空はその先無限に続いている、と」
「ムゲン…？」
「ずっとずっと、ずっと続くってことだよ。例えば、ボールがあるでしょ？ボール以外のところは全部空なんだって。…終りがどこかわかる？」
「わかんない…。うんと向こうまで行かなきゃ」
「でしょ？そういうのが無限。ずっと、ずっと、ずっと向こうまで…誰も見たことがない先がある。…不思議だねえ」
　アリカは素直に頷き、「ムゲン」と口に出して空をこれでもかと見つめる。
「今、僕たちの住んでるところは無限の空じゃないけど。…もしかすると、そういった無限の空かもしれないんだ。きっともっと未来にわかるよ。楽しみだね」
「…そうかな」
「そうだよ。楽しみ。いつくるかわからない、でもこうして取りかかりができてるんだ。そう遠くないよ」
　アリカは膝を立てて顔を埋める。ティシーは笑みを浮かべながら眼鏡を取り出してかけた。

「でもそういうのって、怖い。終りがないなんて」
「…そうかもね。終りがないって怖い。…ありこちゃんは怖がりだね。…アポトーシスも無限だって、今思っちゃったんでしょ？怖くなるとすぐに顔を伏せちゃうんだから」
「……」
アリカは黙って顔を上げて首を横に振った。無言ではあるが、否定している。怖くなんかない、無限なんてないと…本当はわかっているのに否定をする。
「大丈夫だよ」
ティシーはぽんぽん、と頭を数度叩き、わしゃわしゃとかき混ぜた。ピンクと青の前髪がぴょこぴょこ動き、ティシーは笑みを深めた。
「僕が治してあげるからね」
「え？」
アリカが向くと、ティシーはいつもの笑みを浮かべていた。猫のようににまにまとおどけて見せているのに、深いところでは優しさが揺らめく波のように静かに漂っている。ターキスブルーの瞳が、そう見せる。
ティシーはもう一度頭を撫でると、頷いた。
「そのための僕なんだから」
「…？どういうこと？その、俺のとこに来た理由？それが、ティシー？」
ティシーは黙って微笑んでいる。ターキスブルーの瞳がわずかに波紋を呼び、細めて光を消してしまった。何が真意かわからない。だが、彼は本当に治す気でいるように見えた…のはアリカが優しい人に弱いせいかもしれない。まだ心のどこかで信用してはいけない、とひそひそ話している。
「さあ、寝ようか。寝不足は肌に悪いって言うしね。寝れないなら、僕が子守唄を歌ってあげようか？」
「い…いい！な、何それ、子守歌って…！俺は赤ちゃんじゃない！」

「似たようなものだけどねえ」
「な、何」
「何でもないよ。さあ、寝て寝て」
言うと、眼鏡を置いたティシーが先に寝ころび、ぽんぽんと隣を叩く。
本当なら別のベッドで寝たいところなのだが、アリカにはお金もなければアポトーシスであり、こうして借りることさえ困難なのだ。
アリカは仕方なく隣に寝ころび、なるべく離れた。しかしティシーはアリカの意思に反してすりより、くふくふと笑って「おやすみなさい」と目を瞑った。
アリカは一人赤面し、ころりと反対側を向いて目を無理やり瞑った。そうしているうちに瞼がとろけ、虚ろな睡魔が襲ってくるのだった。

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

アリカ。よく聞いて。
お母さんはもうだめなの。…仕方ないわね。これもこうして生まれてきてしまったんだから。
ああ、小さいアリカに言ってもわからないわね…ごめんなさい。
お母さん、あなたに何も残してやれない。
残してしまったものはあるけれど…ごめんね、ごめんね…。あなたが、アポトーシスになるなんて…。
あなたはならないと、思ったのに。あなたに感染しないって思っていたのに…。ごめんね、ごめんね…。せっかく生んであげたのに、ごめんね…。
ああ、アリカ。お母さん、泣いてばかりね。
大丈夫、大丈夫よ。
だからアリカも泣かないで…お母さんもなかないから。
これは必ず起こることだったんだから。必ず。誰しも、いつか…。

お母さんは少し早かっただけだから。
だから泣かないの。泣いてはだめよ…。
…でもお母さんは心配。これから、あなたはどうやって生きていけばいいの…。やっぱり私はあの場所にいた方がよかったのかしら…使命を、ちゃんと全うすればよかったのかしら…。嫌ね。あの時はこれが一番いいと思ったのに、今思うとあれが一番よかったと思うなんて…。
今あなただけでも行ったら…いいえ、きっとあなたは可哀そうなペットになってしまう…。
アリカ、アリカ。
あの国、あの場所は…
アリカ？
アリカ！
どこに行くの！？お母さんは平気だから…これはなるべくして…
アリカ、アリカ…待って…待って！だめよ、あなたは外に出ては…どこに行くの、アリカ…。
アリカ、アリカ…お母さんのことを、助けようなんて思わないで……
アリ……

一章八話

「さあ、ありこちゃん。こっちだよ」
朝早く、二人は街を歩いていた。街全体が桃色に淡く色づく時、外に人はあまりいない。時折見かけるのは朝帰りかそれとも仕入なのか。時々旅人のような人も見かけた。
空は思いのほか天気がよく、今日は一日晴れそうな予感がしてアリカはどことなく嬉しい気持ちになった。
アリカは一息呼吸を入れると、ゴーグルをかけてティシーの元へ駆け寄った。彼は朝でも夜でもいつでも変わらず、同じようにこにこと笑みを浮かべている。
「ここだよ」
手招かれ、指をさされた場所はアリカの見たことない場所だった。見ると何頭か馬が小屋につながれ、今か今かと前足を踏みならして待っている。黄身色に染まり始めた空と同じく、毛並みが黄色く光っていた。そして隣には台車の上に小さな小屋のようなものがくっついている。そこまで目を映して、ようやくここが馬車乗り場だということばわかった。
アリカは初めて見る馬車乗り場の光景に嬉々とした表情を浮かべ、馬を眺めた。
「早いね。旅の方かなんかかい？」
アリカがあれやこれやと見ていると、奥から煙草をくわえたここの主らしき男が出てきた。日に焼けて真っ黒な肌が眩しい、がっちりとした男だった。
アリカは無条件に体をこわばらせたが、彼は彼女のことを知らないようだった。にこにこと目じりにしわをためて二人を見つめていた。
「ま、そんな感じかなあ」
「いいねえ。親子で旅？あ、兄弟だったかな？」

男はにこにこと二人を比べる。そう間違えるのも無理ないほど、二人に身長差はあった。もちろん、年齢の差もあるのでよりそう見えるのかもしれない。アリカはどう答えていいかわからず、ティシーを見上げた。
「そうかあ…兄弟っていうのも非常に魅力的だねえ」
「…何、それ…」
アリカはゴーグルの向こうで思わず目を半眼にした。馬車の男も同じようにややあきれた表情で「違うの？」と肩をおろした。
「ううーん…どうなんだろうねえ。ありこちゃんはどれがいいと思う？」
「お、俺が決めることじゃないだろ」
「んん？ありこちゃんが決めてもいいことなんだよ。僕はどれでも嬉しいしね。それに…」
ティシーはポケットに手を入れると「いや、何でもないよ」と言葉を濁した。
「それに、何だよ。気になる」
「気にしちゃだめだよ。今は秘密だから」
「…そればっかり」
アリカは唇を尖らせ、首元までぐるぐる巻かれたマントに口を埋めた。本当はそれ以上聞いてみたい気がしたが、ティシーはおそらく答えないだろう―アリカは好奇心を押さえ、黙った。
「とりあえず、馬車を隣のティティル国入口までよろしく」
「はいよ。二人で三千センスだよ」
「さんっ…！」
アリカは思わず息を飲み、急いでティシーを見つめた。三千センスといえば、一週間分以上の食費が出てしまう。果物ナイフでいったら十本は買えてしまうだろう。ほとんど持ち金のないアリカにとって、それは大金に違いなかった。しかしティシーは目を細めるだけでただ笑っている。
「はい」

そして事もなさげにポケットから金を出し、手渡した。
「手綱を引く人も欲しいかい？あと、案内は」
「いいや、特にいらないよ。馬は何度か扱ったことあるしね」
「はいよ」
男は景気よく返事をすると、奥に消えて行った。おそらく、馬を調達するためだろう。
「な、なあなあ」
アリカはティシーの上着の裾を小刻みに引っ張る。ティシーは首をかしげ、「どうしたの？」となぜかアリカの頭に手を乗せた。すっかり、定位置らしい。アリカは彼の手をどけることを忘れ、「お金！」と唐突に叫んだ。
「ん？お金がどうかしたの？」
「したの、じゃないよ！俺…三千センスなんて大金、持ってないよ…か、返せない…」
「あはは、返さなくっていいよ」
「で、でも！」
「僕にとってこれくらい、どうってことないお金だからね。それよりも、これくらいでおどおどするありこちゃんの方がよっぽど価値あるよ」
「な、なん……」
アリカはそれきり黙り、火照る顔を押さえてうつむいた。ティシーは世にもおもしろいものを見るようににまにまと、いやらしい猫の笑みを浮かべてアリカの頭をなでた。
「お待たせ！…ティティル国の乗り場はわかるか？ついたらそこに置いてくれればいいからな」
ティシーは手綱を受け取ると「どうも」と軽く頭を下げ、座った。
「ほら、乗って」
ティシーは顎でアリカを促したが、彼女はなかなか座ろうとしなかった。
馬車は初めて見るな、とアリカはまじまじと眺めた。

随分と使いこまれた木の台車に馬がくっついただけのお粗末な代物だったが、今の彼女には高級な車に見える。毛並みのよい馬は太陽の光をたっぷりとりこみ、くっきりと浮かび上がる筋肉がたくましさを見せびらかす。馬はまだかまだかと鼻を鳴らし、地団太を踏みながらアリカを待つ。

「ほらほら」

二度目の催促でアリカはようやく乗った。て慣れてないせいでおぼつき、体がなかなか乗らなかったが、転がるようにして何とか乗れた。

「では」

ティシーは軽く手綱をふるうと、馬は軽快に前に進み始めた。軽く弾むようなリズムと音は、どこかの国に流れていたマーチを彷彿させた。

「わ、わわ、わわ」

石畳で揺れるたびにがたがたと揺れる台車にアリカは緊張した…というよりも、嬉しかった。ぱっかぱっかと馬の奏でる音が楽しさをより誘う。

「お、俺、馬車に乗るの初めて…」

「嬉しい？」

「う、うん…」

アリカは頬を艶やかに紅潮させながら頷き、歩くよりも早く変わりゆく景色に軽いめまいを覚えた。

どんどん加速していく景色は互いに溶け合い、緑とも灰色とも茶色ともつかぬ色彩を織りだす。よく知る景色のはずなのだが、まるで違うように見えた。

マーブリングしていく景色を見ていくうちに、アリカはそっと後ろを向いた。

ずっと住んできた山。森、草原。小さな小屋、みんなの笑顔。母親の墓。笑い声。

全てが遠く、遠く消えていく。遠く、遠く混ざっていく。

おぼろげになる山がとたんに恋しくなったが、もう手が届かない。どんなに手を伸ばしても、掴むのは空気ばかりだった。アリカは手を広げ、ぼんやりと無感情に森を見続けた。

「…寂しい？」

アリカは答えず、森から目を離さない。

「大丈夫だよ。僕がもっと楽しくしてあげるからね」

アリカは無言で頷き、すっかり空と同化してしまった森に背を向けた。前には知らない光景ばかりが続いている。街を出た馬車が行く道は、比較的舗装されている。なのでがたがたとゆれることはなくなったが、時々石を踏んで大きく揺れた。

「これからどこに？」

「ティティル国だよ。ありこちゃんが住んでたユリアラ国の隣。ユリアラ国は自然が豊富で帝都と大分違うけれど、似たような文化を持っている。でもティティル国は違う。…あの国はね、ここよりももっと森があるんだよ。だからちょっと他の国と孤立しててね。他とは違う文化を持っているんだ」

「へえ…。ティシーって、物知り」

「あは、もっと褒めて」

瞬間、アリカは素直に言った言葉を取り返したくなった。しかし彼女の半眼にティシーは気付かず、機嫌よく手綱を波打たせ、ちらりとアリカを見た。

「変わってるよ、色々と。それはついてからのお楽しみだけど」

「でも、帝都は？」

「一直線に行ってもいいけど、どちらにしてもティティル国を経由しないとつかないからねえ。それならのんびり、見物して見解を広げてから行った方がいいと思って」

「ふうん」

アリカは足を放り出し、ぷらぷらと振りながら空を見上げた。分厚い雲の流れる空は今にも落ちてきそうなほど青く、すっかり目を覚ました太陽はさんさんと肌に降り注ぐ。かつてこんなに日を浴び

たことがあっただろうか、とアリカはぼんやりしながら目を細めた。
「気持ちいいね…」
太陽の匂いは石鹸の匂いに似ている。アリカは少し母のことを思い出す。
母の思い出は、最後の涙ばかりが残っている。
泣きながら死んでいった母。子どもを一人残してしまう悲しみと、一人で死んでしまう孤独さに押しつぶされそうになりながら、ベッドに沈んでいた。そして泣きながら子の名を呼んだ。「アリカ、アリカ…」それはアリカの耳について離れない。
もちろん、アリカも耐えれなかった。母の体が日に日に衰えてしぼんでいく姿など、見るに堪えない。
だから走ったのだ。病院へ、お医者様がいれば助かると信じて、ひたすら走った。走って、走って…走って…
パチン、とシャボン玉がはぜる音がしてアリカは急いで目を開けた。しかしシャボン玉があるはずなく、アリカは自分が白昼夢を見ていたことに気づいた。
「まだ時間かかるから寝てていいよ」
「ううん、いい。…怖い夢見そうだから」
「怖い夢？」
「うん。たまに見るんだ。…お母さんが、死んだ時の。でもあんまり覚えてない…のに、なんだか怖い」
「あは、ありこちゃんは怖いことばっかりだね」
ぱし、と手綱が揺れる。アリカは頬を膨らまし、飄々と笑うティシーの脇を叩いた。もちろん何の痛みもない軽いパンチだ。
「そんなことない！怖くなんて」
「怖い夢って言ったのに？」
「言ってない！」
アリカはぷいと顔を横に向け、頬を膨らましてすねた。ティシーは再び笑うと、手綱を引いた。馬が口元を震わせ、ぶるると顔を振りながら徐々に低速になり、足踏みしながら停止する。

「さ、ありこちゃん。ちょっと休憩しようか」
「なんで？乗ってるだけなのに」
「…馬車から下りてごらん。多分、立てないよ」
アリカは疑わしいものを見るように半眼にしながら、ゆっくり足を延ばして立ってみた。
「うわっ！」
地に足がついた瞬間、アリカはよろめいて馬車の荷台に捉った。足に力が入らない。じんじんとつま先から腰までしびれきってしまい、並行感覚がまるでわからなくなっていた。痛みはない―というよりも、痛むという感覚が消えてしまっている。
「ほら」
しかしティシーは軽々と立ち、普通にアリカに近づいた。
「ありこちゃん、運動不足じゃない？」
「う、う、うるさい…！」
それでもしびれはさざ波のようにざあ、と素早く引いていく。妙な感覚は残るものの、支えなしで立つことができた。アリカはよれよれと立ちながらティシーを睨んだ。お門違いだが、睨まずにはいられなかった。
「うん、もう立てるんなら大丈夫だね。…僕はちょっと周りを確かめてくるからありこちゃんはここにいて」
「え、でも」
「馬の番は誰がする？つなげておくから、ありこちゃんは見てるだけでいいよ。…大丈夫、すぐに戻ってくるから」
アリカは少し考え、無言でうなずいた。
「じゃあ、行ってくるね」
ティシーは素早く馬を近くの木につなげると、片手を上げて森の奥へと入って行った。
アリカは背中が消えるのを見届け、しぶしぶ荷台に上ってティシーの帰りを、空を見上げながら待つことにした。

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

ふいー、ふいー、とかすれた音がこだまする。風と木のざめきによってかき消されそうに思えるが、この笛が放つ音は非常に高音であり、一定の動物にしか聞こえない。鋭い針が風を突き抜けるように相手には聞こえるはずだ。

しばらくすると一羽の鳥が翼をはためかせながらティシーの肩に降りてきた。子ぶりではあるが、しっかりと訓練された艶やかな漆黒の鳥は慣れた様子でティシーに話かける。

「ティシー殿、何か御用ですか」

「あのねえ。この子の口を使うってことは近くにいるんでしょ。出てきなさい」

ティシーの呆れた声が終わると同時に黒い影が降り立つ。時折青に輝く黒い髪が音もなく揺れ、鋭い目が強くティシーを見据えた。動物の口を使ってしゃべるという腹話術のような特技を持つ人物は、ティシーの中で一人しかいない。若いながらも細い針を彷彿とさせる彼・リリーシアだ。

全身黒に覆われたリリーシアは指を吹き、鳥を呼び戻す。鳥は瞬時に飛び立ち、主の場所に戻った。

「いくら出るのが面倒だからって、やめようね」

「しかし、近くにアリカ・ランザートがいると思いまして…」

「大丈夫。今、馬の番させてるから。こっちにはこれないよ」

「そうですか…」

リリーシアは鳥を高く飛びあがらせると、鋭い目で「ご用は」と一歩近寄る。

「今からティティル国に入るんだけど…どう？国には通行所なしで入れそう？もしだめなら、出身者である君に口利きしてほしいんだけど」

国同士は自由に行ける…とはいえ、そう遠くない過去に戦争があった。やはり国によっては通行所を見せる場合がある。ティシーが

知っている限り、いらない国はアリカのいたユリアラ国と帝都と呼ばれる都市のあるデルティス帝国の二つ。
異文化を持つティティル国が一体どういうものかわからなかった。
「大丈夫です。ティティル国は異文化であり、多国籍ですから。しかし、ユリアラ国に行くとき通ったのでは？」
「あの時は車で一直線だったし、寝てたから知らないよ」
「はあ。…要件はそれだけですか？」
「やだなあ、冷たい言い方で。要件はまだもう一つ。…アリカちゃんの母親について。まだ情報不足？」
「はい。もう少しお待ちください」
ティシーはそう、とだけつぶやくと眼鏡を直してリリーシアに背を向けた。
「じゃあ引き続きよろしく～。あ、お金。そろそろ足りないからそれもよろしく～」
リリーシアは答えず、気配を絶ち切った。ティシーは彼がいなくなったのを確認すると、ポケットに手を突っ込んで元の道に足を進めた。
ざ、と鳥が木という木からあふれ出た。
騒音の塊が一気にティシーの耳を襲い、思わず耳を伏せた。
森がざわめき、焦っている。鳥たちはいち早く気づき、次々に逃げていく。
「な…なんだ…」
ティシーは空を見上げる。黒く点々と飛ぶ鳥たち以外に変わったものはない。
遠くで悲鳴が聞こえた。鳥を呼ぶ笛よりもずっと悲痛に、ティシーの耳をつく。
「まさか…！」
ティシーは思うより先に足を走らせた。

一章九話

馬が間近にいる、それだけでもアリカの心は高揚する。頬は嬉しそうに上気し、瞳は嬉々として輝く。アリカはゴーグルを頭まで上げると、じいっと大きな紫紺の瞳で馬を見つめた。

（かわいいなあ）

アリカにとって動物すら、避けるべき対象であった。鳥も恐ろしく、虫すら触れれない。何に対しても触れるというのは怖い。ティシーの言うとおり、アリカは怖がりだった。

しかし今はティシーのおかげというべきか、せいというべきか、恐怖を忘れていた。触れることは大分普通の行為となっている。

アリカは手袋がしっかり手に収まっているのを確認すると、恐る恐る馬の背に手を伸ばした。絹やベルベットのような高級な布を彷彿とさせる艶やかな毛並みは水をはじきそうなほど、強く強くきらめいている。

（わ……あったかい…）

手袋越しでもわかる、たくましい体温。指先からじんわりと頭、体に巡ってくる。ああ、こんなにも暖かいのかと感じると涙が出てきた。アリカは無性に嬉しくなり、何度も何度も撫でてはほほ笑んだ。

しかしそれは長く続かなかった。

馬は最初、大きな瞳を少し細め喜んでいるように見えた。アリカの喜びが伝わってるかのように見えたのはアリカの幻覚だったのだろうか。

ふとした拍子に手が滑り、ぺちりと小さな音を立てて馬の背に当たってしまった。

たった、それだけだったのだが。

ぶるるん！

馬は顔を激しく揺らし、いても立ってもいられないように激しく

足踏みし始めた。鼻水らしき水しぶきが飛び、馬は上下に暴れ始めた。
「な、な、何？ど、どうしたんだよ…！」
アリカは急いで手を引っ込め、暴れる馬の手綱を思い切り握り締めた。
しかしそれは返って逆効果でしかなかった。
馬は手綱をスイッチに、高々と前足をけりあげ、空高く飛び跳ねた。
「きゃあ！！」
アリカは思い切り目をつむり、手綱を握り締めた。
「だ、だめ！お願い…落ち着いて！」
馬は明らかに混乱していた。激しく上下する動きは止まらず、つなげていた綱と木がざわざわと不快な音を立ててざわめき始める。
「だめ、だめ！どうしたの…どうしたの！落ち着いてってばあ…」
ぶるるん！ぶるるん！
馬は鼻水を勢いよく飛ばすと、前足で地面をかき始める。アリカは不安になり、ひたすら手綱を持って「落ち着いて！」とヒステリックに何度も何度も叫んだ。自分でもわかるほどアリカは混乱し、その思いも徐々にわからなくなって自分も馬と同じように感覚を忘れていく。
アリカは焦点の合わない目で必死に馬を捉え、「だめ、だめ」と体中を戦慄かせた。
「ティシー、どこ…！馬が、おかしいよ…」
ぶるん！
ひいいいいいぃ！
弦を無理やり引いたような悲鳴が空に亀裂を走らせ、馬はついにつなげてあった綱を切り離した。同時に森の鳥たちが一気に飛び立ち、空に暗雲たる黒点をうごめかせながら塗りつぶす。
まるで地獄の開幕だ、と誰かが耳元で囁いたように思えたのは―アリカのまったくの気のせいだった。だがそう思えて仕方ないほど、

今の状況は地獄だった。
「きゃああ！！」
アリカは体中に残っていた感情で悲鳴をあげ、喉を潰す。すっかりこわばってしまった体は手綱を離すことができず、馬と共に馬車は道を暴走した。
「やだ、やだあ！だめ…助けて、助けてえ！！」
ティシー！
飄々と笑う彼の姿が頭に浮かぶ。しかしあくまで、頭にいるだけでここにはいない。アリカは幻影にすがりながら何度も名を呼んだ。

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

馬をつなげてあったはずの場所に、今は何もない。何があったのか、と思うゆとりもなく、ティシーは髪をくしゃりとつぶした。
「くそ……」
ティシーは自分でもらしくないと思うほど、焦りながらも、普段しない舌打ちをして頭を抱えた。ずれる眼鏡を思い切り捨てたくなるような苛立ちが腹の底から込みあがるが、どうしようもないと諭す冷静な自分も同居していた。
「リリーシア！」
ティシーが叫ぶと同時に再びリリーシアの黒い影が浮かび上がる。そして彼はわかっているとばかりに一度頷き、状況を淡々と説明した。
「どうやら馬が暴走したようです。アリカ・ランザートは馬車と共に引きずられてます」
「わかっているなら止めろ！」
「しかし、命令がありません」
「命令命令と…。お前は僕の監視役とアリカの安全の確保だろう！どうして見ていた！」
ティシーの眼鏡の奥に潜むターキスブルーの瞳がつりあがり、眉

間のしわが醜いまでにリリーシアを睨む。リリーシアは普段見ない彼に動揺しながら、改めて態度を引き締めた。
「す、すいません…！しかし私がそれを把握した時にはもうすでに…」
「言い訳はいらない」
ティシーは冷たく言い放つと親指の爪を噛んだ。
「なら、僕に四君子を貸せ。どうせあいつらも僕を監視してるんだろう？」
「今回は同行していません。…それにそれはティシー殿の権限に入っていません」
ティシーはもう一度舌打ちをすると、ようやく眼鏡を直した。自分がここまで取り乱すなんて、と冷静な自分が怒りに震える本能を鎮火させようと試みる。だが、今は怒りの炎の方が上のようだ。ティシーは髪をかきあげると、リリーシアを睨んだ。
「なら、リリーシア。お前がアリカを追跡しろ。僕も馬の痕跡をたどりながらついていく。…いいか？アリカに何かあってみろ。お前の首を飛ばすぞ」
一体どこから声がでているのだろうか。凄みのある低い声は相手を恐怖で麻痺させる。少しのことではまるで微動だにしないリリーシアも震えあがり、返事をすると同時に姿を消した。
気配が奥へ続く道へと素早く移動していることを肌で感じると、ティシーは馬をつないであった木に近寄った。
なるべく太くて頑丈なものを選び、さらに綱できっちり締めたはずだった。ほどけないようにと、何度も結び目を作ったはずだった。だが根底が違った。
切れた、綱。ぶっつりと断ち切られた綱は人の力では到底できる技ではない。それに踏みならされた地面に残る馬の足跡はばらばらで、土がえぐられている。
（どうして馬がそんなにも暴走を…？馬車の馬はおとなしくて、そんなに暴走しないはずだが…）

胸がざわめいた。森から飛び立つ鳥たちの音に似たノイズ。黒点が徐々に胸を侵食し、不安という塊を作る。
（とにかく、追いかけよう）
ティシーは綱を捨てると、幸いにもくっきり残っている馬車の跡を辿った。
（ようやく会えたんだ…ようやく！…僕もつくづく、運のない男だ…。とにかく、無事にいてくれれば…）

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

どれくらいの時間が経過したかわからない。ただ、体はしびれ切っていて動くことができない。手は感覚を失っているくせにいつまでもぎゅっと、手綱を掴んでいる。
朦朧とする意識の中、アリカは虚ろな紫紺の瞳で手綱を持つ手を見続ける。
暴走する馬は鼻を鳴らし、死にそうなほど息を吐き出しながら森の道を走った。一応舗装されているとはいえ、砂利道だ。それでも幸福だったのは、道が一本道だということだ。脇にある森に行かない限り、どこかで落とされてもティシーの元に戻ることは可能だった。
（どうして…俺、何もしてないのに…）
疲れ切った自分の声がどこからか聞こえる。街の人たちに殴られた時の衝撃が、体中に襲った。痛みと嘆きとあきらめ。もう何でもいいやと、死に近い沈黙の声。
ついに動物にまで蔑まれるのか、とアリカは冷静に判断した。それであきらめ、気力を失って手綱を離せばよかったのだが、手は離れなかった。
がたたた、と荷台が激しく揺られる。もう少ししたらタイヤが外れてしまうかもしれない。それでも馬は止まらず、ひたすらまっすぐ、まっすぐ暴走する。

がたただたた！
痛みを伴う震度が小さな体を容赦なく襲う。
「った……。・・・！」
アリカは自分の目が音を立てて見開かれていくのを聞いた。
震動とは違う震えが体中を駆け巡る。例えて言うなら、針だ。針が血流に乗って全身を襲う。
「やだ…やだよ…」
アリカは手綱を握りしめて離さない手を見て首を振る。じんわりと緋色の斑点が広がっていく。手袋の色は元々黒だ。なのに浮き上がる、戦慄の赤。
「だめ…だめ…」
アリカはつぶやきながらも、急いで手を離さなきゃと手を開こうとした。しかし硬直した手はなかなか剥がれようとしてくれない。
「だめ…お願い…」
アリカは他ならぬ自分に懇願する。自分の手に何度も、何度も言い聞かせる。なのにぴくりとも動かない。
「お願い…！」
誰よりもこの血の意味を知っている。アリカは自分の血の恐ろしさと脅威を覚えている。それが何かは、手の甲に浮かび上がる紫色の烙印が嫌でも教えてくれる。
アポトーシス。
その名を聞けば誰もが逃げる、呪われた言葉。異文化を取り入れているというティティル国ではそれを「呪詛」と呼ぶ。
たった一滴、それが滴るだけですべてが「決まる」。
「早く…！」
アリカは力を振りしぼり、手を無理やりこじ開けようと試みる。がちがちの手はどこまでも自分の手ではないように、頑なに開くことを拒否する。
それでもこの手を離さなければ、血はやがて手綱を伝って馬に降りかかるだろう―いや、その時を待たなくても、かすかな血が振動

で吹き飛び、馬や―最悪、道行く人に降りかかる可能性もある。幸い、今は誰もいないがもう少ししたら…。
アリカの脳裏に最悪の出来事が浮かび上がる。
触れた瞬間、皮膚がとろけていく。じゅうじゅうと、熱で溶けるのではない。ぱしゅ、と水音を立てていとも簡単に崩れさるのだ。だが、一瞬ではない。じわりじわりと舐めるようにいやらしく、溶けていくのだ。その時、誰しもが苦痛にうめき、叫び、罵倒し、呪いの言葉を降り注ぐ。
ヒトゴロシ！
徐々に溶けていく自分の体を眺めつつ、人は自分の作った水たまりで死ぬのだ。最後の最後まで痛みを伴いながら！
「お願い…！それだけはだめえ…！」
非常事態だというのにティシーの顔がふいに浮かんだ。アポトーシスではないのに、触れても大丈夫な人間。アリカにとって、始めて自ら触れてくれる人間。
「助けて…助けて、ティシー…！怖いよお…」
馬が止まる気配はない。暴走が収まる様子もまるでない。台車はきゅりきゅりと悲鳴をあげ、不安定な道をさらに不安げにひたすら走る。
がが、がご、がこっ！
がこ！
「きゃあ！！」
大きな石を踏んだのか、台車が激しく揺れた。吹き飛ぶように跳躍し、小さくて華奢な体が無造作に放り投げられる。
「…！！」
アリカは声にならない悲鳴を喉であげ、意識が暗転する間もなく地面に叩きつけられた。
ざ、とすべるように体は砂利道をすべる。マントで体は防御できたが、守られていない頬に石が食い込む。
だがアリカを襲うのは痛みではなく、恐怖だ。

落ちると同時にアリカは急いで体を起こし、ばらばらに砕け散った台車を目で追った。タイヤ、木の板、破片、ちぎれた綱―いつの間にか手放したらしい。手がちりちりと痛む―そして、馬の―

「ああ…ああああ……」

落胆と悲鳴が同時に重なり、アリカは弱弱しく地面に伏せて石を握った。思い出したように手が痛む。綱でこすられ、擦り切れて穴があいた手袋の向こうに、茶色く変色した血の跡が見える。

アリカはもう、目を追うことができなかった。その先にあるのは、地獄だ。地獄の液体が砂利道に滴る。

いつ、感染したのだろうか。手綱ににじんだ血だろうか、それとも細かく飛んでいたしぶきだろうか。涙だろうか、汗だろうか…！

アポトーシスであっても、希望は少しだけ持っていた。

多少なら、大丈夫。少しだけなら大丈夫。これなら大丈夫…大丈夫、大丈夫。…少しぐらいなら、大丈夫だと勝手に妄想を抱いて自分を慰めていた。

しかし今日、改めてわかった。

少しでもいけないのだ。アリカからにじみ出るものはすべてだめだった。すべてが人を溶かしていく。馬などの動物すら。

アリカは泣きながら体を引きずり、道の脇にある木によりかかった。せめて自分が道に転がるごみにならないよう、体を丸めて木と同化する。

「！」

それすら、願うことは無理だったのか。

やぶれた手袋をはずし、地面に手をついたそこから、草花が散った。

細胞が違うせいか、溶けはしなかった―しかし枯れた。意味は、同じだ。

命を奪っている。

「ああ…」

アリカはもう何も言えなかった。これが真実なのだ、と知るだけ

だ。
　自分の手を見つめ、握りつぶす。でも血が出てしまったら、さらに被害が及ぶ。…アリカは自分で死ぬこともできないのだ。溢れる血こそが、全てを死に至らしめる。
「わあ！何だ、このありさまは」
「本当…何かあったのかしら…盗賊…？」
　アリカは顔を急いであげ、砂利道の音を聞いた。
「あ、あら？あんなところに子供が…」
「おーい、坊主。大丈夫か？」
　夫婦のようだ。もう大分年のように見えるが、まだまだ現役とばかりに張りのある動きでアリカに手を振る。
　アリカは足腰の立たない体で慌てふためき、虫のようにがさがさと無様に逃げようとした。しかし彼らの方が早く、一歩、また一歩とにこやかに近づいてくる。
「どうしたんだ！盗賊に襲われたのか？」
「あなた、怪我してるみたいよ…」
　逃げる体が木にぶつかった。そしてまた彼らは一歩、すぐそこまで近づく。
「だめ…来ちゃ、だめ……だめ、だめ…」
　アリカは呆然とつぶやきながら、逃げる。なのに彼らは優しく言うのだ。もう大丈夫、怖い人はいない。自分たちは安全だよと、手招く。その手はアリカにとって―いや、彼らにとって地獄なのだ。手に触れた瞬間―彼らは前方にある馬のようになる。夫婦は馬の水たまりを見たのだろうか。自分たちがこれからそうなることを知っているのだろうか…
「来ちゃだめえ…だめ、だめ…」
　アリカにもう、意識はない。壊れてしまった頭で、思いつく限りの否定を口に言わせる。
「ほら、大丈夫だから…」
　手が伸びる。悪夢の手が。

だめ、だめ、だめ…
「こっちに…」
「だめぇ！！俺、アポ―」
あ―
何の音だったのだろうか、それとも声か。
ぱちゅ、と水音がかわいく鳴る。小さな生き物の産声のようにか細く。
全てが一瞬の出来事だった。
血に染まる手に触れた手は、溶けた。
ちゅるちゅると、聞きなれない水音を立てて、地面にずるずる沈んでいく。
「きゃあああ！！！いやああ！！！」
男の片手が消えた時、隣にいた女が悲鳴を上げて地面に伏せった。
「違う…」
何が違うんだろう。アリカは自分に問いかける。
「違う…」
こんなはずじゃ、違う、俺は、ただ…助けを。…助けて、助けて…ほしかった。
アリカは再び無様に手足を動かし、這いずりながら逃げた。逃げなければ、また人が死ぬ。
どうして、どうして、どうして。
どうして。
行き場のない疑問と悲しみが体からあふれ出しそうになる。鼓動は痛いほど繰り返し、息は生ぬるい。時折鼻をつつくのは何の匂いだろうかと考えて、すぐに遮断する。
もう、無理だ。
アリカは手足を止め、森の中で伏せた。
何の音もしない。
何の声もしない。
助けた自分が愚かだったのだ。

もう目覚めたくない。

アリカは一心に目をつむり、暗鬱たる世界に意識を飛ばした。

一章十話

アリカ・ランザートについての報告（簡易版）。
アリカ・ランザートは特殊なアポトーシスであり、その体液は通常のアポトーシスよりも濃度が高い。
これは母親がエイルワンダー研究室（以下、ラボ）で造られたためだと憶測される。
―しかし母親のアポトーシスは弱く、自らの体を巣食うもの（失敗作）だった。どういう組織でアリカ・ランザートが生まれたのか、不明。なお、父親はわかっていない。現在も行方不明。
アリカ・ランザートの所在がわかった時点ですでに母親は他界。その際、アリカ・ランザートは病院を感染させている（助けを求めに行き、暴走したのではと少ないながら証言がある）。当時の人たちはほとんど感染したと思われる。同時に村八分となり、今日に至る。
―通常のアポトーシスではここまで至らない。憶測ばかりの報告だが、おそらくアリカ・ランザートの血が原因と思われる―
この研究は現在も継続―

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

「ティシー殿！」
カラスの口を借りたリリーシアが空中から叫ぶ。
「アリカ・ランザートの場所がわかりました。もう１００メートルほど行った先の左側にある森にいます」
「わかった」
ティシーはカラスを見ずに頷き、髪をかきあげて速度を上げた。眼鏡がずれるが気にしていられない。
何度も夢見たアリカをせっかく公式に見つけることができ、こう

して出会えたのだ。
幼いころから夢見たものが、すぐそこにある。
（見つけたら…仕方ないけど、遠回りせず帝都に行こう。ありこちゃんは僕に慣れる前に、アポトーシスのことをどうにかしなくちゃいけない…）
ティシーは拳を固め、奥歯をかみしめた。
（僕のこととか…アポトーシスの本来の出生…。全部わかったら、ありこちゃんは僕を…）
嫌うかもしれない、と流れる汗と共に思考が流れる。今以上の歩みもなく、触れあうこともないかもしれない。今のような一方的な思いは、一方的どころか思うことすら許されないかもしれない。
そうしたらティシーの夢は壊れる。
（それは嫌だな…）
でも仕方ないと思う部分もあるが、それ以上に捨てきれない想いがある。
（今は考えるべきじゃない…）
ティシーは唾と共に膨らむ嫌な想いを飲み込み、息を軽く切らしてひたすら走った。砂利道のため、石が足に当たるが気にしない。
一本道である街道は国を結ぶ経路なのだが、人が誰もいない。後ろから迫る気配もなければ前からくる様子もない。それどころか森から生き物のさえずりすら聞こえない。まるで四角い箱に閉じ込められたような錯覚にティシーは襲われた。
馬が暴走し、アリカは引きずられた。おそらく…いや、当然けがをする。そうしたら…
ティシーは走りながらも冷静な自分を引っ張りだす。
（ありこちゃんの血は猛毒どころじゃない…ただでさえ、濃度が濃いんだ。触れたら…）
ティシーはその先の想像をやめた。もしかするとこの人気のなさは、アリカが人を溶かしたからかもしれないと思うとぞっとしないが、その想像もやめた。

「ティシー殿、そのまま左へ」
再びリリーシアの声がカラスと共に旋回した。おそらく、リリーシアもアリカがいる付近にいるのだろう。カラスは指し示すようにくるくると森の一角を回っている。
「わかった」
ティシーは速度を落とし、足を止めた。とたんにどっと頭から汗が吹き出し、肺が痛みを伴うほど酸欠を訴えていた。しかし苦しんでいるゆとりはない。ティシーは額の汗を乱暴に拭い、痛む喉に唾を送った。シャツがべったりと肌にくっつく感じが気持ち悪かったが、それよりもアリカが心配でたまらなかった。
ティシーはゆっくり足を運ばせる。街道とは違い、道外れの森は何の手も加わっていない自然そのものだ。一歩踏み出せば大げさな音を立てて枯葉や細い枝がぱきぱき鳴る。
「ありこちゃん?」
ティシーは木に手を付き、辺りを探る。カラスが鬱陶しいほど鳴き、ティシーを呼ぶ。
一歩一歩、足もとの感触を確かめつつ、進む。カラスの鳴き声が止むと同時にティシーは小さな体を見つけた。
「ありこちゃん!」
葉に埋もれるように、華奢な体が埋まっていた。気力も体力も使い果たしたのか、ティシーの声にアリカは気付かない。ただぐったりと、地面に顔を伏せている。
ティシーは急いで近寄り、抱き起した。異様に体が冷え切っていた。
泣いていたのだろうか。頬は濡れ、土が付いていた。ティシーは丁寧に服の袖でアリカの顔を拭った。ある程度奇麗になったが、アリカからにじみ出る悲愴感は取れなかった。
ティシーは何度かアリカを呼んだが、起きなかった。呼吸は規則正しく動いているため、危険はないようだ。外傷はとあちこち観察してみたが、手と膝がすりむけているだけで大事はないようだった。

「ティシー殿」
葉が揺れ、リリーシア本人がティシーの隣に立った。
「街道に馬車の残骸がありました。馬の姿はありません」
「…ありこちゃんのアポトーシスの力が働いたんだ」
「こんな短時間で？」
「ありこちゃんのアポトーシスは特殊なんだ。だから帝都としては彼女を保護したい。…僕はそうじゃなくても、保護してあげたいんだけど…」
徐々にアリカの体に温かさが戻る。ティシーは安堵の息を漏らし、アリカの額をなでた。
リリーシアはその姿を鋭い目で見つめ、小さく口を動かした。
「そろそろアリカ・ランザートが目を覚ます。私は近くに潜みますから、何かあればまた呼んでください」
「わかった。目が覚めたら、とりあえずティティル国に向かう。すぐそこだしね。その後は…帝都へ急ぐ」
「了解しました。車でいいですか？」
「ああ。もう馬車はいらない」
了解、とリリーシアは言うと姿を消した。
「ありこちゃん…」
ティシーはぐったりと腕に静まる華奢な体に力を込め、唇をかみしめた。

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

アリカは一つ、ぼんやりとだが思い出したものがあった。
母親が死んだ時の記憶だ。
あの時も、見てしまった。いや、犯してしまった。体中に流れる毒を、罪も何も知らぬ人に振りまき、無差別に惨殺した。
母親に助かって欲しくて。もっと生きてて欲しくて。だから例え、母親もアポトーシスで通常の病院では受け入れてくれないのを承知

で。アリカは走って、助けを求めに行ったのだ。たった一掬いでいい、希望が欲しかった。
だが病院は受け入れるどころか、アリカを汚物のように扱った。医者たちは排除しようと…いや、医者だけでなく患者までもがヒステリックにアリカを拒絶した。傷つき、痛みで朦朧としながらもアリカは医者に助けを求め…求めた結果は、人殺しの烙印。
「っあ―」
アリカは夢で泣き、現実で目覚めて呻いた。久々に呼吸をするようで、肺が収縮していてうまく機動してくれない。息を吸いたいのに、体はなかなか受け付けてくれなかった。
「ありこちゃん？」
目の前いっぱいに心配そうに眉をひそめる顔が広がっていた。それが誰だか、アリカは認識できなかった。夢の続きかもしれない、とおぼろげに目を凝らす。
「わかる？僕だよ、ティシー」
「……てぃ、し…」
それは誰だったか、とぼんやりしているとティシーは大きな手の平でアリカの頭をなでた。異様に暖かく、優しい手つきにアリカは安堵の息を漏らして目を瞑った。まるで湯船に浸かっているような温もりが懐かしかった。
しかし意識は徐々に回復し、先ほどの光景を巻き戻し、アリカに見せる。人殺しの烙印を思い出させるため、触れるだけで呆気なく命を奪う存在だと知らしめるため。
アリカは目を大きく開き、もがいた。
「やだあ！だめ、だめ！俺に触らないで、近寄らないで…！！」
小さな手がティシーを拒絶し、瞳がおびえながら涙をためる。
「触らないで！」
どん、と手がティシーの胸を殴り、アリカの体は腕から転げ落ちた。その様子をティシーはスロー再生するように瞬き一つせず、呆然と眺めた。

「ありこちゃん…大丈夫だよ。僕は感染しない。もうわかってるよね」
アリカは両手で頭を包みこみ、力いっぱいに首を振った。
「僕は、ちゃんとありこちゃんに触れれるようにできてるんだ…だから」
「だめ！」
ティシーが伸ばした手をアリカはやはり拒絶した。ティシーはじん、と痛む手をさすり、ターキスブルーの瞳で見据えた。アリカは自分自身を押しつぶすように体を縮ませ、そのまま消えてしまいそうだった。
「どうして…何かあったの？」
「俺…また、人を、殺した…！俺、あの時も…お母さんのときだって…！」
「でも僕は死なない」
「嘘だ……！また死んじゃう、みんな…！」
アリカは小さく丸まりながら泣いていた。嗚咽で震え、声をつぶす。
ティシーは眼鏡をそっと取ると、ゆっくりとアリカに近寄った。
「大丈夫。僕は絶対に、ありこちゃんのアポトーシスで死なない。…あれだけじゃあ、証明できなかった？触れるだけで、わからなかったかなあ…？」
ティシーの声がどんどん低く、苛立ちにも似た刺々しいトーンに変わる。それでもアリカは聞いているのかすらわからない、拒絶を見せるだけだ。
「ありこちゃん」
ターキスブルーの瞳が薄暗い森で強く光り、大きな手が再び伸びるが、先ほどよりも威圧的だ。手に何か含んだように、力があった。
「！」
アリカは無理やり体を引き寄せられ、拒絶する間もなく手をつかまれた。先ほどの手と同じ人物かと疑うほど、今のティシーの手は

氷のように冷たかった。
アリカは目を見開き、眼鏡越しじゃないティシーの瞳を驚きながら見つめた。
「ほら、大丈夫」
ティシーは見せつけるようにアリカの手のひらを自分の顔に近づけ、傷口をなめた。アリカは忘れていた痛みに目をつむり、小さく呻いた。
「僕はね、ありこちゃんのために作られてるんだよ」
「…どういう…意味…」
アリカの声は脅え、震えていた。努めて優しい声をティシーは出しているようだが、いつもとは違う冷たさが含まれていた。
ターキスブルーの瞳が鋭く光り、顔から小さな手を離した。
「ありこちゃんは…僕が信じれない？僕は確かにたくさん秘密があるよ。…でも、君に触れても大丈夫。僕は君たちアポトーシスに触れることができる、唯一の人間だから…」
苛立ったトーンのまま、ティシーは早口に言うとアリカの唇に食いついた。唐突なことにアリカは動くことができなかった。血と泥の味が口中に広がり、ぬるりと何かが侵入してきた。
「ふう…！」
アリカは何か言おうと思ったが、ティシーの舌にふさがれて力を入れることすらできなかった。徐々に抜けてく力とどうしていいかわからない状況にアリカは混乱することすらできない。涙すら乾き、瞳はうろたえた。
「んっ！」
ティシーの顔が離れたと同時に、次は背中に痛みが走った。葉と土がクッションになっているため、そこまで痛みはなかったが、なぜそうなったか理解できなかった。
「ありこちゃん」
上から声が降る。ティシーの手がアリカの顔のすぐ横につき、大きな体が覆いかぶさる。ティシーという名の檻に入れられたような

錯覚がアリカを襲い、自然と涙があふれた。この気持ちは、きっと、怖い。アリカは初めてティシーという存在自体に恐怖を覚えた。人間を殺してしまう恐怖ではない、一人の人間に対する畏怖。
「どうやったら証明できる？もっとキスしてあげようか。それとも今すぐここで抱いてあげようか？」
「なっ…！」
「どうやっても…どうなったとしても、僕は溶けないようにできている」
アリカは迫るティシーの顔から逃げるように横を向いた。固定された体はそれ以上もがくことはできなかったが、隙あればすぐに逃げ出せるように力を込めていた。
「なんて」
ふいに重圧が消えた。瞬間、アリカの体は防御するように丸まり、顔を伏せた。
「…冗談だよ」
ティシーの声が元の優しいトーンに戻った。アリカはまだ引きずる恐ろしさを抱きながら、ゆっくりと顔を上げた。ティシーの体はもう離れ、隣に座っている。
「ありこちゃんがあんまりにもおびえるから、からかいたくなっちゃった」
「え、あ、」
アリカは声を出せず、目を見開いてティシーを見つめた。先ほどのことが嘘だったように、彼の姿は元の飄々とした人間に戻っている。
「あは、大丈夫？」
呆然とするアリカの手を取り、ひょいと自分の膝に乗せる。そのまま後ろから抱きつき、顔を寄せた。
アリカは拒絶することを忘れ、最初に感じた優しいぬくもりに体を預けた。
「ごめんね。…だた、本当に僕は大丈夫だってことを教えてあげた

かったんだ」
　アリカは答えれず、ぼんやりとうつむく。
「…今からユリアラ国に行くよ。少し待てば帝都から車が来るから、それに乗って帝都まで行こう。もう遠回りはやめたから…僕のことも少し早く教えてあげることができる」
「車…？」
「そう。車。…帝都についたら、教えてあげる。…さあ、行こう。…ありこちゃん」
　灰色の髪がアリカの顔をくすぐる。アリカは目を細め、ティシーにわからないように息を漏らした。
「一緒に行こう」
　アリカは無言で頷き、目を瞑った。
　今は触れても溶けない人物がいる奇跡に喜ぼう、とアリカはほんの少しのぬくもりを味わった。

一章十一話

「わあ…！」
アリカは思わず感嘆をあげ、辺りを見回した。見たことのない服をまとった人々がきらびやかに、しとやかに歩いている。
ユリアラ国に一歩入っただけでわかる、異色の匂い。花のような柔らかい香りではない、どこか土に似た深い香ばしさが漂う。それは彼らが着る―ユリアラ国のみで発達している独特の服「着物」とよく合っていた。歩くたびに裾が返り、鮮やかな色がほんのわずかに顔をのぞかせる。たったそれだけなのだが、アリカにとっては驚くべきことだった。
「どう？すごいでしょ」
「う、うん…」
アリカは素直に頷いたが、手の温度が気になって仕方がなかった。
不安と恐怖、そして再び人を殺めてしまったショックで震えていた体はもうおさまっていた。発狂したくなる心は、どうにかティシーのつなぐ手によって抑えられているが、こうして人の目につく場所にくると恥ずかしくなる。
アリカはどう言っていいかわからず、おろおろと手とティシーを交互に見るが、彼は手を離すつもりはまるでなさそうだ。にこにことといつもの笑顔を浮かべ、遠くを見つめている。
「まずは服を買いに行こうか。そのままじゃあ、辛いでしょ？」
「俺は…別に…」
「だーめ。うーんとかわいいの買ってあげるよ」
「そ、そんな…。…いらない」
ふと、アリカの表情が曇った。手から力が抜け、自然に離れた。
アリカは許していない。人を殺してしまった、自分自身を。喜んでもいけないし、ましてや何か買うなどという行動は、罪に思えて仕方がなかった。

ティシーはそれを表情ですぐにわかった。罪悪感で満ちた表情は、悲しみを越して死相が浮かび上がる。ティシーは眼鏡を光らせ、軽く上げて直した。
「ありこちゃんのせいじゃないんだ。そんなに落ち込まないで」
「でも…それが、事実だ」
「そう？事実は意外と違うところにあるよ。そもそも、アポトーシス自体が…」
ティシーはそこで言葉を区切ると、もう一度眼鏡を中指で押し上げた。
「とにかく。ありこちゃん、笑っててね。かわいいから」
アリカは息をのみ込みながら押し黙り、顔を赤くして俯いた。ティシーは満足そうに笑うと、再び小さな手を取って歩み始めた。
「ティシーは…ここに、来たことあるの？」
「あるよ。何度か。通りがかるだけだけどね。ここはユリアラ国と帝都を結ぶ国だからね。その割に異文化なんだ。不思議だよねえ…どうしてこんなに異色なのか」
「うん…」
アリカは頷き、きょろきょろと珍しそうに辺りを見回した。
黒髪や藍色といった深みのある髪色、同じように深い瞳。それでいて真っ白な肌は神秘的だ。モノトーンに抑えられた髪や瞳に、艶やかな着物は不思議とよく似合っていた。ぱっと最初見た時は、あまりの原色に驚いたが今はそれが返っていいように見える。
「あと、ありこちゃん。後でだけど、君に会わせたい…というか、帝都までの案内をしてくれる人を紹介したい」
「え？」
「大丈夫。怖い人じゃないし、ありこちゃんのこともよーくわかってるから。それに僕の言うことは今のところよく聞くし」
アリカは首をかしげ、ティシーの瞳を覗いたが、彼の瞳は笑うばかりでそれ以上何も言わない。
「ティシーの知り合い？」

「うーん、近いかな。今すぐ呼べるけど…その前に服だね。ふりふりのかわいいのにしようか…それとも着物にしようか。いいねえ、迷うねえ」
「な、なんでティシーが迷うんだよ…それに服は」
「いいからいいから。あ、あっちにあったよ～。早く行こう」
ティシーは子供のように瞳を輝かせ、ぐいぐいと引っ張っていく。途中、何人かが振り返ったが、アリカを幼く見たのだろう。仲の良い兄妹を見るような暖かい目で、みんな見つめた。
（俺、アポトーシスなのに…）
しかしアリカにとって、その視線は恐ろしさに変わってしまう。いくらぱっと見てアポトーシスとわからないでも、手には烙印が刻まれている。人を溶かす奇病を持つ、ということは変わらない。そしてそれは人々にとって恐怖の対象。
「ありこちゃん？」
「う、ううん、何でもない…」
でもティシーといれば、それなりに普通の人間に見られる。たったそれだけでも嬉しい、とアリカは密かに口元を緩めた。
胸にたまる氷が一つ一つ溶けていく。人に触れるたびに積り、呵責の念で冷たく固まる強固な氷も、少しずつ。

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

「ありこちゃん、出ておいでって」
ティシーは期待に満ちた眼差しでカーテンの向こうをじいっと見つめる。
「や、やだよ！だって、こんなの…」
カーテンがもじもじと揺れ、アリカはか細い声で消え入りそうな文句を言う。
「俺…」
「それともうまく着れないの？じゃあ僕が着せてあげようか？」

「いい！」
「じゃあ自分で着てね。じゃないと…覗いちゃうよ」
「う、うう…」
アリカは呻くと、もそもそと服を広げた。
ファッションについて、アリカは全く詳しくない。流行りがあるのかどうかもわからない。ティシーが選んできたのは、デコレーションケーキのようなフリルがありとあらゆるところにふわりとついたドレスのようなものだった。真っ白ではなく、少し黄色がかかっている。ますますクリームのようで、アリカは見ているだけで顔が赤らむのを覚えた。
（こんなの…着れないよ！）
アリカは叫びたい気持ちを抑え、服を抱えた。ふと目の前にある鏡を見る。高揚した自分の顔が映った。
そしていつの間にか消えている罪悪感を思い出した。
（俺…人、また…。なのに、遊んでる）
酷い。残酷。醜悪。鏡に映る自分が恐ろしくてそれ以上見れなかった。一体どこに懺悔していいかわからず、ぷっつりと思考が途切れてしまった。
「ありこちゃん？」
カーテンが揺れ、ティシーが顔を出した。
「わ、わ！」
アリカは急いで意識を戻し、振りかえった。
「あ、開けないで！」
「だって…遅いから。やっぱり着せてあげようか？」
「い、いいって…それに、俺…こんなの着れないよ…」
「じゃあ他の服持ってきてあげようか？」
「そ、そうじゃない…。…俺は…、アポトーシスの力で…人を…」
ティシーの大きな手がそっと、優しく口をふさいだ。アリカはゆっくりと顔を上げると、そこには待っていたように優しい笑顔が浮かんでいた。

「そういう話は、今はなし。…懺悔は後にしよう？それに、そのことは…ありこちゃんのせいじゃない。…さあ、着よう着よう」
手がするりと離れたかと思ったが、ティシーはそのままアリカの服に手をかけた。
「だ、だから…！お、俺…一人で」
「遠慮しないで～」
「す、するよ…！それに、俺こんな服…」
「かわいいから、着てみてよ～」
「う、うう…」
結局アリカはティシーの着せ替え人形となり、何度も何着も着させられるのだった。アリカはへとへとになったが、ティシーはきっとそれなりに元気づけてくれているのだろうと考えなおし、素直にこの状況を喜ぶことにした。

何十分と時間が経ち、服がようやく決まった。全身を覆い尽くす格好をしていたアリカだったが、今は露出がだいぶ増えていた。丈の短いキュロット、チョコレート色したシャツに胸より少し下まである短いジャケット、そして水色のストライプ柄の長い手袋。靴も黒いエナメルのストラップタイプ。今まで着たことのない、ボーイッシュだがかわいらしい服だ。
アリカは何か言いたそうにティシーを上目に見たが、彼は大いに喜び「かわいい」を連発してその場で金を払った。
一体どういう生まれの人なのだろうか、とアリカは違う意味でティシーを疑い、そして小さな声でお礼を言った。たったそれだけのことだったが、ティシーは嬉しそうに笑った。
「うん、最高にいいよその服。やっぱりありこちゃんはちょっと男の子っぽい感じの方が似合うね」
アリカは答えに詰まり、ただ唸った。
「さて…。買い物も済んだから…。そろそろ呼ぼうかな」
「え…」

「さっき言ってた、案内人。本当はこっそりついてくるだけでよかったんだけどね…帝都に行くって決めたし、今のうちに紹介しておいた方がいいかと思って」
「？？」
「ちゃんとわかるようになるから、とりあえずもうちょっと裏の方に行こう」
ティシーは首をかしげるアリカの背中をそっと押し、人気のない方へと連れていく。
徐々に人声は小さくなり、やがて聞こえないほど静かになる。ざわざわと森だけが賑やかくささやいていた。
「ちょっと待ってね」
ティシーはポケットから小さな笛を取り出すと、ふぃーふぃーと二回ほど拭いた。鳥のような音色はなく、空気が抜ける間抜けな音だけがあたりにこだました。
「すぐ来るよ…ほら」
ティシーが空を指差すと、空から黒い塊が下りてきた。
「カラス…？」
アリカの周りをぐるぐるとカラスは旋回し、ティシーの肩に止まった。
「ああ、リリーシアくん？今からありこちゃんに君のことを紹介するから、姿見せて」
ティシーはカラスに語りかけると、カラスは「かあ」と返事を返しながら森の方へと消えていった。そして同時に黒いシルエットが浮かび上がり、アリカは思わず悲鳴を上げそうになった。
シルエットは次第に青年の体、顔つきになり、アリカはますますおびえた。
「大丈夫だよ、ありこちゃん」
突如現れた人影にアリカは無言で混乱し、ティシーをじっと見つめた。
「そんなに見ないで。かわいいから。…彼はリリーシア。…僕の監

視役だよ」
「監視…って？」
「僕を見張ってる人。というか、お守みたいなものかなあ？…彼が帝都まで連れてってくれるから」
「でも」
アリカは恐る恐るリリーシアと呼ばれた青年を見上げた。監視役と紹介されたが、まだ若いように見えた。どちらかというとアリカに年は近いだろう。どこまでも黒くシビアな雰囲気のする青年は鋭いナイフのような釣り目をしている。時折光る黄緑がかった瞳で眼光はさらに増す。身長はティシーの方がだいぶ大きかったが、無言で睨む目は大きさ関わらず、強く威圧してくる。
アリカは思わず目をそらし、両手を固めた。
対するリリーシアは何も言わない。何も言わないことが、返って恐ろしかった。
「リリーシアくん…何か言わなきゃ、ありこちゃんが怯えるよ」
ティシーは呆れて肩をすくめたが、彼は中々口を開かなかった。
「仕方ないなあ…。ありこちゃん。彼はね、帝都を影で支える人…みたいなものだよ。たまにこうして僕のお付きをしたり、お偉いさんの護衛をしたりする」
「ティシーは…偉い人？帝都の…」
「うーん、当たってるような違うような。それは帝都についたら教えるね。ともかく、リリーシアくんは無口で愛想がないだけで怖い人じゃないから。…で、リリーシアくん。車は？」
「あちらの方へ」
アリカはようやく彼の声を聞いた。見た目通り、抑揚のない冷たい声をしていた。
「じゃあ、ありこちゃん。早速行こうか」
「うん…」
「大丈夫。車は怖くないよ。それに帝都も。それに僕がついてるから」

「う、うん…」
アリカはおどおどしつつも頷き、ちらりと自分の国がある方に目を向けた。
家を離れて数日、そして今からもっと遠くへ。
どんどん遠ざかる懐かしい匂いに目を細めたが、それ以上にティシーの手が暖かった。
アリカは、引っ張るティリーの手を握り返しつつ、帝都への思いをじんわりと胸に灯した。
…例えその手に烙印があろうとも。

第一章　終

二章一話（前書き）

帝都についたアリカたち。新たな出会い、そしてティシーの正体とは？徐々に明らかになっていく、黒い疑惑。

二章一話

遡ること二十年前。一つの争いがあった。
原因ははっきりしないが—ある一説によると、一人の人間が井戸に毒を投げ入れたことが発端だという。事実、国の半分が何らかの病に侵され、何十人という死人も出た。被害はそれだけではなく、病に侵された人が他人に触れると、相手に病を感染させてしまう…そういった連鎖が起き、人々は混乱した。
陰謀だ、と誰かが叫ぶ。
戦おう、と誰かが手を上げた。
往復だ、と誰かが武器を手にした。
終わりにしよう、と誰かが人を撃った。
そうしてたった一ヶ月間、ままごとのような戦争は行われた。
それによる被害は少ないが、利益はあった。国としての、だ。国民はのたうつだけ。
味をしめた国の王たちは、それから定期的に戦いをするようになった。たった一か月の、他愛もない争いを。ままごとよりもリアルのない、幻想の中で生きる戦争を。
だが実際、彼らの心は曇っていた。
あわよくば…相手が死にますように。そして国を、我が手に。
その真実を知る者は自分だけ。
そしてもう一つの恐ろしい真実を知っているのは…本人すら気付かないところにあった。

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

デルティス帝国—帝都は世界のありとあらゆる蜜を吸い、どこよりも大輪を咲かせる発展国だ。それは道を見るだけでわかる。舗装された藍色の道はひび割れどころか土埃すら積らぬ、つるりとした

少し光沢のあるコーティングが施され、人が通った気配すらない。立ち並ぶ家々も空を突き抜けるかと思うほど高く、壁も染み一つない。
通る人々全てが傷一つない衣服を身にまとい、朗らかに笑い合う。ピンク色の頬で楽しそうにしゃべり、悠々と道を歩いていた。
アリカはそういった些細なことでも、一つ一つが新鮮に見えてしかたがなかった。自分の国とはまるで違う、砂糖菓子のような高級さにめまいを覚えた。
ただでさえも車という高級なものに乗っているのだ、アリカの気持ちはどこにどう飛んでいいかわからなくなっていた。
しきりに窓を見ては感嘆を漏らすアリカに、隣に座るティシーは軽く笑った。
「ここが帝都。賑やかでしょ」
「うん…！」
「全部のいいところかい摘んで持ってきてるしね。それに戦争があって、経済もものすごく潤ってる」
アリカはティシーに振り向き「なんで？」と首をかしげた。
「うーん、ありこちゃんには難しい話だから詳しくは…うーん、また今度ね。とにかくここは何でもあるってこと。…ほら、城が見えてきたよ。この国のトップが集う場所だ」
アリカは言われて正面を覗き込むように見ると、そこにはきらびやかな宮殿のようなものではなく、うっそうと葉に覆い尽くされた壁が空と大地を遮断するようにそびえていた。
まるで人を拒絶するかのように作られたそれは、城というより要塞に近い。
アリカは顔を曇らせ「なんだか、怖い」とつぶやいた。
「大丈夫だよ。僕もあそこに住んでるけど、中は結構きれいだし、広いし。ご飯もそこそこおいしいから、住みようによっては快適だよ」
「え？ティシーは、そこに住んでるのか？」

「そうだよ」
「じゃあ…、ティシーは、やっぱり偉い人…？」
「うーん、どうだろう。そうとも言えるし、言えないし…。まあ向こうに行ってからね」
ティシーは笑うと、不安げに目を潤ますアリカの頭をなでた。その表情が一瞬曇ったように見えたのは、アリカの気のせいだったかもしれない。気がつくと彼はターキスブルーの瞳を緩ませ、アリカの頬に唇をつけた。
「うう…」
「はは」
そのままわしゃわしゃと髪を回し、ティシーは前を向いた。
運転席は城から用意された見知らぬ人物が座っていたが、助手席はリリーシアが乗っていた。彼はいつも通りの無愛想顔で乗っていたが、幾分か緊張しているらしくずっと同じ姿勢で固まっている。本来なら外からついてくるはずなのだが、面倒だからとティシーの考えでここにいる。
ティシーは鼻で軽く笑うと、彼の名前を呼んだ。
「連絡はしてある？」
「はい、もちろんです。つき次第、ダルテ様のところへ行きます」
「わかった。…ああ、面倒だなあ」
「ダルテ…さま…？」
アリカは慣れない様子で「さま」と発音し、居心地悪そうに姿勢を直した。ティシーは「ああ」と頷き、にっこりとほほ笑んだ。
「この国の一応の元帥―トップで…かな。本当はそのダルテっていう人のお父さんがトップなんだけど戦争でね…ちょっと体をこじらせちゃって。今、指揮をとってるのは彼女なんだよ」
「王様は？」
「いるけど、国の象徴みたいな感じだからね。最終的な決定は下すけど、詳しく細かく国を刻んでいくのはその下につく、元帥―そしてその下に五人の配下がつく。アルファ、ベータ、ガンマ、デルタ、

イプシロン…そしてその下に、下にって、続くわけ。別に覚えなくていいよ」
アリカは眉間にしわを寄せながら考えてみたが、いまいち把握できなかったので次の言葉を口にした。
「女の人なんだね」
「そう…いかつい名前してるけど、一応。すっごい下まつ毛で鬱陶しいよ」
「え？」
「はは、何でもない。見ればわかるよ。…ささ、早く進めてね」
ティシーはちらりと細い目で運転手を見据え、笑いながら後ろのシートによりかかった。
「俺、偉い人たちに会うの？俺を呼んでるって…本当？来たことない場所なのに…」
「行けば…わかるかな」
「なんだか、曖昧…」
「ふふ」
ティシーは何も言わずただ笑い、足を組んで目を瞑った。
車は城の門までたどり着いた。壁が倒れてきそうなほど立ちふさがり、空を隠す。恐らく年中日陰であろう場所に警備が二人立ち、車に近寄って来た。運転手は二、三、会話を交わすとさっさと窓を閉めて、車専用と思われる簡易扉から入った。
中に入るとしばらく鉄の道が続く。街とは違う、機械的でオイルの匂いが漂いそうだ。所々錆びた部分がより、工場っぽさを示す。
一本道の先に「城」と呼ばれる長方形の建物が建っているが、門と同様、要塞に見える。街で見た時は近くに見えたが、実際は車で数分とかかる場所に建っていた。それほど大きく、無機質に立ちそびえている。
アリカは無意識に唾を飲み込み、徐々に緊張で踊り始める胸を押さえる。
伸びる日影が車を包み、やがてスピードを落とし、止まった。運

転手とリリーシアは素早く降りると、後ろの扉をすぐに開けた。
「ありがとう」
アリカは恐る恐る会釈をしたが、運転手は城のように無感情に頭を下げるだけだった。そして言葉なく運転席に戻ると、いそいそと扉を閉めた。三人が出たことを確認し、車は元来た道を走って行った。
「ここ…？」
「そう、城だよ」
二人は同時に見上げた。アリカは初めて見る建物に目を丸くし、ティシーは逆に目を細めた。彼は顔は笑っているが目は無感情だった。
「さあ、行こうか。…じゃあ、リリーシアくん。ごくろうさま。一足先に行ってて」
「了解」
リリーシアは言うと同時に姿をくらます。文字通り消えるように姿は見えなくなり、風のように気配も消えた。
「どうやって、姿を？」
「さあ？僕もよく知らないんだ。…さて、行こうか。ちょっと歩くけど平気？」
「大丈夫。あ、でも…手は、その、いいから…」
アリカは両手を固め、さりげなく伸ばしてきたティシーの手を避けた。彼は残念そうに首を傾け、ポケットにしまった。
「じゃあ、行くよ。はぐれないようにね」
アリカは頷き、ティシーの隣を共に歩いた。

城の中は見たことないもので埋め尽くされていた。入口には金や朱で細かく細工された紋様がびっしりと埋め尽くされた扉があり、くぐると床は一面赤い絨毯で埋め尽くされていた。壁には傷も染みもなく、常にオフホワイトを保っている。そして規則正しくメイドや軍服であろう、しわ一つない正装をした人々が行きかう。まるで

現実帯びない光景に、アリカはただ驚くばかりだった。
　無言でそれぞれの行動をする人々の中で、唯一一人の軍人がティシーに気づいて手を上げた。
「よ、ティシー」
「ラグ」
　ティシーも軽く手を上げて近寄った。どうやら知り合いらしく、ティシーの表情は珍しく優しさよりも本来持つ男らしさのようなものが滲み出ていた。
　ラグ、と呼ばれた男は気のよさそうな人物に見えた。ティシーと二三会話を交わし、肩や背中をたたき合う。その会話はアリカには聞こえなかったが、様子を見る限りでは親密で楽しそうに見えた。
「じゃあ、後でな」
「ああ」
　ラグは忙しいらしく、そのまま駆け足でどこかへ行ってしまった。
「知りあい？」
「そんなものかなあ。腐れ縁ってのもあるけど。…本当は紹介してあげたいんだけど、何かと忙しいらしくてね。…さあ、僕たちも急ごう。せっかちだからね、ジョオウサマは」
「？」
　ティシーは何か含んだ笑みを浮かべ、慣れた様子で奥へ行き、階段を昇った。
　しばらく入り組んだ道を歩き、気がつけば人が全くいない場所に出ていた。アリカは不安そうに見まわし、目の前に立つ豪華な扉を見つめた。最初に見た扉よりは随分と小さいが、細工は鮮やかだ。いかにも、何かが襲ってきそうで恐ろしかった。
「ここだよ。ちょっと堅苦しいけど我慢してね。すぐに終わると思うから」
「うん…」
　ティシーは二回ノックすると、ゆっくり扉を開けた。
　そこには開けたドーム状の空間が広がっている。まるで大きなボ

ールを詰め込んだような、きれいな弧を描いた天井が印象的だ。そして扉の真っ正面―アリカたちが立つ、ちょうど目の前に椅子に座った女がいた。
微動だにせず、凛とこちらを見据えている。厳しい目つき、だが柔らかそうな髪。男のような凛々しさと女の色香がうまく交り合い、抗いがたい美貌を作りだしていた。
しかし眺める間もなく、ティシーは声をあげた。いつもよりも凛と引き締まり、太い声だった。顔も緊迫して張りつめ、飄々とした軽さは微塵も見当たらない。
「ティシー・エイルワンダー。ただいま帰りました」
「隣にいるのは、アリカ・ランザートに間違いないな?」
声がすぐに返ってくる。目の前に座る人物からだった。
アリカはじろじろ見すぎない程度に見、あれがダルデという人物だと認識した。思ってた以上に、厳しい棘を持っているように見えた。
「間違いありません」
「…わかった。おい、お前たち。席をはずせ」
椅子を中心に広がっていた騎士たちは一斉に敬礼し、決められたかのようにそれぞれ順番に外に出ていった。
出ていく足音の余韻が続き、そして全く音が消える。
最初に口を開いたのは、目の前に座るダルテだった。
「やれやれ。堅苦しくてまいるよ」
それは先ほど、淡々としたトーンで言っていた人物とは思えないほどの柔らかい声だった。男らしさは幾分か消え、女らしい独特の高い声がドームに響く。
ティシーは肩をすくめて笑い、近づいて行った。アリカはどうすることもできずその場をうろうろしたが、ティシーは「大丈夫だから」と相変わらずの笑みで言うだけだ、仕方なくついていく。
近づくと、ダルテという人物はぱっと見た時に感じた印象以上に美しいことがわかった。どこをとっても非の打ちどころのない、整

った顔立ちだった。派手な目鼻立ち、形のよい唇。そして目のやりどころに困るほどよいスタイル。国のトップとしているだけでなく、女としても支障のまったくない美貌を持っていた。
「アリカ・ランザートか。…なるほど」
ダルテは大きなグリーンの瞳でアリカを下から上に舐めるように見つめる。そしてふ、と笑って手を差し伸べた。
「私はダルテ。ダルテ・エンビスだ。一応、元帥とかいう位置にいるが気にしなくていい。父上が回復するまでの、仮の地位だからな。気軽に呼んでほしい」
「え…え、あう…」
アリカはどうしていいかわからず、ティシーの影に隠れた。その姿を見て、ダルテは笑った。
「緊張してるのかな？」
「君が意味もなくにこにこしてるから、取って食われるのかと思ってひやひやしてるんだよ」
ぎろり、と擬音が出るほどダルテは目をティシーに動かした。
「ティシー…貴様は相変わらず嫌味なことを」
「はは、そうムキになるなよ、下まつ毛」
「誰がまつ毛か！貴様…誰に口利いてる！仮にも元帥だぞ、元帥！」
「誰にって君に話してる以外に誰がいる？ねえ、ありこちゃん」
アリカは答えれず、二人を交互に見た。
「い、いいのか？そんなに、言って…」
その問いにティシーは投げやりに手を動かした。
「いいのいいの、どーせ幼馴染だし」
「でも地位が違うだろう！」
そこではたとダルテは気づき、いつの間にか浮き上がっていた腰と固めた手をほどいて椅子に再び座った。
「ふふ、つい熱くなってしまった…。全く、毎度くだらない」
「本当だよ」
「誰のせいだ」

「さあ？」
とぼけた会話が続き、アリカはぽかんと口を開けた。
ダルテは苦虫をつぶしたような顔をすると、ため息をついた。
「私とこいつは腐れ縁でね」
言いながらダルテは苦笑し、空いている椅子を指差した。
「まあ、ちょっと座って話そう。お前からも聞きたいことが山とあるから・・・」
そこでダルテはたっぷり嫌味を含み、上目にティシーを睨んだ。
「なあ？ティシー公爵」
ティシーは何も言わずに口だけ微笑んだ。
ターキスブルーの瞳が強く瞬き、アリカは呆然とティシーを見つめた。

二章二話

アリカは目を丸くしたまま硬直している。ぽかんと口も開いたまま、見上げる。

その様子を見てティシーは照れたように頬を赤らめた。

「あは、やっだなー。そんなの誰かが適当につけた名前みたいなもんだって」

「あほ言うな。立派な貴族だろう、お前」

「元帥～、冗談はまつ毛だけにしてくださいよ～」

「殴るぞ」

「どめすてぃっくばいおれんす、なんだから～」

「いつから身内だ」

「腐れ縁もここまでくれば身内でしょ～」

アリカが硬直している間に、あらかじめ決まっていたかのようにテンポのよい二人の会話が続く。嗚呼言えばこう言う、といった具合に言葉はかっちり組み合う。腐れ縁と嘆くのも頷けた。

しかしティシーのことについて、アリカは未だ頭が受け付けてくれなかった。

「ティシーが…貴族？」

彼は唇に手を当て、考える仕草をしているがその表情はにやにやと猫のように笑っていて真意がわからない。

代わりに、額に手を当てて項垂れるダルテが口を開いた。その顔は疲れ切り、苦笑いを通り越して引き攣っていた。何とも言えぬ、女王のような美貌を持ちながら彼女の表情はコミカルに動く。

「アリカ・ランザート…こんなやつをお前の元へ行かせて悪かった。苦労しただろう？」

「い、いえ…」

ちらりとダルテは顔をあげた。ふわりと揺れる髪の隙間から呆れた目が覗いた。普段からどういった言動でティシーが彼女に接し、

彼女は彼のことをどう感じているかすぐにわかる瞳だった。アリカはつられて困った笑みを浮かべ、無言で首を傾けた。
「こいつは昔っから変なやつでな…人をからかってばかりいる」
「ダルテがすぐに反応するからだよ」
「うっさいぞ。…というか、ティシー。お前、自分の素姓を明かさずにアリカに接したのか？」
ダルテは顔をあげ、ティシーとアリカの顔を交互に見る。
「そうだよ。だって、貴族ってなんだかいやらしい響きでしょ？ぼかぁ、そういうのは好きじゃないし、身分も嫌い」
「お前の好き嫌いは聞いてない。…そんなのでよくついてきてくれた。感謝しよう、アリカ」
アリカはおどおどしながら頷き、上目にダルテを見た。
「あの…お、俺…、何でここに呼ばれたのか、その…よくわからない…」
瞬間、ダルテはティシーを睨んだが、彼はいつものにやにやした笑顔を浮かべるだけだ。ダルテは舌打ちすると、ため息をつきながら肘をつき頬を乗せた。
「全く…。お前の行動は訳がわからん。…まあ、色々と報告は聞いてるからな…はあ…。今日のところはとりあえず休むといい。続きは明日にしよう。…ああ、アポトーシスだからと気を使わなくていいからな」
ダルテは歯切れのよい快活な口調で言うと、少し疲れた（ティシーのせいだが）笑みを浮かべ、もう一度アリカに手をさしのばした。アリカはもちろん脅え、両手を胸の前で固めた。だがダルテは微笑んでいる。
「私もアポトーシスの類は感染しない」
「え？」
アリカは今に目が落ちるのではないかと心配したくなるほど、またも目を開いた。しかし目の前のデルタは非の打ちどころのない、どこか男らしい満面の笑みを浮かべている。不安はないよと言うよ

うに。
　アリカは手を伸ばしたかったが、代わりに服を握りしめた。そんなことはない、きっとまた感染する…
「ティシーと同じだ。私も感染しない。触れる程度には、という意味だが。…まあ、いきなり…しかも初対面の人に言われても困るな。それに…色々とあっただろう？」
　アリカは何も言えず、ゆっくりと頭をおろす。
「徐々に仲良くなっていこう。これから…もしかすると長い付き合いになるかもしれないからな。…さて、話はこれくらいにしよう。ティシーはアリカを部屋に。その後私のところへ。…話がある」
「了解、元帥」
　おどけるようにティシーは言うと、立ちあがってアリカの手を取った。その行動にダルテは眉をひそめ、ほう、と声なく口だけ動かした。
「じゃあ、後で」
　ティシーは一度だけ振り返ると、ダルテに不敵な笑みを投げつけた。その姿を、ダルテは消えるまで微動だにせず見つめた。

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

　再び無機質な廊下をアリカとティシーは手をつなぎ合って歩く。しばらくは無言だったが、何人か通り過ぎ、入り組んだ迷路のような廊下を曲がったところでアリカはゆっくりと顔を上げた。その先には嬉しそうに飄々と歩くティシーの顔がある。彼は何も変わらず、街を歩くようにのんびりと廊下を歩く。
「ティシー…」
「なあに？」
　変わらぬ返事にアリカは一瞬黙り、俯いてからもう一度顔を上げた。
「どうして、最初から貴族って言わなかったんだ？元帥のことも…

全部」
「んー、そうだねえ…。僕は確かに貴族の生まれだけど、まあ、ちょっと微妙でね。それにかわいくないでしょ？貴族とか公爵って響き。僕には似合わない」
「そんな…変なの。ティシーは、かわいいとか…かわいくないとか、そういうの…ばっかり」
「ふふ、だって、そうだからね。ありこちゃんはかわいい」
アリカはいつものことだと思っていても顔が赤くなるのを覚える。いつの間にか馴染んでいた手の温度もとたんに恥ずかしいものとなったが、抜け出すことはできなかった。
ティシーは笑い、目を細めた。
「それに…貴族だと、気張っちゃうでしょ？いらない気遣いしちゃうし、きっとありこちゃんも疑う。元帥なんて言っても、突発的でなんだか妙に思えない？」
「そう…かなあ。俺…ティシーが何も言わない方が、疑った」
「じゃあ今は疑ってなあい？」
「それは…」
言葉を飲み込むと、目をそらした。疑っているわけではないが、信じ切ってもいない自分が確かにここにいた。手をつなぐこともこうして話すことも、信じれるはずなのだが心のどこかが痛い。何よりもアポトーシスとしての痛みが全身をくまなく突く。心を安らげるなと、罪悪感がささやいた。
アリカは首を軽く横に振ると、目を細めて前を向いた。知らない道ばかり続き、知らない人々ばかりが行きかう。
「でも…貴族でも、元帥でも…俺がここにいることが、よくわからない…」
「それはダルテが話してくれるよ。僕も。もう少し話すよ…色々と。…ねえ、ありこちゃん」
珍しくティシーの声が固い。浮かれた声ではない、大人の声にアリカは驚いたように急いでティシーを見た。

彼は笑っていたが、目は遠く、どこかを強く睨んでいた。一瞬怖いとも思ったが、ターキスブルーは泣いているようにも見えた。瞳と光がそう見せている、とアリカは思いながら目をそらした。
「僕は誰よりもありこちゃんの味方だからね。僕は絶対にありこちゃんを裏切らない」
「え…何？」
ふと、暖かいものが手から流れ込んだ。見るとティシーは、とろけそうな笑顔でアリカを見つめていた。
「僕を、信用してくれる？」
アリカはティシーに見入り、その場に立ち止まった。暖かいのはきっと本当だけど、やっぱり溶かせない何かが胸にある。アリカは何か答えてあげたかったが、その答えが見つからなかった。
ティシーはそれ以上何も言わず、一瞬だけ手に力を込めると歩き始めた。
アリカは心の中でティシーに謝り、どうして謝っているのかわからないでいた。
でもあの瞳は真実そのもののような気がした。
少しは…いや、信じてしまいたい。アリカは胸が苦しくなるのを覚えた。

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

ノックが二回、部屋に響いた。
「開いている」
相手が誰か確認せずに返事を返す。ノックのタイミング、回数、間…ずっと聞いてきた音だ。聞きちがえることなどない。
「あいっかわらず、薄暗い部屋だね」
減らず口を叩きながら、ティシーはひょいと軽く入って素早く扉を閉めた。ダルテは無言で肩をすくめると、肘をついて顔を乗せた。
「お前の口を縫い付けてやりたいよ」

「わあ、それは新しい拷問かい？よくやるねえ、女王様」
「…本気でやるぞ」
ダルテは半眼で睨み、まばたきをした。ばさ、と音が聞こえてきそうなまつ毛は彼女の特徴であり、ティシーが得意とする嫌味の根源の一つだ。
ティシーはにやにやと笑いながら近くのソファに腰掛け、足を組んだ。
「…アリカは？」
「僕の部屋にいるよ。大丈夫、ちゃんと待っている」
「それはよかった。だが…身分も何も言わずに…それに随分と手なずけたようだな。…どういうつもりだ？」
「わかってるくせに。もちろん、愛情だよ。ありのままの僕で、ありこちゃんに接したかったんだ」
「…そうか？」
ダルテは両肘をつくと、顔半分を覆い隠すように指を組んだ。薄暗がりに光るグリーンの瞳は真面目にティシーを見つめ…いや、睨んでいる。
「…そうやって、自分を正当化しようとしてるんじゃないか？罪から逃げようとしてるんじゃないか？確かにお前のせいではないが…しかしお前はアリカをだましている」
「難しいこと言うね」
「茶化すな。…ひどいやつだ。単なるエゴだろう。…第一、お前は愛情表現を知ってるのか？」
ティシーは声なく笑い、歪ませた。苦笑とも怒りともつかない、どこか自嘲気味な歪みだった。
「知ってるとも。…かわいすぎて、虐げて潰したくなる。…愛情だろう？」
「…歪んでる」
ダルテは言葉を吐き捨て、目を机に落とした。
「子供にそんな気持ちの悪いものを押し付ける気か。お前の本性を

知ったら、アリカはどうするかな」
「どうもしないよ。それに僕はあの子を裏切らない」
「どうだか。…何も話してないくせに、よく言う。自分の素姓はおろか、アポトーシスのことも、そしてお前の根底も。あの子は何も知らないまま、きっとお前から離れられなくなる」
は、とティシーは鼻で笑った。どこまでも嘲るような笑い声だった。
「本望だね。僕から離れられない、可哀そうなアリカ。何も知らない、哀れなアリカ。僕だけが真実さ。…一番望みたい形だね」
「やっぱりお前は…歪んでる。昔から、何も変わらない…」
「そう、僕は変わらない」
ティシーは足を組み替えた。姿勢が直された瞬間、彼の顔がいつものにやけ顔に戻る。ダルテは見なれているとはいえ、恐ろしさすら感じる変わり身の早さにため息すら付けず、目を伏せた。
「まあいい。そんな話をしたかったわけじゃない…」
ダルテは眉間に手を当て、軽く揉む。そしてどっと、深いため息を腹の底から吐き出した。
「これで要のアリカを無事保護できたわけになるが…他の国の動きがどうもおかしい」
「それって、僕に言うこと？ラグあたり呼んできたら？」
「ま、まあもちろん他のやつにも言うが…とりあえず、お前に言っておく。友人との他愛もないおしゃべりだと思って聞いてくれ」
「その割に深刻そうで嫌なんだけどなあ…」
ティシーはだるそうに頭をかくと「で？」と眼鏡を光らせた。
「最近、アポトーシスばかりを狙った誘拐とやらが流行っているのを知っているか？」
「ん？あー…あー…どっかで聞いたことがあるような」
「流行ってるんだよ、実際。今のところこの国で。…そして最近、隣の国へ頻繁に行きかう馬車が出てるそうだ」
「わかりやすい、人身売買だねえ」

「だろう？私としては食い止めたいと思い、四君子を派遣したんだが…残念なことに、その馬車は単なる荷物運びでしかなかった。もちろん、人の気配はないかと探したが…」
「シロ、かあ」
二人は同時にため息をつき、ダルテは椅子によりかかった。
「シロにしても、おかしいことは違いない。それで今、調査中だ。…アリカも気を付けなければならない。もしかすると…」
「戦争の道具に使われる」
「御名答」
ダルテは指を立てたが、表情は曇っている。それはティシーも同じで、彼もまたどこかうんざりとしている。
「そのためにも、今回の実験は成功しなくてはならない」
「ありこちゃんを使って…ね」
「彼女が最も適していて…最も特殊で、我々の…父上たちの汚点でもあるからな。…辛いだろうが、少しずつ彼女に話して、理解してもらわなくてはならない…。戦争で、悲劇が怒らないように」
「悲劇？」
とたんにティシーは大声で笑い始めた。突然のことだったが、ダルテは慣れている。彼の突発的で奇異な行動は、昔からだ。それに、皮肉なところも。苦痛なまでに歪んださまも。
「戦争に悲劇も喜劇もないよ。あるのは死体と金！…哀れになったね、ダルテも」
「お前好みだろう？」
「だめだよ。もっともっと、可哀そうでなくちゃ。一人の人間しか信じられないような、ペットみたいな…それ以上に残酷な人に」
ターキスブルーの瞳が歪んだ。細く尖る先に誰がいるのだろう、とダルテも目を細めたが彼女には見えなかった。
「狂ってるよ、おもしろほど」
ダルテは誰に言うこともなくつぶやき、目を瞑った。

二章三話

ティシーの部屋は物がほとんどなかった。簡単なクローゼットと異様に広いステンレスのディスク、難しそうな本がいくつか並ぶ背の高い棚、そしてアリカの腰掛けるベッド。ほんのりと生活の空気が流れるが、長いことといた形跡はない。ぱりっと白く広がったシーツもよそよそしい。

アリカは緊張しながら自分の膝を見た。

帝都に来た理由もわからなければ、元帥という国のトップに出会う必要もわからない。どうしてここにと疑問ばかりが浮かぶ。

それに、とちらりと顔を上げた。黒い影が一人立っている。

（話し相手にって、ティシーが呼んでくれたけど…）

彼、リリーシアは先ほどから一言も言葉を発さない。切れ長の瞳はティシーとどこか似たような雰囲気はあるが、こちらの方が冷たい。エメラルドグリーンの瞳はきれいだが、どこか怖い。

（どうしよう…）

ティシーはダルテに呼ばれたまま、もう一時間近く経つ。早く戻ってこないかとアリカは居心地悪そうに膝を動かし、唇をなめた。

「アリカ・ランザート」

突然、リリーシアが口を開いた。端麗な見た目とそぐわぬ、深く低い声にアリカは肩を震わせた。

「は、はい…」

「もうすぐ、ティシー殿が来る。私はこれで失礼する」

リリーシアは会釈もなく、姿をゆっくりと消していく。徐々に透明になる様をアリカはひたすら驚きながら見つめるが、種も仕掛けもわからない。

リリーシアの姿が消えると同時に、扉が勢いよく開いた。

「ありこちゃん、おまたせ～」

明るい声が飛び込む。とたんにその場の空気が軽くなり、アリカ

は胸をなでおろした。
「あれ？リリーシアくんは？」
「ティシーが来るからって、どこかに。…あれって、どうやって消えるんだ？」
「ん？ああ」
ティシーは軽く辺りに目くばせし、リリーシアがどこにもいないことを確認した。そしてアリカの隣に座り、ぴったりと肩を寄せた。相変わらず暖かいティシーのぬくもりが伝わり、アリカは顔を少し赤らめる。
「あの子はね、忍びの者だからだよ」
「シノビ？」
「ティティル国独特の職業。スパイみたいなものだよ。こっそりついて来てはこっそり消える」
「ふーん…」
アリカは首をかしげながらもまばたきをして頷く。
「それと…。俺、こんなところに来て…それに、ティシー、公爵なのに…」
「そんなこと気にしないでって」
言いながらティシーはアリカの頭をなでまわす。
「詳しいことは追々言うけど…僕とは普通にしてて。ダルテとも、気軽にしゃべっていいよ。厳しいように見えて、案外甘い部分があるから」
「？」
「幼馴染でねえ…色々わかるんだよ。…さて、お腹空いた？」
「そ、その前に…もう一つ」
アリカはぼんやりと、女元帥の姿を思い浮かべる。そして彼女の仕草、言葉を思い浮かべる。ダルテはティシーの言うとおり、堅く見えたが、どこかフランクで無邪気なところがある。現にアリカに手を差しのばした—
「ダルテ様も…ティシーと同じ、アポトーシスが効かないって…本

当？」
　ティシーは優しくアリカを見つめ、無言でうなずいた。
「…でも、彼女が言ってた通り多少効果があると思う。僕は全く平気だけど、ダルテの場合…長時間は無理かな？…まだわからないところがあるけど。…でも平気なのは違いないよ」
「どうして？どうして…」
「信じれない？」
　アリカは首を横に振り、求めるようにティシーの瞳を覗き込む。
「ううん。もう…わかってる。ティシーは、俺の力は効かない。…でも、俺…今までそういう人を見たことがないから…」
「…そう、だね」
「もう一つ…聞いていい？」
「いいよ。あは、ありこちゃんがいっぱいしゃべってくれて嬉しいよ」
　ティシーは心底嬉しそうに笑っているが、それがアリカの疑問だった。
「どうして…そんなに優しいの？」
　出会ってからずっと優しいティシー、旅先でもずっと守ってた存在。アリカにとって唯一触れることができる、自分が普通の人間でいれる存在。普通、そんなにも近づくことができるだろうか？確かにアリカはまだ小さく、彼は大人だ。大人が無条件に子供をかわいがるように、ティシーもアリカをかわいがっているのかもしれない。しかしそれでも疑問だった。こうしてここにいる以上に、謎だ。
　ティシーという唐突な存在が先立ってしまったため、ずっと忘れていた疑問だった。気持ち的に落ち着いてきたからこそ、今さらの疑問が浮かび上がった。
　アリカはじっとティシーの瞳を見つめてみたが、彼が何を思っているかまるでわからなかった。
　ティシーはゆっくり口を開くと、アリカの手に触れた。
「それはね。…僕はずっと前にありこちゃんに出会ったことがある

から」
「本当に…？」
「そうだよ。君が…そうだなあ。生まれる前から」
「え？どういうこと…」
ティシーはそれ以上何も言わず、アリカの頬に唇をつけた。
「そ、それにどうして…いつもそんな、」
もう何度となくされたキスでもアリカは恥ずかしくて仕方がなかった。そして森での出来事を思い出し、さらに赤面した。人を殺めたショックですっかり消え去っていた唇の感触やティシーの味が蘇ってしまう。
「んんー？どうしたのかなあ、ありこちゃん。急に赤くなって」
「な、何でもない！」
「そう？」
「そう、だよ…！」
アリカは逃げるように顔をそらし、唇をかんだ。両手は行き場をなくし、ひたすら握り固めている。
ティシーの息が耳にかかる。彼は笑いながら、後ろからアリカを抱きしめた。
「そうやってかわいいこと言うから。からかいたくなるんだよ」
「俺、そんなこと言ってない…！」
「そうやってムキになるところがかわいいの。ふふ、耳まで真っ赤」
ぱくりとティシーはアリカの火照る耳を口に含んだ。アリカの体がびくりと一瞬震え、小さな呻きが聞こえた。
「な、何してるんだよ…！や、やめて…」
「やーだ」
ティシーは余裕たっぷりに笑うと、唇をゆっくり首筋に移動させた。ティシーの冷たい唇が移動するたびにアリカの体はびくんと痙攣し、泣き声のような呻きが漏れる。
アリカは混乱気味に体を動かし、何度もやめてと声にしたが、彼の行動は止まらなかった。自分でも無意識のうちに体をこわばらせ、

きつく目をつむっている。一体何が起こっているのか、わからなくなってくる。心臓がエンジンのように体を熱し、フル回転する。心音が、ティシーに聞こえそうなほど大きく波打っているのがわかった。

「僕の部屋はね。他の人たちがいる部屋よりも大分離れてるんだ。所謂、離れだねここは。用事がないかぎり、誰も来ないんだよ」

ティシーはゆっくりとアリカの指に自分の指を絡める。舌先がアリカの頬をなめた。彼女は泣いているらしく、少ししょっぱい。

「あう…」

「このまま、食べちゃいたいな」

「な、な、なに、な、言ってるんだ、よ…！」

緊張で呂律の回らないアリカは少しもがいたが、ティシーの腕は思いのほか強く、抜け出せない。

何で、という思いがアリカの胸に広がる。

信じれる、信じられないじゃない。ティシーというそのものが、わからなかった。

「や、やめようよ…！」

自分から出た声は思いのほかかすれていてた。囁くような声にティシーはすぐ耳元で笑う。

「どうしてそんなに嫌がるの？」

「だ、だって」

ティシーの力が少し弱まったので、アリカは両手で彼の体を押しのけた。距離を置くことはできなかったが、解放はされた。アリカは死にたくなるほど恥ずかしくてたまらない、火照った顔を押さえながらちらりとだけティシーを見た。しかし彼は余裕で、何も変わらない。

「…お、俺…、ティシーから見れば子供、だし…そんな、こと…うう」

言葉にできず、アリカはひたすら俯いて、にじみ出る冷汗を拭う。

ティシーはきょとんと目を丸くし、瞬きを一回した。

「年は関係ないよ。僕がたまたま年上で、ありこちゃんはたまたま小さい。それだけだよ」
「そ、それは…理由にも答えにも、なってない…」
「そう？」
ティシーは飄々とした様子で肩をすくめ、笑みを浮かべた。
「そう…だよ…」
「そうかあ、そうなのかなあ。まあ、子供だから…準備はできてないかもしれないね。でも十分、おいしそうだけど」
「何言ってるんだよ…！」
「証明してほしい？」
「お願いだから…や、やめて、うう…」
アリカは体を震わせ、再びうつむいてぎゅっと目を瞑った。
ティシーはやれやれとため息をつき、しかたないと、軽く息を漏らした。彼女は思った以上に敏感な子供で、自分は思った以上にゆとりある大人だと、今さらながらの認識ができた。
「うん、わかったよ。残念だけど、今日はここまで」
くしゃくしゃと、元の子供としての扱いをアリカにすると、彼女は安心した様子で息を漏らした。
「じゃあ、ちょっとご飯取りに行って来てくるね」
ティシーはそのまま立ち上がると、何事もなかったように部屋を出ていった。
アリカはとけそうなほど熱い頬を両手で冷やし、ベッドに横になった。
結局ティシーという人はわからず、アリカもまた、自分がわからなくなりそうだった。

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

ティシーは廊下を歩きながら、真っ赤に顔を火照らせるアリカを頭に再生する。

なんてかわいい。そして、潰したい。ぐちゃぐちゃにして、縛りつけたい。
あってはならない欲求だということは知っている。しかし自然と浮かんでしまうのだ。
(僕という人間…)
ダルテからもよく言われる。ひどく歪んでいる、と。狂っているとさえ言われることもある。
冷静な自分がそれは当たっていると言う。表面にいる自分も、そうだと肯定した。
(だって、仕方ない。僕の夢なんだ、ありこちゃんは…。君が生まれる前から、知っていたこと)
幼いあの瞬間、何かがはじけた。
それを恋や愛だと表現するのかは、ティシーにはわからない。それなりに生きてきたが、愛情はよくわからない。ティシーにとっての愛情は、きっと相手を苦しめること。
だからこうしてアリカを食いつくしてしまいたいと願う欲求は…
(僕は確かにありこちゃんに好意を抱いている。だけど、それは愛したいという思いから?…違う気がする。好きだと、素直に思うことはできない。…潰したい、対象だ。でも僕はそういう欲求は愛情からきている。…じゃあ、やっぱり僕は。…わからない)
世間からもアリカからも大人だと称されるのに、どうしてこんなにも疑問に思うのだろうか。
(きっと、アポトーシスが僕を邪魔している。…父の研究が、僕を狂わせる…)
ティシーは一度立ち止まると、軽く目を伏せた。
(罪悪感から、僕はありこちゃんい好意を抱こうとしてるのだろうか)
この思いを、謝罪してなくすことができたら。
もしかすると、自分はアリカを愛してしまうかもしれない。
アポトーシスを消してあげるといい、その口でアリカを愛撫し、

その頭で潰したいと暴力をふるい、その手でアリカの頭を撫でる。
なのに、根底は感情すら理解できない。
そう考えてしまうことがすでに滑稽で、ティシーは一人笑った。
自分自身をあざける悲しい声だった。
（そう…僕はあの子供に対して、何を考えているんだろうね？子供…ね……）

二章四話

トレイに食事を乗せて帰ってきたティシーの姿は普段と何も変わらなかった。自分一人だけまだ顔を火照らせているのが、アリカは無性に悔しくなった。どうすることもできないほど子供の感情に、アリカは焦り、そして何でそう思うのかわからないでいた。

食事はチーズとハムのサンドイッチだった。車に乗っている途中、休憩にと二人はすでに簡単な食事を済ませている。なのでこれくらいの簡単さでちょうどよかった。

しばらく無言で食べていたが、食べ終えたティシーが口を開いた。

「ありこちゃん、食べながら聞いてね。…言いにくいことだけど、ありこちゃんがここに来たのはあのダルテの命令で…君を、とある実験に貢献してほしいからなんだ」

「実験…？」

聞きなれない単語にアリカは首をかしげ、口に残るパンをかみ砕いて飲み干した。ティシーはタイミングをうかがうように間を開け、もう一度口を開いた。

「そう。君のアポトーシスを治すために」

「治す…？嘘だ…」

「嘘じゃないよ。本当の話。…実験といっても、痛いことは何もしないよ。いつも通り、僕とここで寝泊まりする。それだけ。詳しいことはまた徐々に言うよ」

ティシーはにっこりと微笑み、アリカの頭を二度ほど叩いた。

「でも、ティシー…俺のことをよく知ってる人がって…」

「ダルテは…いや、僕も。君は知らないけど、僕たちは君のことをよく知ってるんだ。もちろん、これも。ゆっくり話していくね。いっぺんに言うのは…ちょっと大変だから」

不安がらないで、とティシーは念を押すようにアリカを覗き込んだが、彼女は唇を固く結ぶだけで何も言わなかった。

「ティシーは…そればっかり。俺、ティシーのことは多分…信じてる…。でも…わかんないことばっかりで怖いよ…」
「ありこちゃん…ごめんね。色々とあるんだよ、これは。重要なんだ…」
ふいにティシーの目がどこか遠くへ飛ぶ。何かを邂逅するように、細く揺れた。アリカは目線を追うこともできず、ぼんやりと彼を見るしかできなかった。
「大丈夫だよ。僕が絶対に守るから」
ティシーの目がアリカに戻り、アリカは頬を赤く染めた。
「あは、かわいいんだから。…とりあえず、僕は明日から少しやらなきゃいけないことがあるから、長く一緒にいれないかもしれない。寂しいと思うけど、部屋にいてね。たまにダルテをよこすから」
「そ、そんな、元帥様を…」
「いいのいいの。気にしないで」
ティシーは笑い、頷くと片付けを始めた。

ティシーは厨房へ食器を片付けて帰ってくると、アリカはベッドに仰向けになった眠っていた。
何も知らない、無垢な子供の顔。ティシーは時々忘れてしまうが、アリカはまだ子供だ。何もかも感じ取れるくせに言葉にできない、純粋な生き物。
（それを僕は、潰したいと願う…手に入れたいと、願う…）
それはきっと叶うだろうと同時に、アリカをだましているような罪悪感に駆られる。
アリカと共に旅立ってから大分経つが、色々考えるのはここに来てから初めてだった。おそらく、単なる旅からアリカをもののように扱わなくてはならない、本来の目的があるからだろう。
（やっぱり…僕はこの子をものとして扱えない…ぐちゃぐちゃにしたいと思ってるのに、できない自分がいる。これはやっぱり愛情？だとしたら…それでもいい。それに…そうなることも、僕の願い…

いや、最初から僕はこの子に焦がれてた）

ティシーは揺らさないようにゆっくりと隣に腰掛けると、すやすやと寝息を立てるアリカの頬に触れた。少し冷たいが中は暖かい。ぬるま湯のような心地よさにティシーは目を細める。旅の途中、何度も見た愛らしい寝顔。寝ているときだけは彼女も罪の意識が飛ぶのか、表情は穏やかだ。普段はびくびくと、常に威嚇しながら歩いている苦悶の表情とはまるで違う。本来の彼女はこうなのだろう、とティシーは寝顔を見るたびに認識する。

（かわいい顔して…）

ティシーはアリカの顔の横に手をつくと、ゆっくり近寄った。そして触れるだけのキスをする。彼女はかなり熟睡しているのだろう、ぴくりとも反応せず眠っていた。

（でも僕は、この子を手に入れるためにも、やることがある）

ティシーは顔を離し、そっと髪に手を触れた。細く柔らかい毛は猫のように気持ちがいい。ピンクと青のメッシュが彼女の愛らしさを強調する。だがその毛を一本抜き取る。その毛を、ポケットにしまっておいたビニールの袋に入れた。

次は脱脂綿を取り出す。半分開く口にゆっくり入れ、しばらくしてから取り出す。

（髪の毛、唾液…共に回収終了。血のついた服はすでに運んであるから…後は、皮膚…）

ティシーは手を伸ばし、アリカの手袋をそっと抜きとった。癒えることのない、生々しい擦り傷がいくつもある。その中からめくれた皮膚をほんのわずかちぎり、同じく袋に入れた。

（これくらいでいいだろう）

立ち上がり、アリカを見下ろす。彼女はよっぽど疲れているのだろう。起きる気配が全くない。

書き置きでもしておこう、とティシーは紙と鉛筆を出すと、少し言葉に迷いながら書きしるした。

『ありこちゃんへ。用事があるので、今晩は戻れません。一人でさ

びしいかもしれないけど、ゆっくり眠っててね。朝には戻るから。もし何かあったら、笛を二回吹いて。リリーシアくんが来てくれると思うから。あと、どうしても僕に会いたくなったら、ダルテに言ってね。じゃあ、おやすみなさい』

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

アリカはティシーの残した書き置きを手に包むと、もう一度ベッドに転がった。

（ティシー…やっぱりよくわからない人…。何なんだろう）

ころりと横を向く。

（迎えに来たティシー…命令したダルテ様…二人は俺をよく知っている。…なぜ？俺は会ったことないと…思う。それに、実験？アポトーシスを治すこと…ティシーはその実験を…）

思考が一周し、繰り返しに入った。アリカはシーツに頭をこすりつけ、自分の頭の回転の鈍さに落胆した。ぽす、とうつぶせになり、軽く目をつむる。先ほどまで眠っていたので、眠気は来ない。気がつくと眠っていて、気がつくとティシーはいなかった。気がつかないほど、自分は疲れていたんだと今になって冷静に思った。

アリカはゆっくり息を吸いこみ、吐き出した。

軽くティシーの匂いが香ったが、薄い。ここであまり生活をしていないのかもしれない、とアリカは考えながら赤面した。

（やだなあ…俺、ティシーのことばっかりになってる。前は…前は、どうしてたんだっけ…）

アリカはふと、忘れていた自分の故郷の人々のことを思い出す。アポトーシス同士、共に遊んで共に食事をした。悩みも打ち明けて、抱えきれない孤独を埋めていた。傷を、なめ合っていた。

（なんだったんだろう…。なんで今…こんなこと思ってるんだろう。…お母さん…）

アリカは随分と前に死んでしまった母親のことを思い浮かべてい

た。ティシーという存在はよほど強烈だったのか、母親を透かして彼はアリカの頭に立っている。
（やだなあ…俺の、ばか。ティシーは大人で、俺はまだ子供。そういうものじゃない…って、）
アリカは勢いよく起き上がり、両頬を押さえた。予想以上に頬は熱く、手が焼けおちそうだった。
（俺、そういう風にティシーを思ってるわけじゃない！！）
全力で自分を否定し、首がちぎれそうなほど横に振る。
（ティシーが、あんなことするから…！）
思って、やっぱり自分はばかだと泣きたくなった。ありありと蘇るティシーの感触。暖かい手が、唇が、舌先が、泣きたくなるほど―
（…もう、やめないと。…俺、そういうのじゃない…それに、そうだとしても。俺は求めちゃいけないんだ…人殺しは、そんなこと思っちゃだめ…普通の人みたいに思ったら…だめなんだ）
体中から驚くほど速く、熱が消える。
思い出せ、人殺しの言葉を。
死んでいった人を。
（そうだよ、ばかなアリカ。…苦しいよ）
アリカはぎゅっと胸元を握りしめると、唇をかんだ。
ここにティシーがいたら、すぐに慰めてくれるのにと、どこか甘い自分に死にたくなった。

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

こぽこぽと絶え間なく気泡が浮かび上がる。そのたびに透明な液体は揺らめいた。多少とろみがあるのか、泡の動きは穏やかだ。
「ティシー様。遅いお帰りでしたね」
白衣を着た男が真っ先に駆け寄る。白衣さえきてなかったらどこかのスポーツ選手にでもなっていたかもしれない、短い髪に大きな目。決してかわいらしいものではない。相手を見抜こうとする眼力

がある。
　ティシーは表情を消しながら「ただいま」と抑揚なく返した。先ほどまでアリカに見せていたものはまるでない。性格が全く反対にひっくり返った気さえする。
「ちょっと色々あってね。血のサンプルは届いてる？」
「はい、無事に。今培養している最中です」
「わかった。あと髪の毛と唾液、皮膚のサンプルもある。適当に分析して」
「了解しました。あとこれを。ティシー様がいないときにまとめたデータです」
「うん。今から読む」
　ステンレスで囲まれたような灰色の部屋の隅に、一応程度にしか扱われていないディスクがある。ティシーは片手に分厚い紙束を持ち、片手で椅子を転がした。何も言わずに湯気の立つお茶が出された。持ってきたのはやはり、白衣の…今度は女だ。中年と呼ばれる年齢に差し掛かったころだろうが、声はない。賑やかさは微塵にも感じられない、どっしりとした貫禄がある。
　ティシーは片手を上げると、ゆっくりとお茶をすすった。
　そしてレポートをめくっていく。
　前半はティシーが知るものばかりだ。後半もこれといってめぼしいものは何もない。
「これといって何もないね」
「中々進展できませんでした」
「…仕方ないさ。父がまとめた書類は消えてしまったんだ。…他に何かない？」
　大きな目をした男は一度瞬きをすると、姿勢を整えた。
「いえ、まだ。…やはりアリカ・ランザートのアポトーシスは強力ですね。特に血液はすさまじいです。おそらく、一瞬で人は消えるだろうと。しかしその血も、ある程度体温を失うと効果はなくなります。それは体液、皮膚共に同じですね。アリカ・ランザートが使

用した衣服、食器類にＳ－２２３は見られませんでした」
「そう…まあそうだよね。片付けをした宿の人、食堂の人…生きている。感染した様子はない。やっぱり体温が関係しているのか…どうなのか。そのあたりもつめて考えないといけないね」
男は再び姿勢を整える。几帳面なのか、白衣にしわはない。
「それで…アリカ・ランザート本体は実験に…？」
「今はまだわからない。でもいずれ…。じゃないと、温度の関係はわからない。…わからないことだらけだね」
ティシーはレポートを軽く叩いた。
アポトーシス…それは負の遺産だ。
（父の残した…最初で最後の最悪で…でも最高のプレゼント。まるで知恵の輪のようだよ…）
ティシーは頭を必死に働かせる。その瞬間だけは、アリカは単なるモノとなる。
一体自分はアリカに何を求め、考えている？
それは冷静な今の自分でもわからないことだった。
（…アポトーシスのこと…ありこちゃんが知ったらきっと…。ああ…僕は何を考えているんだ。もっと非道になれ…）
ティシーは自分を責め、それでもレポートに再びかじりついた。
今夜は眠れそうにない。

二章五話

ティシーが帰ってきたのは明け方になってからだった。
かたん、と極力小さな音を立てて扉が開く。かなり気をつかっているようだ。なのにアリカは反応して、体を起こした。今まで寝ていたが、浅い睡眠だった。どうにも寝れなくて、何度も寝がえりをしては目を開く、それを繰り返していた。
「あ…起こしちゃった？」
ティシーは申し訳なさそうに後ろ髪をかくと、扉を閉めた。アリカはゆっくり首を横に振り否定して、ベッドから降りた。
「あんまり…寝れなかった。さっき、寝ちゃったから」
「そっか」
「ティシーは、寝てないの…？」
「うん、ちょっと色々と立て込んでてね。でも大丈夫。今から寝るよ」
「もう朝なのに？」
ティシーは笑って肯定し、眼鏡をはずしてからベッドにつっぷした。よほど疲れているのか、あまり言葉を発そうとしない。枕に顔を伏せたまま、体をだらりと伸ばしている。
そんな彼の隣にアリカはそっと近寄った。こうして近寄ろうと思うのはこれが初めてに等しい。
「どうしたの？寂しかった？」
ティシーは顔を横向けると、目を細めながら手を伸ばした。そしてぽん、とアリカの頭に着地する。アリカはいつも通り顔を赤らめ、俯いた。
「さびし…」
アリカはそれきり唇を噛んで言葉を止めてしまった。自然にこぼれてしまったのだろう、アリカの本心は儚く消えてしまいそうだ。
とたんにティシーの瞼が開かれた。いつもの喜びはなく、ただ驚

いて—瞳は戦慄いて、どこか焦燥にかられている。アリカは俯いていたため、彼の表情はわからなかった。二人の表情はどこかですれ違っていた。
「…ごめんね」
ティシーは体を起こし、彼女の頭を優しく撫でた。アリカは俯きながら、何の謝罪か考えたが答えはでてこない。疑問が一瞬だけ頭をかすめていったが、あまりに早くて捉えることはできなかった。
「ありこちゃんがそんなこと言ってくれるなんて、夢にも思わなかった」
ティシーはとろけそうな笑みを浮かべ、アリカに抱きついた。
「ティ、ティシー…！お、俺は別に何も…！」
「照れない照れない。でも、ごめん…もっと色々いじりたいけど、もう眠い…」
「じゃ、じゃあ寝ればいいよ…だから俺を離してよ…」
「だめ…だって、ありこちゃんあったかくて気持ちいい」
二人はそのままこてん、と倒れた。アリカはあわてたが、ティシーの腕は案外と強い。それは知っているのだが、疲れた今でも腕は強い。アリカを逃がさんと、絡みついていた。
「ティシー…」
どうしていいかわからないまま、ティシーは先に眠りに落ちてしまった。微動だにせず、呼吸すら怪しく思える脱力した眠り。アリカはただぼんやりとするしかなかった。
そしてこんなのばっかりだ、と思いながらも心地よさで頭がしびれていく。
瞼がぴりぴりと痛みを感じるほど重くなってきたのと同時に、アリカの意識は電気を消すよりも簡単にぷつりと切れた。

夢だというのに、意識がやけにはっきりしている。
ティシーは一人、ただの四角い白い空間にいた。窓もない音もない。立方体に閉じ込められ、ひたすら前だけを見ていた。しかし前

も後も左右も上下も全く同じ白い壁で構成されているので、どこが前かわからないが…とりあえず、体は前を向いているらしかった。
あまりにリアルな白さに夢ということに気付かなかったが、だんだん夢の中の自分が冷静になり、そして第三者の自分…現実だと知る自分と分離する。
ティシーの前にティシーがあらわれ、二人は向き合うことなく、ただ並ぶ。
どれだけそうして並んでいただろうか。
夢の中のティシーが口を開いた。呼吸する音まで現実と違わず響く。
「やっぱりアリカのアポトーシスは誰よりも強力だった」
たったそれだけで現実のティシーは「ああ」と理解した。
これは、夢だけれど現実の続き。先ほどまで行っていた研究をまとめようとしている。それほど頭が混乱しているのだろうか、夢にまでもっていかないと整理整頓ができないのかと思ったが…その通りのような気がするので、ティシーは黙って耳を傾けた。
「体液…唾液や汗は通常のアポトーシスと変わらない。でも血液なんだ。体温を失ってもなお、アポトーシスとしての力は残っている。ほんの少しだけれど。…もし…体温を保ったまま、アリカの血液が流れ出れば…」
夢の中のティシーの台詞に、現実のティシーは考える。
体温を保ったまま…たとえば、ぬるま湯に血液をたらす。多少凝固してしまうが、大体はお湯と混ざる。そうすれば…薄まったとしても、効果は抜群だ。そして最悪…たった今流れたばかりの血…これはもう立証済みだ。アリカが倒れていた付近に大破していた馬車たち…アリカの血を浴びて一瞬にして溶けた馬に人々。
二人のティシーは一つ、ぞっとする想像をした。
もしこのことが他国にばれたら…いや、国内にいる敵たちにばれたら。アリカという存在…強力なアポトーシスの存在がばれてたら。
「戦争の蒸し返しだ」

そうだ、と現実のティシーは答える。
憎き戦争、そしてアリカと出会うきっかけを与えてくれた戦争。
幼いころに見た、ばかばかしい戦い。利益だけのためにミサイルを撃つ集団。
滑稽だと思った。
だがそれらがなければ、アリカには出会えなかった。
そしてアポトーシスと呼ばれる存在もまた…
ティシーはアリカについて考える。
自然と近づくようになったアリカ。大分心開いてきたアリカ。照れながらも、怖がりながらも自分に手を伸ばすようになったアリカ。
アポトーシスであるがため、人に触れれない。人に憎まれ、人の世から放り出される。同じアポトーシスといても…現状は変わらない。
そこにきた自分。アポトーシスではないただの人間。だが…唯一彼女に触れることのできる人間。
アリカは必然的にティシー以外頼れない。ティシー以外触るのをためらう。ティシーがいなければ、救われない存在。
「僕はいつまでもそうあっててほしいと願う」
アポトーシスでいれば、アリカは自分以外の誰にも目を向けることはない。
しかし今の実験…アポトーシスを治療する方法が成功し、アポトーシスでなくなってしまえば。
「アリカはどこかへ行ってしまう」
夢見たアリカ。彼女が生まれる前から知っていた、求めていたアリカ。
それらが離れてしまう？こうして手に入れているのに。
「矛盾している、大したエゴだ…」
だからほら…つぶしたいと願う。その気持ちがわき上がってくる。
なんてひどい堂々巡りだと、ティシーは拳を握りしめ…景色が急速に収縮されていく。白い壁は目にもとまらぬ速さでティシーを押

しつぶしていく…と思いきや、ティシーの体は壁を突き抜けた。今までいた白い部屋は単なる四角い箱となり、小さく小さく縮んで…消えた。
同時にティシーの意識も目覚めた。
最悪の目覚めだ、とティシーは頭をかく。精神的にはちっとも寝ていないが、体は少し休まったようだ。幾分か軽くなり、気だるさが軽減している。
ふと隣を見ると、ティシーにしがみついたまま眠っているアリカの姿があった。
夢じゃない、現実のアリカ。
ティシーは起こさないようにそっと抱き締めた。確かなぬくもりだけが、ティシーを安心させる。一時的だが、狂った願望も薄らぐような気がした。
その隙とばかりに、ティシーの良心が言う。
僕だけの世界しか知らないなんて可哀そうだ、やっぱりちゃんと治療しなければ…。
その奥で願望を持つ黒いティシーがささやく。
—大した偽善だ。
—自分はもちろん、友人も家族も何もかもを巻き込み、手に入れようとしている男が、今さら人を救うだって？
—笑わせる話だ。
忘れてはいけない。
お前は、自分は、僕は—罪深いことを。
（そう、僕は潰したいと、手に入れたいと願うあまり…こうやって偽善ぶっていられることだって…短時間しかいられない。意識していない時こそ僕で…単なる……人殺しだ。今さら、何を思っても…）
ティシーは体を起き上がらせると、軽く頭を振った。
そしてアリカの手をそっと離し、ベッドから降りた。
時間にすれば三時間ほど。長くも短くもないが、アリカにとって

はほんの一瞬の睡眠だったように感じる。それは熟睡していたということだろうか。
体が自由に動く、と感じながら隣を見ると、ティシーはいなかった。先ほどまで寝ていたような痕跡はあるが、ぬくもりはとうの昔に消え去っている。もしかすると夢でも見ていたのかもしれない…そんな錯覚を覚える。
アリカはまだ起ききらない、ぼんやりとした頭を抱えながら考える。
どこにいったのだろうか。自分はどうしていればいいのだろうか。
ふと、笛のことが頭をよぎった。聞いてみればいいだろうかとも思ったが、アリカはまだまだ人が怖くて仕方がなかった。人に会えば、思い出してしまう。ティシーといる時に薄れていた感情が恐怖となって背中からアリカを一気に襲う。
アリカは身震いすると、ベッドから立ち上がった。
もう昼近いのだろうか、窓から太陽が真っ白くさんさんと降り注いでいる。カーテンを開けて覗いてみると、街ではなくここの中庭のようなものが見えた。きっちり揃った芝生、所々に置かれた赤いベンチ、囲むように高い木々がいくつか。今は誰もいない。葉が気持ちよさそうに揺れているだけだ。
アリカは窓を開け、ぼんやりと外を眺める。庭の向こうは薄汚れたコンクリートの壁しか見えない。青い空が見える分量は非常に少なかった。でも時々髪を揺らす風は心地いい。
城に入る前に思った、要塞のイメージ。中はきらびやかで豪華だが、やはりこうした外観は要塞のように恐ろしいものがある。
一体何があるのだろうか、自分は何でここにいるのだろうか。
アリカは風に身を任せ、ゆっくり瞼を閉じた。

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

国のトップ、元帥であるダルテは頬杖をつきながらティシーのま

とめた資料を見た。いつか届いた、馬鹿げた報告書と違い機械で書かれたような精密な文章でつづられている。ふざける彼、冷酷な彼、どちらが本当のティシーかは幼馴染であるダルテにもわからない。残念なことに、彼女が気付いた時には彼はああいう人物であり―今よりもさらに冷酷で狂った人だった。

しかしそうなった理由もわからないわけではない。

ダルテもまた、自分はどこか狂ってるんじゃないかと思うことがある。

全てを知りつつも動かず、ティシーの言うままに加担する。

ダルテはそっと腕をまくった。そこには痛々しいと表現できるほど見苦しい、縫合の傷跡がありありと残っていた。二の腕をぐるり一周する形で続くじぐざぐの線は、ティシーと自分の狂いを象徴するようでもあった。

アポトーシスに触れても平気な自分とティシー。アポトーシスではないのに触れても平気な二人。

これが人為的なもので…そしてアポトーシス自体も人為的だと…。

「やめよう…」

声に出して思考をシャットアウトし、そっと報告書を机に置いた。

負の遺産であるアポトーシスを一から構築する、気の遠くなる紙切れは何も言わない。

そしてダルテは顔を伏せ、じっと考える。

元帥とはいえ、父の代わりになった仮の姿。幼いころからずっと厳しい父の背中を見てきた彼女は現在のようにどこか男らしく育ったが―実際はまだ若く、全てを気負うには未熟なか弱い女だった。

ここに救いの手はなく、現在あるのはティシーの研究のみ。

（どうしたらいいんだ…）

できることといえば、失われたアポトーシスの全てを階段を上るように徐々に取り戻すことだけだった。

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

それぞれがそれぞれの思いに喘いでいる城の中。
一つの吐息が密かに交る。生暖かい息を吐き出し、ゆっくりとあたりに溶け込んでいく。
まだ誰にも知られず、ただ一人。
ティシーにも似た狂気を振りまき、しかし表情は頑なに感情を拒んでいる。無表情、と言ってもいい。しかし背中からあふれ出るものはまぎれもなく恐怖を感じる。
まだその正体に気づく者はいない。
だが、確実に、そして直前までソレは迫っていた。

二章六話

アリカのぬくもりを惜しいと思いつつティシーはベッドから離れると、行先は決まっているとばかりに足を運ばせた。実際はまだどこでどうしたいか考えていなかったが…体は何かわかっているのだろう、素早く目的地へと進んだ。

ノックを二回。それだけで部屋の主は扉の向こうの人間は誰が来たかわかる。

ティシーは返事が返ってくる前に扉を開けると、何も言わず素早くソファに座り込んだ。その様子を部屋の主―ダルテは気にせず、ただ一言「来たか」とだけつぶやいて向かいのソファに同じように腰かけた。

「資料、読んだぞ。…アリカのアポトーシスはやはりすごいな。他の人たちのとは比べ物にならない」

「でしょ？すさまじいの一言に尽きるよ。…で、どうしようか」

ティシーの言葉にダルテは目を丸くし、信じられないような目つきで瞬きをした。

「どうしようか？お前…私たちの目的はアポトーシスを完全に治療することだろう？それをなぜ、今目的を聞いた？まさか…」

ダルテの目が鋭く尖る。見透かそうとティシーを穴が開く勢いで見つめるが、目の前のティシーは飄々と余裕の表情をするだけだ。笑みすら浮かべる口元に、ダルテは逆に歯を向ける。

「治療を、実験を進めたくないと言いたいのか？」

ダルテの固い口調にティシーはふざけたような笑い声を洩らし、口もとにそっと指をあてた。

「まさか…。ちょっと、読みが深すぎるんじゃない？僕はそんなこと思ってないよ」

「はっ、どうだか…。お前の思考は怪しいからな。治療を放棄し、アリカをあのままにして自分に縛り付ける…やりそうなことだ。他

のアポトーシスの人たちには目もくれず、自分のことばかりに精を出す」
「あは、僕ってそんなに酷い人に見える？」
「もちろんだ」
「酷いなあ…僕、これでも誠実だし、しっかりしてると思うけど？」
「…潰したいとか言ってた奴が、何を言うか…」
「ん？何か言った？それとも、ボケが始まったかな？元帥サマ」
「うるっさい」
ダルテは歯を食いしばりながら一括すると、疲れたように息を漏らした。
「やっぱりお前と話すのは疲れる…。とりあえず、このデータを基にワクチンを至急作ってほしい。無理なのはわかってるが、どうにも…雲行きというのが怪しいんだ」
ダルテは先ほどとは一変し、深刻な顔つきで両手を膝の上で組んだ。その様子をわかってか、ティシーも幾分か顔を引き締めたが、どこか飄々とした様子は変わらない。ダルテは多少の温度差を感じながらも続ける。
「先日言った、怪しい馬車の件だが…なんだか数が増えてきている」
「調べは？」
「もちろん、やったさ。…どういうわけか、シロ。ただの馬車だが…おかしすぎる」
こん、こん、とゆっくり二回ノックが響いた。ダルテはこのノックが誰のものかもわかっているようで、振りむかずにただ「開いている」とだけ言った。
扉は軋むことなくゆっくり開き、一人の青年を招き入れた。背格好は長身で中肉中背、ぱっと見ただけで鍛えられているのが制服越しでもわかる。生真面目そうな表情を浮かべ、扉をきっちりとしめた。その様子だけで彼がきちっと角の整った人間だとわかるが、右目にかかる眼帯が目につく。眼帯の持つイメージがそうさせるのか、一見強面に見えた。

「なんだ、ティシーか」
しかしティシーの姿を発見するなり、彼の様子が砕けた。人懐っこそうな笑みをうっすら浮かべ、緊張を少し解く。それでもなお、真面目さは残るが第一印象よりは快活で柔らかい印象に変わる。
「よく来てくれた、ラグ」
彼―ラグの姿を確認すると、ダルテはティシーに向けるよりも輝いた表情を浮かべた。頬は艶めき、瞳は嬉々として彼を見つめる。ラグと同じく、ダルテもまた、印象がころころと変わる人間だ。今見れば彼女が元帥だとは誰も思わないだろう。
ティシーはにやにやといつもの笑みを浮かべると、ラグを隣に誘った。
「元帥…」
「よしてくれ。今はティシーと私しかいない。いつもの呼び方でいい」
「了解、ダルテ」
さらに空気が砕け、三人の間に和やかな空気が漂った。
ティシー、ダルテ、そして今現れたラグの三人は年齢や性別は違うが、幼馴染だ。生まれや身分的に似たようなもので、三人ともこの城で育ったといっても過言ではない。常に一緒だった三人は、今の今もこうして仲良く城で地位を築いている。
ダルテは病気の父の代わりにとはいえ元帥を、ティシーは研究を、そしてラグはダルテの付き人をしている。所謂、親衛隊長というところだ。
堅苦しい制服姿にティシーはにんまり笑い、言葉をかける。
「ラグ、相変わらず制服に着られてるねえ。まるでサーカス団長みたいだよ」
「あのなあ、ティシー。お前、いちいち文句言わないと気が済まないのか？俺たちこれでも繊細なんだぞ～」
「俺たち？これでもとは何だ。私は見かけから何から何まで、繊細だ」

「へえ～繊細ねえ。マッチ四本ぐらい乗りそうなまつ毛も、繊細の部類なんだ～」
「いちいち言うな！」
「相変わらずだな…お前たち」
ラグは苦笑しながらも二人の様子を楽しんでいるようだ。眼帯に覆われていない左目が嬉しそうに細く揺れ、二人を交互に見つめる。
しかし和やかな談笑もつかの間、ラグに厳しい表情が戻る。その顔を見て、ティシーもまた目を鋭く細め、ラグを見据えた。
「例の馬車の件…か？」
ダルテも元帥としての顔を作りだし、上目にラグを見た。ラグはダルテの声に頷き、彼女をそしてティシーを見た。
「さっきもティシーに言っていたところだ。何か新しい展開が？」
「展開…というより、俺と四君子が出した予測、かな」
「聞こう」
場の空気はすっかり変わり果てていた。誰もが触れれば痛みが走るほど緊張がたぎっている。ラグは少し間を開けると、身を乗り出した。
「馬車の数はここ数日で増えて来ている…怪しいが全部シロだった。俺は最初、もしかすると戦争がこの国でまた起きるかもしれないと思った市民が出ている…とも考えたんだが、入る馬車も多い。しかもちゃんと人を乗せて…」
「まて、ラグ」
ダルテはわずかに焦燥の瞳を浮かべると、同じように身を乗り出した。
「市民が…戦争の片鱗を感じているというのか？なぜ！まだ警報も何も出ていないし、私たちとて…国同士の話は何も」
「何も？」
反応を返したのはラグではなくティシーだった。ダルテは泳ぐ瞳を何とかティシーに合わせると、情けないと言っていいほど眉間に焦りのしわを寄せた。腰は中腰となり、逃げるように引いていた。

対するティシーはいつものにんまりした笑みではない、どこか不敵に感じる歪んだ笑みを浮かべていた。見る人が見れば恐ろしいと感じてしまっていい、余裕の顔。まるでダルテの敵のように。
「それ、嘘でしょ。…嘘だね。だってこの間言ったじゃないか。他の国の動きがおかしいって」
「そう、だが…」
「だが？変な言いまわしだねえ。…　君は焦っている。らしくないほどね。…アリカを回収してアポトーシスの薬を作ろうと言ったことも、至急と今言ったことも、それに馬車のことだって。調べるのに焦っている」
　くく、とティシーの喉が鳴った。あざ笑うような声にダルテは顔を青くし、そして赤く膨らませた。
「そ…」
「違わないよねえ？…どこかの国が不穏なんでしょ？そして…またアポトーシスたちを使った戦争が、蒸し返される…ダルテはそれを気にしている。…ねえ、当たり？」
　不敵な笑みを浮かべたまま、ティシーは子供がねだるような甘えた声で尋ねる。その相反するものが同居するティシーを、ダルテはますます畏怖を感じてソファに腰を落とした。瞳は相変わらず怯えたままで、どこか空中を泳いでいる。
「ティシー、ちょっと待てよ」
「うん、待っててあげる。だから、ラグの意見を聞かせてよ。さっきの続き…」
　雪を彷彿とさせる冷たい目がラグを突き刺す。ラグは気圧され、唾を飲み込んだ。
「…わかった。ダルテ…俺は思うんだ。あの馬車は、陽動じゃないかと」
「よう、どう…？」
「そうだ。馬車を動かすことによって俺たちの注意をそちらに向ける。その間に何かが…入ろうとしてるんじゃないかって、考えた。

四君子もそれが一番矛盾がないと考えている」
「ま、まて」
ダルテは片方の手で頭を支え、もう片方で二人を止めた。
「何かが、この国に入る？何の為に」
「アポトーシス誘拐のため、かな？」
ティシーの言葉にラグは頷き、少しうつむいた。
「最近、誘拐騒ぎが起きている…ことは知っての通り。アポトーシスの数が減っているのも事実だ」
「でも馬車が増えてきたのは最近、誘拐は最近とはいえそれ以前からある問題で…」
「誰かが何かを狙っている」
ダルテの声はラグによって数秒と間をあけることなく切られた。
「そして何かは…」
その先にある言葉は三人ともわかっていた。わかっていてダルテは俯き、ラグはティシーを見た。代表してティシーは口を開き、続きを言う。
「もし、陽動が本当なら。そしてその為に誰かが入り込んだとして。…以前からあるアポトーシスたちの誘拐、それをまたこれによってやる必要はない。でもアポトーシスを必要としている…つまり、わざわざ騒ぎを起こしてなおかつアポトーシスである人を狙う」
ラグ、ダルテは頷く。
「そう…」
ティシーは眼鏡を上げると、ターキスブルーの瞳を揺らした。
「だとしたら…アリカが、狙われている」
事情を知る三人は深く頷き、ダルテだけはうなだれた。その姿を見て、ティシーは表情を少しだけ消した。いつもの笑みはなくなり、眼差しは真剣に彼女を刺す。まるで何かをえぐるように、鋭い目は強度を増す。
「ねえ、ダルテ…君、何か心当たりは？…何かあるんじゃない？」
「それは…」

「きりきり吐いた方がいいよ。…僕、事の次第によってはダルテを実験に使うから」
「おい、ティシー」
揺らめく瞳に危険を感じ、ラグは急いで立ち上がってダルテをかばうように前に出た。親衛隊長として、友人としての防衛が働く―それほど、今のティシーは酷く冷たい。
ティシーは肩を小刻みに揺らしながら声なく笑い、上目に二人を見つめた。
「前は君の父親に止められたけど…今度は完全にやらなきゃね…。対、アポトーシス対策の実験を……」
「ティシー！」
ラグは吠え、ダルテは両腕を押さえた。その下には縫合の跡、そしてティシーの狂気が詰まっている。
二人はティシーの瞳の色のように青ざめ、おびえながら彼を見た。しかしティシー本人は笑っている。口元だけを器用に形作っている。
「さあ、言ってよ。心当たり」
「…ラグ、ありがとう」
ダルテはラグの腕を押さえ、そっと横にずらした。再び対峙する二人は先ほどまであった和やかな雰囲気ではない。一触即発…そんな文字が浮かぶ。
「…いいか、ティシー。私とてこれが正解だとはわからない。私が思った、予想でまだ何の確証も…」
「いいから、早く言おう」
ティシーは静かな言葉で切り、ダルテは再びうつむいた。
「…わかった。…最近、とある―いや、タルス国に少し動き…いや」
歯切れ悪く、囁くようにダルテは紡ぐ。
「ある人がいるということがわかった…。タルス国のことは知ってるか？以前の戦争で我が国に破れた国だ…しかしその後、傘下も協定もない。つながりはまるでないが、…不穏さもなかった」
以前の戦争で戦ったここ―ディルティス帝国とタルス国は隣り合

っている。まだ当時幼かった三人は原因を知らないが、それなりに激しい戦争だった。それはだんだん泥沼化し…血で血を殺すような戦いと化した。冷戦というには激しすぎ、戦争というには闇に包まれていた。火花よりも悲鳴があがり、辺りは阿鼻叫喚の地獄となった。

その後、戦争はディルティス帝国の勝利となり…タルス国は通常なら協定を結び、平和宣言を出すのだがそうしなかった。しかし戦争はそれきりで何の音沙汰もない。

しかしながら、虎視眈々と狙っているかもしれないことは考えられる。力的に考えてディルティス帝国は強く、戦争をけしかけようとは思わない—なのにタルス国は闘った。そして破れ負け帰り—そのままにしておくわけがない。

ティシーは眼鏡は軽く眼鏡に触れると、細く笑った。

「不穏な空気はなかった。でも君の言うところの、ある人がいるということで実は不穏な動きをずっとしていたことがわかった…と、言いたいのかな？この前置きは」

「…ああ、そうだ。…その人物がいると発覚したからこそ私は、以前から出ていたアポトーシス治療をますますしなくてはと思ったんだ。国が不穏だというのも…」

「それで？その人って？」

ダルテはきつく目をつむり、ややって—瞼を解く。力ない唇は、独り言に近いつぶやきを漏らした。

「…イデム」

呪文に似たその名に、ティシーの表情が暗闇に吸い込まれる。

「イデム、だ」

そしてダルテもまた、イデムという呪文に引き込まれ、暗い影を落とす。

ダルテの横に立っていたラグも信じられないと目を見開いて、焦点なく空中に目を泳がせた。

その名が表すもの、呪文めいたその単語。

静寂しきる寸前に歯が軋んだ。
―ティシーだった。
彼は凶悪なまでに顔中のしわを寄せると、拳を固めた。まるで何かを握りつぶすように―。

二章七話

風に揺られ、木の葉が一枚ふわりと落ちた。ゆりかごのようにゆらりゆらりと左右にふれ、羽毛のように軽やかに落ちていった。

アリカは窓を開け、ぼんやりと木の葉の行方を追った。最終的には見えなくなったが、多分中庭に消えていっただろう。とろんと目を半分に落とし、アリカはまどろむ日差しを堪能する。今日も天気がよく、コバルトブルーの空が一面に広がっている。ところどころ、薄い布のような雲が広がり、ゆっくりゆっくりと姿を変えていく。

いつの間にかどこかに行ってしまったティシーは太陽が高く上がっても帰って来ない。だからと言って何もないが、それでもアリカはほのかな寂しさで胸がひりひりと薄く痛むのを感じていた。まるで薄くめくれた皮膚の下にある肉に触れてしまったような、じんわりと針が刺すような痛み。これがどういう感情できているのかはわからない。まだ幼いアリカの精神では理解できなかった。

（もうお昼過ぎたかな…）

時間を教えるもののない部屋では太陽だけが唯一の時間だ。太陽が高く上がれば昼、傾けば夕方に近い—車や城といった近代的なものがそろっている中、この部屋だけはひどくアナログだった。アリカは不便だとは思わないが、何もなさすぎる部屋はどうしていいかわからなくなる。

ベッド以外に生活を感じるものはまるでなく、ティシーの姿もどこか曖昧になっていく。

アリカは顔を伏せると、目を瞑った。

（どこいっちゃったんだろう…。それに、実験って…なんなんだろう…）

こうして帝都に来た今でも何が何だかまるでわからない。

ティシーは相変わらずからかうだけで答えてくれず、肝心なことはあまり言わない。

どういう人なんだろうかと考えても、アリカの頭の中にあるティシーは笑っているだけだ。
（…まただ。俺、何でティシーのことばっかり気にしてるんだろ…）
アリカは無理やり頭からティシーの姿を消すと、息をたっぷり吐きだした。
このまま寝てしまいそうな、ぬかるみの温かさにアリカは心を移すとしばらくぼんやりと空を眺めた。

どれくらいそうしていたかわからない。
気がつくと太陽はだいぶ落ちてきていた。だがまだ夕方には遠い。
「あれ？」
その声にアリカは肩を大きく飛びあがらせ、急いで振り返った。柔らかい声、おどけた調子。だがどこか印象のずれる、それでも聞きなれた声。アリカは少し首をもたげた疑問に答えるように、目の前に佇む人物に目を凝らした。
「…誰……？」
アリカは一瞬期待の眼差しで瞳を輝かせたが、一瞬にしてくすんだ色となった。
そこに立っていたのは想像していた人物―ティシーではなかった。二十代前半であろう、見知らぬ男だった。
長身で細見の体、どこか頼りなさそうなひょろりとした風貌はどことなくティシーに似ていた。しかし、時折銀に見える彼の髪とは違い、目の前の人物は黒髪を後ろに細く一つにくくっている。くせはなく、艶のある髪をしていた。さらに言うなら、眼鏡はしていない。アリカを見つめるその瞳は時折空の色に似た光を反射し、群青色に落ち着く。
アリカは突然現れた人物に対応できず、ただ大きく瞬きをする。
対する彼はきょとんとアリカを見てから辺りを見回し、再びアリカに目を戻した。
「ここってティシーの部屋、だよね？」

確認する口調はやはりティシーに似ていた。アリカはおどおどしながら目を伏せ、小さく頷いた。まだ数日と日は経っていないが、この部屋を訪れたのはティシーやアリカを抜かせばリリーシアぐらいしかいない。そのリリーシアも数分とおらず、しかも任務以外訪れない。

なのでこうして誰かが、向こうから入ってくるというのは初めての出来事でアリカは緊張するしかできない。それにアポトーシスのこともあり、人は恐怖の対象でもあった。

会話は一旦途切れ、アリカは堪えるように窓の縁を掴み、きゅっと唇をかんだ。

間はそうあかず、彼は独り言を交えながら続けた。

「あれ？じゃあ研究室かな…。…いつ帰ってくるか知らない？」

その問いにもアリカは無言で首を横に振り、なるべく関わらないように努める。

「そうかあ…まあいいか。大した用事じゃないしね…。ところで君は？」

彼は凝視するように目を細めながらアリカを見つめる。あまり視力はよくないらしい。

アリカは答えるべきかどうなのかと、混乱しつつある頭で必死に考えた。

一方の彼は腕を組み、開け放しのままの扉の縁に寄りかかり、上からアリカを見続ける。

「……もしかして―」

「…お前……」

アリカの耳がぴくんと動いた。体が勝手に反応する。

アリカは子犬のように目を開き、少し腰を浮かした。扉にいる彼の向こう―今度こそ聞きなれた声が聞こえてきた。しかし謎の男が防いでしまい、肝心の姿は見えなかった。

「どうして…ここにいる」

アリカの目が少し怯えの色を出した。姿なき彼―ティシーの声は

いつもよりも低く、怒りの色が混じっている。下手でもすれば呪詛にも聞こえた。姿が見えないため、声の主の存在は疑われる。
本当にティシーだろうか、とアリカは窓から離れ、恐る恐る扉へ近づいた。
黒髪の男は先ほど見せていた明るい表情を消し、歪んだ黒笑みをにじませ、じっとりと舐めるように廊下を見つめた。
「よかった。探す手間が省けた」
「…帰れ」
やはりティシーではないのかもしれない—アリカは不安で仕方ない胸をぐっと抑え、一歩、また一歩と近づく。
そして気づく。黒髪の男は声や一瞬の印象で思った通り、ティシーにどことなく似ていた。見た目もあるが、ちょっとした仕草、全体からかもし出される雰囲気、声のトーン…所々重なる。
人に近づくのは恐ろしいと思いつつ、アリカはティシーの声に引きよせられるように扉へ、そして黒髪の男に近寄る。
男はティシーらしき人物の声に苦笑すると、上目に見つめた。その目はぬらりと群青に深く光り、冷たい炎が見え隠れする。
「酷いなあ…久々に会ったのにさあ。…ねえ。君もそう思うでしょ？」
ぎらりと男の目に光の線が走り、アリカは「あ」と言う間もなく手を掴まれた。
「や…！」
アリカの全身に鳥肌が立つ。吹きだすように一気に全身を支配し、凍りつかせる。男に対しての恐怖もあり、それ以上に感染し—いつかのように殺してしまうという不安で自然と涙が溢れる。
「だめ、だめ…！」
アリカは懇願の声をあげながら男から逃げようとしたが、男の手は強く、楔でも打ち込まれたかと思うほどびくりともしない。
「……アリカから離れろ」
「…やっぱり。この子がアリカ・ランザートなんだね」

男はそのままアリカを引きよせ、肩を抱く。
「だめ、放して…！アポトーシスが、病気が―！」
「大丈夫。俺は…いや、俺も効かないから。ある程度、ね」
「え―」
アリカは涙の溜まる目で男を見上げ、震える手で拳を作った。
「なん、で―」
なぜか微笑む男に不安と恥ずかしさを覚え、そしてゆっくりと顔を廊下へと向ける。
「ティシー…」
そこにいたのは、やはりティシーだった。しかしいつものにやけた顔はどこにもない。そこにあるのは怒りを被り、しわだらけの悪魔の顔だった。
アリカは思わず身震いをすると、信じられないと心中で驚愕した。
飄々とした調子もなければ、眼鏡の向こうにあるターキスブルーの目も微笑んでいない。その目はアリカではなく、男の方を刺すように睨んでいる。
しかし男は動じることなく、笑い続けている。余裕と不敵さの入り混じる笑みはどことなく、ティシーをバカにしているように見える。
「やだなあ、そんなに怒らないでよ」
「早くアリカを放せ」
「いいだろ？減るものじゃないし…それに、俺はこの子にも用事あるし」
「…僕を怒らせたいのか」
男は肩をすくめると、おどけた調子で「おー、怖い」と演劇がかった調子で言う。
「ティ、ティシー…」
アリカは思わず名前を呼んだが、彼はアリカを見ない。いつものとろけそうな反応はなく、ただひたすら男を睨み続けている。
「ああ、ごめんね」

代わりに男が謝り、口もとに笑みを模る。
「もうちょっと我慢して」
そしていいこいいこと頭を撫でる。声や姿だけでなく、こうした動作も同じでアリカは意にそぐわず顔を赤らめる。
「イデム！」
その瞬間、ティシーは叫んだ。いや。吠えた、に近い。
全身を震わせ、毛を逆立たせ―野獣のように男に怒鳴りつける。
それでも男は笑うと、アリカの頭の上に乗せていた手を滑らせ、アリカの頬に添える。
「やだなあ…相変わらず怖いんだから、兄貴は…」
「え？」
アリカは再び目を点にした。
その単語が聞き間違えではなければ―
「……ティシーの、弟…？」
ティシーは答えない。そして彼―イデムも黙っているが、笑っている。それが肯定だと言うように。
アリカは睨みあう兄弟を交互に見る。目元から顔つき―どことなく似ているというのもうなずける。
そうか、と納得する答えに頷くと―先ほどからイデムに捕えられたままのことを思い出し、再び赤面して手足を動かした。
「だ、だから…！放して」
手が体が必死にティシーへと向く。しかし呪縛は解けず、その場にもがくだけだった。
その姿を見てイデムは鼻を鳴らす。
「へえ。兄貴に懐いてるんだ、この子。面白いね」
「イデム」
「…もしかして、色々話してないの？アポトーシスのこと」
「イデム」
「それとも、話したけど懐いてる？だとしたら信じられないね。ま、どっちにしても懐いてるってのが気持ち悪いけど」

「イデム」
「…そう叫ばないでよ、兄貴。そう邪険にしないでさあ…少し話そうよ。部屋に入ってさ。アポトーシスのこと、父親のこととかさあ…」
「イデム！」
一際大きい、悲鳴じみた声が廊下の奥までこだました。
イデムは唇をすぼめて笑い、アリカは呆然とした。
怒りに震えるティシーの姿は今まで全く見たことない、別人の姿。とろんと嬉しそうに自分を見ていた時とはまるで違う、別の人。
アリカはどうしていいかますますわからなくなり、さらに拳を強く固めた。
「…あー、うるさいなあ。…とにかく、話そうってば」
「お前と話すことなどない」
「そう？俺は結構あるけど？…だって、知りたいんじゃない？」
イデムは勿体ぶるように言ってはにやにやと笑い、ティシーを見上げる。
「知ってるんでしょ？俺がタルス国にいるってことを。それに、色々やってることとかさあ」
「…あれは、お前が仕込んでたのか。わざと僕たちに勘付かせるために」
「勘付く、かあ…そんな回りくどくはしてないよ。兄貴たちに、わざと気づいてもらうためにやってたんだから」
「なんのためにだ！…早くこの子を離して、どこかへ行け」
「ふうーん」
イデムは意味ありげに鼻を鳴らし、顎を引いてますます上目に見つめる。その瞳に粘りのある光がティシーに絡み、黒い空気が生まれる。悪意に近い、悪戯な顔。
「相変わらず俺に意地悪だなあ、兄貴は。そんなことばっかり言ってると、言っちゃうよ？」
「ひゃっ」

イデムの手がゆるみ、アリカを離したかと思ったとたん、後ろから抱きすくめられた。突然のことにアリカはますます混乱し、全身くまなく伝わる暖かい体温に緊張する。その仕草にティシーはさらに怒りの色を見せ、拳を固める。

「兄貴や親父のせいでアポトーシスができたことを」

「イデム！」

ティシーは目にもとまらぬ速さでポケットから笛を取り出す。吹きかける息の間抜けた音が響き、同時に黒い塊がティシーの前に参上する。鋭い目が強い光を放ち、ゆっくりと形を成すように立ち上がった。

「リリーシア、イデムを蹴散らせ！」

「御意」

リリーシアは低くつぶやき、同時に体を躍らせた。しなやかな鞭を彷彿とさせる柔軟な腕がゴムのように伸び―そう錯覚を覚える前に手はイデムの腕に触れていた。飄々と余裕を浮かべていたイデムだったが一瞬顔をこわばらせ、次には不敵な笑みに変わっていた。

「！」

驚いたのはリリーシアの方だった。リリーシアの手がイデムの腕をつかむまで一秒と経たない時間、目を追うのはもちろん避けることなど不可能に近い状態だった。

だが、リリーシアの細見の腕の上に―イデムの手が掴んでいた。リリーシアにつかまれた腕とは反対の手だ。

「お前、シノビだろ？甘いんじゃない？」

イデムは至極優しい笑みを模り、アリカをきつく抱いたまま体を反転、翻す。絡みあう二つの手は弾けるように解け、体制は一からとなった。

「兄貴も面白いの飼ってるねえ。俺もそういうの欲しいよ。ま、いるといえばいるけどね」

イデムは世間話をするように軽く言うと、アリカから腕をそっと解いた。

現状に一番ついていっていなかったアリカは何もかもが突然過ぎ、体が自由になってもその場にきょとんと立っていた。ティシーが慌ててアリカの名を呼んでいたが、反応できないでいた。
「アリカちゃん」
ティシーと似たトーンでイデムはアリカの耳元に顔を寄せる。細く流れる黒髪がアリカの頬を撫で、アリカはぴくんと体を緊張させた。
「俺、ねえ」
笑うたびに息が吹きかかる。それでもアリカはなぜか動けず、服の裾を握りしめた。
「イデム！」
ティシーは吠え、イデムはその状態のままひらりひらりと手を振る。
「待ってよ兄貴」
そして再び小声でアリカに話しかける。
「…俺、君の事が大っきらいなんだ」
「…？」
アリカはイデムにゆっくり向いたが、彼はティシーによく似た柔らかい笑みを浮かべている。偽りなどどこにも見えず、嫌悪の色も出ていない。ころりころりとよく変わる表情は、今は笑顔だけを浮かばせている。
「俺がこうなったのも、兄貴があんなやつになったのも…アポトーシスのことも、今から起こるかもしれないことも…ぜーんぶ、ぜーんぶ、君のせいなんだよ」
「え…な、何？」
「はは、やっぱり知らないの？そういうところも大っきらい。君の性格とかさあ、君自身のことは全くわかんないけど。君の存在は大の大の大っきらいだよ」
強い力がアリカを引き戻す。慣れたぬくもり、安心する体温…今度はティシーの腕がアリカを守る。その姿を見てイデムはおどけな

がら、からからと笑い、ポケットに両手を突っ込む。
「今日はただ兄貴に会いたかっただけなのになあ～残念だよ」
「目的は何だ」
「目的？だから、おしゃべりだよ。今日はほんっとうに何もしない予定で来たんだ。今日は、ね」
イデムはさも意味ありと言わんばかりに片目をつむって見せ、くるりと背を向けた。しかしその先はティシーの部屋。ティシーは眉をひそめ、イデムの行動をひとまず見続ける。
「また俺と遊んでよ」
「何をたくらんでいる！」
「そのうちわかるよ。…じゃあね」
イデムは後ろで束ねた髪を揺らすと、窓から音もなく飛び降りた。
「リリーシア！」
ティシーの声に彼は素早く窓に近づいたが―行動が止まる。
「どうしたんだ。早く追いかけろ！」
「それが…その、姿が…ありません」
「なんだって…？」
ティシーは何も言わずアリカを離すと、早足に窓に近づき、降りた先―中庭を見た。太陽はだいぶ落ち、緑豊かな庭に深い影を残す。いくら暗いとはいえ、人を見逃すような闇はないが、イデムの姿はどこにもなかった。まるで夢でも見たように、泡となって消えていた。
ティシーはしばらく声を出せず、呆然と窓の縁を握りしめていた。
リリーシアは軽くアリカに目くばせると、姿をすうっと消した。
「……」
残されたアリカはどうしていいかわからず、両手を胸の前で組んだ。
茜差し始めるティシーの背中が、知らない人に見えた。

二章八話

知らない人がそこにいる。知らない人が苦しんでいる。知らない人が悔やんでいる。そして誰かを憎み、謝罪している。

緋色の空は徐々に薄墨がかり、所々にか細い光をともす。

どれくらいの時間が過ぎたのだろうか。ティシーの弟と名乗る男―イデムが窓から去った方向を見つめたまま、ティシーは動かないでいた。その背中に明るさはなく、計り知れない暗さと重みを感じた。

アリカはひとまず部屋に入り、音をたてないように扉を閉めたがすぐに後悔した。密封された部屋に二人きり、痛みすら覚える沈黙が漂う。言葉を発するのも憚る状態だが、何か言わなくてはティシーがそのまま窓から落ちて行きそうな雰囲気がした。

まとわりつく嫌な気配をアリカは振り払うと、そっとティシーの隣に立った。

「ティ、ティシー…」

声は思ったよりするりと喉から出てきたが、続きが言えない。言いたいことは何かあるのに言葉にできず、頭に形すら思い浮かべれないでいた。アリカはそれきり言葉を失い、代わりに手を伸ばした。

「…ありこちゃん」

アリカの小さな指先がティシーの腕に触れ、彼はようやく顔を上げた。アリカは心配そうにのぞきこんだが、声は出なかった。それでもティシーは嬉しいのだろう、先ほど浮かべていた憎悪はなく、力はないが笑顔があった。そしてそっと体を窓から離すと、アリカの手をそっと取った。ティシーの手は氷のように冷たく、アリカの手を徐々に冷やしていく。

「ごめんね」

アリカは一瞬、何の謝罪だろうと首をかしげた。しかしティシーは続ける。

「変なやつが来て怖かった？僕が来る前に何か変なことされてない？」
「う、うん。大丈夫だよ。ティシーは…？大丈夫…？」
「…僕？」
ティシーは少しだけ困ったように口を閉じたが、すぐに満面の笑顔に持ち直す。一瞬のことだったが、アリカはその表情が頭に焼きついてしまった。そして思う―なんて悲しい顔をしてるんだろう。
そう思った瞬間、アリカの手はティシーの頬に触れていた。何かしたくて伸ばしたんじゃなく、ただ触れたいと思った。何か解決できるわけではないが、少しでも苦しさが紛れるように―アリカは色々な願いを込め、始めて自分からティシーの肌に触れた。
ティシーは驚いたように目を見開いたが、少し躊躇するアリカの手をそっと取った。その手をそのまま自分の頬にあてる。
「ありこちゃんはあったかいなあ…」
しみじみ言いながら、ティシーは目をつむる。心底ほっとした表情に、アリカもほっとした。
「ティシー…何があるんだ？俺…俺に、教えて…くれる？」
「ありこちゃんから触ってくれるなんて嬉しいなあ…」
ティシーはアリカから見る、いつもの姿へと徐々に戻っていく。
「…でも僕は話せない…話したくないんだ。実は」
「なんで？」
「これを話せば…ありこちゃんは絶対僕のことを嫌いになるよ。死ぬほど。…さっきのイデムみたいに、ありこちゃんも僕を恨むようになるよ」
「どうして…？俺、そんなこと思わない。絶対に思わないよ…」
「…ありがとう、優しいありこちゃん。でもやっぱり…まだ言えない」
ティシーはそのままアリカの手を引きよせて小さな体をぎゅっと抱きしめる。何度となく抱きつかれたアリカだったが慣れないものはやはり慣れない。そのまま赤面し、もぞもぞと体を動かす。

「このまま何かあっても…僕はありこちゃんを裏切らない」
ティシーは腕を緩めると、アリカをそっと放した。そして眼鏡を直し、笑顔を消して真剣にアリカを見つめた。
「でも、あいつ―イデムのことは少し話しておくね。これからのために…」
アリカはまだどきどきと波打つ胸を押さえ、こくんと静かに頷いた。
ティシーは再び笑顔で頷くと、アリカをベッドに腰かけさせ、自分も隣に座った。

＋＋＋＋＋＋＋＋

イデムが来たという報告をダルテが受けたのは彼が立ち去った直後のことだった。リリーシアは緊張と動揺を抑えきれない様子で彼が来た時のことをなるべく淡々と話し、手短に済ます。言葉を終えると同時にダルテは額を抱え、「ああ」と絶望を吐き出すようにうなだれた。
「大体のことはわかった。リリーシア、下がっていろ」
「は」
同時に姿がかき消える。彼の姿が見えなくなっても、ダルテは体を丸めたまま動けないでいた。
「ダルテ…大丈夫か？」
その隣で親衛隊長で幼馴染のラグが彼女の背中をさする。気丈に見えるダルテだが、ここぞという衝撃に非常に弱かった。特にティシーやイデムの兄弟が絡むと、その体は絶望に崩れ落ちる。
それでもラグの慰めが効いたのだろう、ダルテはぼんやりと顔を上げた。
「イデムが、ここに…。どうしよう、ラグ…」
部下に見せる強い姿はどこにもなく、代わりに気弱な少女のような顔がそこにあった。ラグは心配そうにのぞき込みながら「大丈夫」

と力を込めて言った。
「…でも…これでわかってしまった。もう、戦いはすぐそこなんだ…。ラグ、私は指揮をとれると思うか？私は市民を守れる？」
「もちろん。ダルテ、しっかりしろ。お前ならできるって」
「簡単に…言わないでくれ…。私は怖いんだ。また…あの光景が、あの光景が…」
ダルテは崩れながらラグの腕にしがみついた。わなわなと震える体は確実に何かに脅えていた。ラグはその正体を知りつつ、それが絶望的な光景だとしても彼女に「大丈夫」とエールを送り続ける。
だがダルテは独り言のようにぶつぶつと、呪文のように言葉を吐き続けた。
「また、人が大量に溶ける…アポトーシスが国を蝕む…！液体となった人たちが、人が、人が―」
ぎゅ、とラグの腕を懸命に握りしめる。
「あの時のように、たくさんの人たちが溶けて死んでしまう…！」
語尾は消え入りそうな悲鳴をあげ、苦悩に頭を振りみだす。ラグも同じく内心は動揺し、彼女と共有している記憶を思い浮かべる。
人々が喘ぐ間もなく、ぱちんと溶けていく様を―
そして、イデムが笑っている姿を。
ティシーが笑っている姿を。

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

君は僕のことを許してくれるだろうか。
僕は僕だけのために、君を生み出したことを。
アポトーシスという存在が自然に出てきたものではなく、僕が―僕たちが作り出したことを。
勝ちたいという欲望と、僕の欲望を満たすためだけにアポトーシスを生み出したことを、きっと君は―恨むだろう。

そしてアポトーシスを広めたあいつは、さらに大勢の人に恨まれるだろう。

「僕たち兄弟―いや、血は確かにつながっているけど、あいつは―いや、まだこれも言えない」

「…どうして？」

アリカの丸い目がじっとティシーを見つめる。この瞳に見つめられるとどんなことも言わなければいけない衝動に駆られるが、ティシーはぐっと自分の中に潜む秘密という名の病を押しこめる。

息を整え、ティシーは続けた。

「どうしても。聞きたかったら…そうだなあ。ありこちゃんから僕にちゅーしてくれたら言ってもいいかな」

「な、な、何、それ…！」

「もちろん、口に」

「やだっ！」

アリカは顔を赤らめながらぷいと横を向き、悔しそうに唇をかんだ。その様子をティシーは愛しくてたまらないとばかりに熱く見つめ、「冗談だよ」と言いながら頭を撫でた。

「とにかく、まだ…ね。…あいつの名前はイデム。あいつは…戦争の加担者で、アポトーシスを広めた原因なんだ」

「どういう…こと？」

アリカは火照る頬を抑えながらティシーを上目に見る。先ほどの冗談（ティシーは本気だったが）がよほど悔しかったのか、少し不機嫌そうだ。それもまたかわいらしい、とティシーは笑いながら続けた。内容はティシーにとって嫌なものだったが、アリカがいるため心は安息している。

「もう二十年近く前の話だけどね。今でこそ人数は多いけど…アポトーシスは元々数人しかいなかったんだ。アポトーシスは触れた人を溶かす病を持った人だけど、その数人はちょっと違う。血は触れた人を溶かし、汗などの体液は触れた人をアポトーシスにしてしま

う」
「溶けないの？」
「そう、溶けない。代わりに、自分もアポトーシスになってしまうんだ。…これについての発祥や詳しいことはいえないけど…初期の人たちについてはわかった？」
「うん…」
「よかった。…その数人はこの城で…よく言えばだけど保護されてた。当時、僕の父がアポトーシスの研究をしていてね…彼らについて調べていたんだ」
「お父さんが？」
ティシーは苦々しく頷いたが、すぐに表情を取り戻す。
「そうだよ。…ある日ね。調べていた過程で…あるものができてしまったんだ」
ティシーは不意に遠くを見つめる。眼鏡の向こうに佇むターキスブルーは在りし日を思っているのか、それとも別の何かを恨んでいるのか…強い影と憎悪が見え隠れする。アリカは黙って聞き、何となくティシーの服を握った。
「アポトーシスは体温を失うと効力が失せる。…でもそこでできたのは、体温関係なく力を発揮できる毒薬だった」
「どく…」
恐ろしい言葉だが、それは自分も持っていると思うとアリカは悲しくなった。それでもどうすることもできず、何もわからずにいる。自分は凶器だ、とアリカは少し泣きたい気持ちになったがぐっとこらえた。
「そう、毒。アポトーシスを作り出す毒薬だよ。それは…川の水に流された。それでみんな感染したよ」
「じゃあ…俺のお母さんもそれに感染したの？」
「……」
ティシーは肯定を示すように微笑んだが、どこか陰りがあった。アリカがなんだろうと問う前にティシーは言葉を続けてしまい、問

いかけはうやむやのうちに消えてしまった。
「…何も散布するために…作ったんじゃない。たまたまだったんだ。それを…それを」
ティシーは両手に力を込め、恨みを瞳に灯す。
「イデムが奪い、散布した」
アリカの脳裏に先ほどまでいたイデムの姿がよぎる。ティシーに程よく似ていて、遠い人。黒くて怖い、でも飄々として掴めない人。
「その後は…地獄だったよ」
ティシーは力なく笑うと、アリカの額に唇を付けた。
「今日はここでおしまい。お腹すいたでしょ？何か食べようか？」
「ティ、ティシー…！まだ話し…」
「もうだーめ。さ、待ってて。何か持ってきてあげるから」
「待って…！ねえ、俺…これからどうすればいいの？何をすればいいの…」
ティシーは立ちあがり、上からアリカを見つめる。
「ありこちゃんは…僕と一緒にいて。ずっと」
「ずっと…？」
ティシーはそのまま笑い、ふわりと風のように部屋を出ていった。
アリカは言われた意味が飲み込めず、いつまでも扉を見つめ続けていた。

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

（そう、地獄）
ティシーは廊下を歩きながらぼんやりと光景を思い起こす。
川…正確には、井戸。
戦争の最中だった。
なぜ戦っているかわけもわからず、ひたすらに人を殺め続ける。
まるで滑稽なショーのようにさくさくと、さくさくと剣を立てていく。…人々は井戸にアポトーシスが放り込まれた事実を知り―戦争

が始まったと思っている人たちが多い。しかし実際は何もかも違う。それを知るのはおそらく、自分たちだけだろうとティシーは軽く目をつむる。

―戦い続ける。戦い続ける。

倒れる人たちに人々の心は徐々に腐り、それら全て人形に見えた。目の前にいる人も死んだ人も自分も、全ては人形。血の出る人形。殺したところでなんともない、ただの人形。

人々の精神は限界に達していた。

ティシーはその姿をよく覚えている。幼い脳裏に、嫌というほど焼きつけられている。

そして…ほどなくして悲劇は訪れる。

毒薬が、井戸に投げ込まれた。

それとは知らず、兵士たちは水を飲み…感染する。

全員が全員、知らぬ間にアポトーシスになったわけではなかった。ある人は発狂しながら一瞬にして溶け、ある人は痛みに叫びながら徐々に溶けていく。その姿を見て、生き残った人は狂いに狂った。

なんて酷い劇だと、ティシーは冷たい心で思った。

そして生き残った人は…アポトーシスとなっていた。

なぜわかったか？触れた敵の兵士たちが徐々に溶けていったからだ。

ディルティス帝国の兵士は、全て凶器と化した。

(…なのに父は…。兵士たちを…。いや、あいつが…)

ティシーは足を止め、窓を見た。すでに暗くなった外は何もなく、ただ闇が広がる。

あの時見た、紅の戦場はどこにもない。

(そして僕は罪を犯した)

ティシーはゆっくり瞬きをすると、再び足を進めた。

(でも僕は…欲望を満たしたかった。満たすんだ、満たすんだ…)

思考の先にアリカがいる。

小さな、小さな、小さな姿…。

愛しくてたまらない、欲しくてたまらない姿が。
ティシーは自嘲的に笑う。
「僕は何をしたいんだろうね？」
その問いに答えてくれるものは誰もいない。
代わりに小さな揺れが城を襲った。
それは徐々に、波紋のように広がり…ティシーに衝撃を、そしてアリカに深い影を落とす。

「…あ―」
アリカはぽかんと口を開けたままその場に硬直した。どの行動を起こしていいかわからず、ぼんやりとその場に立ち尽くし、彼を見上げる。
月明かりを背に黒い影はくつくつと喉を引くつかせ、粘着質な笑みを浮かべた。切り裂かれたように吊り上る口元はまるで異形の怪物に見える。
それを目の当たりにしたアリカは瞳孔を縮め、恐怖という恐怖に絡めとられ、より動けなくなった。
「―言ったよね」
ティシーに似た悪魔の声がアリカの頬を指先で撫でる。冷たい感触が痛みとなって全身を駆け巡り、アリカは体を震わせる。しかし手は容赦なくアリカを捕えようとと蠢いた。
「今日はって」
かすれた笑い声がひどく歪んで聞こえた。
「もう次の日になったから…いいよねえ？」
舐めるような声にアリカは何一つ言えず、何一つ行動は起こせないまま―意識は暗闇へと消えることとなった。

二章九話

最初にその姿を見たのは城に勤める若いメイドだった。夜遅くまで勤務をしているが文句はなかった。なぜなら城―やや離れた場所だが、そこに寮があり、メイドたちは全員そこに寝泊まりさせてもらっているからだ。部屋は相部屋だが広く、使い心地もよい。毎日清潔なシーツと栄養価の考えられた食事、さらに風呂までついている。メイドという職業ながらよい暮らしをさせてもらっていて、メイドたちは非常にありがたいと思っている。

これもダルテ様のおかげだ―まだ若い女元帥に感謝しつつもメイドは一人、使用済みのタオルをせっせとランドリー室に運んでいた。

後少しで片付く―今日一日の疲れをじんわりと体中ににじませつつ、部屋を出た直後だった。

今宵の月は煌々と明るく、昼間と同じように廊下に濃い影を落としている。

静まりかえった長い廊下にいびつな影が一つ、絨毯に縫いつけられていた。

メイドはおかしいなと思い、ふと顔を上げた。

「…ごめなさい」

それが最後に聞いた声になった。

鈴が転がるような華奢で繊細な声は文字通り困ったように震えていたが、手に握りしめていた銀色の物―メイドには何かは見えなかったが、それは躊躇というものがまるでなかった。

「これが最後になる人には謝罪しろと、主が言ったものですから」

次の声はもう震えていなかった。か細い声質は変わらなかったが、感情はどこにもない。しかしそれがメイドに聞こえたかどうかはわからない。

びしゃり、と水の中で跳ねる魚のようにメイドの体は大きく痙攣し、自らの血に溺れてのたうった。しゅうしゅうと無常な呼吸音だ

けが何かを訴える。痛みはもしかするとなく、こうして動きまわっているのは本能的で最後のあがきなのかもしれない—メイドに刃を突き立てた女は冷静に分析した。

メイドは消えるように力を抜くと、そのまま動かぬ人形と化した。

その様を女はぼんやりと光のない黒い瞳に映し、興味なく素通りした。びちゃ、と足に血がまとわりついたが気にしない。

まだ十代後半か二十代前半に見える彼女はたおやかな花のように、発する声と同じくして折れそうなほど華奢な体をしている。とても暴力は振えなさそうに見えるが、彼女はメイドを一人容易く殺した。月明かりに刃が照らされる。刃は剣ではなく、大鷲の爪のような形をした鉤爪鉄鋼だ。それは彼女の細い体には似合わないが、細く白い手首にしっかりと馴染んでおり、彼女が武器にどれだけ慣れているかが見てとれるようだった。

はちみつのようなブロンドの髪が揺れた。縛られてない長い髪は無造作に揺れ、白い体にまとわりつく。白いワンピースを着ているせいか、その姿は妖精のように見えた。見る人が見ればどきりと、誘惑されてしまうだろう。

彼女は鉤爪をずるようにだらりだらりと進むと、廊下の闇に紛れた。

異形の存在に気づいたものは、残念ながらまだいない。

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

空気というのは非常に敏感だ。誰かが動けばその人の匂いを運び、揺らぐ。

異臭に気付いたのは、自室にいたラグだった。彼は動揺して怯える幼馴染で守るべき上司であるダルテをなだめ、落ち着かせた後すぐに自室に向かい、机に置いてある資料を読み漁っていた。片目である彼には細かい字は読みにくかったが、それでも一文字逃さず読まなければならなかった。

しかし集中はすぐに途切れる。
（…何か、匂う？）
ラグは気のせいかと思ったが、一度切れた集中は中々戻らない。資料を読むことを諦め、窓に向かった。すでに月がぽっかり現れ、ひっそりと冷たい光を放っている。
窓をぐい、と開け、風を調べる。
そよそよと昼間より弱く吹く風―しかし異臭を運ぶには強い波だった。
（…血？）
一瞬で異臭の正体に気づいたが、彼はどこか疑っていた。まさか、と思いたい反面、なぜ？と疑問も湧く。
城の警備は万全のはずだ。ありとあらゆる災害に備え、四平を覆っている。一見要塞に見えるのも、防衛のためだ。それに中も兵士たちが見守っているはずだ。
（なのに血の匂いなんて…）
ラグはしばし考え、そして立ちあがった。向う先はダルテのところだ。彼女はまだ起きているだろう―ラグは急いで足を運ばせた。嫌な予感がする。

「ラグ！」
ラグの部屋（親衛隊長なので個室）から女元帥の部屋まで遠く、さらに階も違うのだが彼女の声は部屋を出てすぐに届いた。ラグは慌てて振り返り、飛びつきそうなほど焦る彼女を受け止めた。急いで来たのだろう、軍服ではない通常の格好にガウンを羽織った無防備な姿だった。ラグはその姿にも慌てたが、今はそれどころではない。
「血の匂いがしたんだが…」
「ダルテも？」
「ああ。慣れた…匂いだからな。…何か、あるのだろうか…」
「今のところ被害は？何か来てるのか？」

ダルテは首を横に振ると、顔を伏せた。
「今のところ何もない。静かなものだが…わからない、予感ばかりする。予感だけで終わってほしいんだが…」
錆びた鉄の匂いがリアルに鼻を突く。ダルテはガウンを思い切り掴むと、ぐっと唇をかんだ。
「…ラグ、兵士たちを叩き起こせ。まだわからない。だが念には念を、ただちに城内を調べろ。そして…」
ダルテは笛を取りだすと、間の抜けた空気音だけの音を吹いた。同時に影が形を作り、リリーシアが現れる。
「リリーシア。お前は四君子に連絡を。馬車を調べるのはいったん止めて、城に戻るよう、早急に手配しろ」
「は」
「あと、ティシーを私の部屋へ。四君子を呼ぶ前に、だ」
「御意」
リリーシアは無駄な動作なく返事をしてすぐに姿を消す。こういう時、シノビという職業は便利だと、今さらながらダルテとラグは強く思った。
「ラグ、それでは頼む」
「ダル…元帥の守備はどうするんですか？」
「自分の身は自分で守る。…私が危険になる前に、城を捜索しろ」
「了解」
「そして万が一、不穏な動きがあれば…私よりも先にアリカと研究所に警備を回せ。もし何かあるとしたら…相手はもしかすると…イデムだ。そうなると手に入れるべきは…原液であるアポトーシス」
「…アリカ」
ダルテは深く頷く。その瞳はすでに脅えはなく、元帥である強い光が宿っていた。徐々にたくましさを取り戻す彼女を見てラグは安心したと同時にスイッチを切り替える。
「では、捜索と警護を同時に」
「分散しすぎに注意しろ。相手はイデムと想定して…おそらく、戦

力をつれてくるだろうから」
「了解」
ラグは姿勢を正し、きっちりと敬礼するとすぐに兵士たちの宿舎へ向かっていった。メイドたち同様、彼らの住まいはすぐそこにある。
残されたダルテはラグの姿が消えると同時に頭を抱え、目をきつく瞑った。
そこにあるのは幼き頃に見た光景。
地獄の、赤だった。

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

暗い廊下を一人進むティシーはぼんやりと思考に埋もれながらもメイドたちの部屋へと目指す。時間という概念がなかったため、食堂が閉まっていることに気付かなかったのだ。
（ありこちゃん、おなかすかせてるだろうなあ…）
ティシーの食事法はばらばらで、腹がへらない限りは取らない。それに合わせているため、アリカは実は飢えているかもしれない…そう思うと、少し可哀そうな気がした。
（ありこちゃんに対して色々思ってるくせに…妙なところで心配しちゃうのってどうなんだろう）
ティシーは自嘲気味に自分の問い、眉間に力を入れた。
ともかく、何か作らせるためにメイドたちの部屋に行こうとして―足が止まる。つん、と鉄に似た匂いが空気に混じった。
薄暗い廊下に輝く一つの人型。
二十代前後だろうか―女性だ。まるで蝋人形のように、月明かりに照らされた皮膚が生々しい白い光を放つ。切りそろえられたショートボブのブロンドが鈴でも鳴りそうなほどしっとりと顔に馴染んでいる。
上下に揃った白いスーツが恭しいイメージを与え、まるで神の使

いと取れる光が溢れていた。
女は目をゆっくり開くと、灰色の瞳をティシーに向けた。鋭い光を秘めた瞳は、まっすぐにティシーの瞳を射る。
麗しき立ち姿にティシーは見とれる以上に、黒い笑みを浮かべた。
「久しぶり、イデムの捨て駒。確か―エルン？リィナの方だっけ？」
まるでここにいることがわかっていたような軽さでティシーは上目に彼女を睨む。しかし彼女は動じず、「ええ」と頷いて両手をゆっくり広げた。抱擁を表す仕草ではない。華奢で繊細な体から放たれるのは―殺気。
「何年ぶりだというのに余裕ですね。相変わらず。嫌味な感じがしてとても嫌です」
「そっちだって。相変わらず淡々としてるのにすっぱり言うねえ」
「いいんですか？そんな余裕を持っていて。イデム様はアリカ・ランザートを攫いますよ」
「あは、そうだねえ。そうだろうとたった今思ったよ。わざわざ言葉にしてくれてありがとう」
「じゃあなんでそんなに余裕なんですか？もっと動揺してもいいんですよ？…気味悪い」
「…してるよ。嫌になるほど。君が苦しんでのたうってごめんなさいって言うまで殴りたい感じだよ」
「相変わらず、怖いことしか言わない」
ティシーに対する女は手をくい、と内側に向けた。その表情は嫌悪の色を忘れず、ひたすら彼を凝視して検索し続ける。しかしティシーはにやにやと笑うだけで―しかし瞳の色は怒りに震え始めている。
「僕が、どれくらいありこちゃんを欲しいと思ってるか。僕の元から離れることを、僕がどれだけ嫌がるか―こうして色々考えてみたけど、やっぱり駄目みたい」
ティシーの喉がくく、と震えた。とても歪な笑い方だ。
眼鏡の奥がぬらり、と光る。

―馬に引きずられ、姿を消したアリカ。その瞬間、真っ白になるほど焦ったあの感情がやはり正しかった―そして今も、怒りに煮えたぎる。どろどろとどろどろと、感情ばかりがせめぎ合い、ティシーは軽く頭を抱えた。

「どう思おうと、いいや。―僕のありこちゃんは誰にも渡さないよ」

ティシーは一瞬、にっこりと最上級の優しい笑みを浮かべ―体を一歩引かせた。

その瞬間、銀色の人が四方を走る。

細いワイヤーだ。月明かりに照らされ、鋭利に光る。それだけでそれはただのワイヤーではなく、明らかに殺傷能力のあるものだと理解できる。

そのことはティシーもよく知っている。彼女の武器がワイヤーで、人を粘土のように輪切りにしてしまうことを。

「よけないでください」

「無理言わないでよ」

ティシーはおどけ、ステップを踏みながら彼女のワイヤーを凝視する。辿ると、細い手首に似合わない無骨な黒い鉄のブレスレットに行きつく。そこからワイヤーは自由自在に飛び出し、相手を絡め取る。

「やだなあ。それ、蜘蛛みたいで。僕、蜘蛛嫌いなんだけど」

「それはよかった。私もあなたが嫌いですから」

彼女は腕を上に振るうと、下に一気に落とした。同時にしゅ、と空間を縫うようにワイヤーがティシーをめがけて走る。ティシーは顔を右にずらすと、歯を食いしばった。はらり、と灰色の髪が数本床に落ちた。耳がちぎれなかっただけましだ、とティシーはうすら笑いを浮かべた。

その顔に女は眉間に力を入れ、不快そうにしわを寄せた。

「いいんですか？私と遊んでて。今頃イデム様がアリカを運んでますよ」

「だろうね。早く行きたいけど、どうせ君は止めようとするんでし

ょ？」
「しますね。そのための私ですから。それに」
月明かりの中、もう一つの人型が生まれる。その姿がティシーと対する女と髪型と瞳の色、そして服装以外同じだ。そして、手にしている武器も違う。
ティシーは振り返り、憎々しげに舌を打った。
「そんなに僕のことかまいたい？」
「……」
「そのおどおどした様子…じゃあこっちがエルンで」
ティシーは顔を目の前に戻し、ショートボブの女を見据える。
「こっちがリィナ。で、いいんだよね？」
「…はい」
「…エルン。答えなくていいのよ」
ショートボブの女―リィナは静かに、それでも怒りを交えて言うとティシーの後ろに立つロングヘアの女―エルンはおどおどとその場に縮こまりながら頷いた。
「ティシー・エイルワンダー。殺してはいけないという命令が出ているので、これ以上のことはしません。ただ、この場にいてください」
「嫌に決まってるだろう？」
「言ったところで無駄です」
ワイヤーが走った。壁という壁を蔦のように這い、ティシーを覆う檻となる。それでもティシーは動じなかった。にやにやと不敵な笑みを浮かべ、リィナを眺める。
「…まだ余裕でいられるんですか？」
「生憎、さっき言った感情で気分悪いよ。でもねえ…僕だって馬鹿じゃない。それなりの根拠あってのゆとりぐらいはあるよ」
その答えに二人は黙り、じっとティシーを観察する。しかし彼から見えるものは何もなかった。
「エルン」

「！」
いきなり名を呼ばれ、エルンはびくりと大げさに体を震わせた。
ティシーはゆっくり振り返ると、眼鏡を光らせた。
「誰か、殺してきたね？爪が濡れてるよ」
「……」
彼女の手から伸びる鉤爪は乾いた色をしていた。しかしそれは鉄の色ではなく、血によるくすみ。滴るものはないが、匂いだけが暑苦しく充満している。
「…もうすぐ来るよ」
「…？」
二人の女刺客は同時に顔を引き、ティシーを睨んだ。
「あは、馬鹿だったねえ。二人とも。そんな血の匂いさせてたら、誰だって勘づく」
ティシーは軽く目をつむり、両手をポケットに突っ込んだ。
そして鼻歌でも歌うように軽く上を向いた瞬間―
リィナの体が倒れた―いや、横倒しになった。突風に突き飛ばされたように横にスライドし、壁に叩きつけられる。それほど衝撃はなかったが、ご、と鈍い音とワイヤーの檻が儚く散る音が廊下に大きくこだました。
突然のことに飛ばされたリィナはもちろん、ティシーを挟んで反対側にいたエルンも何が起こったか理解できなかった。このことがわかるのは、目をつむっているティシーと当人である、
「リリーシアくん。とりあえずやっつけといて」
「は」
女たちとは対照的に漆黒の影を含む、リリーシアだけだった。
リィナが姿勢を直し、エルンの動揺が消える前にとティシーは素早く廊下を駆けだした。

二章十話

ラグは舌を噛み切りたい気持ちでいっぱいになった。苦渋が全身を駆け巡り、苛立ちよりも焦りと困惑が頭の中で戦い合う。しかしそれは表に出してはいけない。今自分が混乱してしまえば、城は容易く乗っ取られ仮とはいえ、現元帥を危うい場所に立たせてしまう。今この城を支える主であり、大切な幼馴染を危険にさらすようなことだけはしたくなかった。

「お前たちは城の入口を警備しろ！」

的確に兵士を散らし、各重要な階に配置していく。しかしそれも保つかどうかわからない。

城の警備は思ったよりも崩れてはいなかった—むしろ、誰も倒れていない。ではどこから血の匂いがとラグは考えを巡らせたが、わからない。今のところ各階に妙な人物はいないと報告が来ているが、リリーシアからの報告だけはない。

（となると、ティシーはすでに巻き込まれてると考えればいいな…）

ラグは兵士たちが適当の出払ったのを見守ると、ダルテの部屋へ急いだ。まだ元帥のところに兵はやってない。

（もしイデムだとしたらダルテに用はないと思うけど…。だが違う者…賊だとしたら、危ない。いや、賊だとしたら兵士が動いているはず…やっぱりイデム？）

予感がする。拭いきれない泥がどこかに潜んでいるような気がした。

ラグは足をさらに速めると、一直線に部屋へと向かった。

（なぜだ…！）

血の匂いが濃くなる。胸やけのする異臭が立ち込め始める。暗闇と共に、何かが蠢いているとしか思えない。

（なんでダルテの部屋の方で…！）

こういう時だけ予感があたるなんて、とラグは奥歯をかみしめた。

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

呼吸ができない。ひゅうひゅうとどこかから流れて出ていってしまっているようだ。心臓が不規則にリズムを刻み、所々で血を止める。いや、流れている。流れ落ちていた。

ダルテは痛みに顔をゆがめると、ガウン越しに足を覆った。幸いまだ動けるが、走れるかどうかは疑問だった。

「ダルテ！」

ダルテは肩を大きく震わせたが、扉を蹴破るように飛び出してきた人物―ラグを見て安堵の息を漏らした。

「…ラグ、か」

「…！ダルテ…その傷は…大丈夫なのか！？」

「平気だ。痛むが、命に別条はない。…それよりも、私のところになど来ている場合ではないだろう」

「今兵士たちを配置している。…一体誰が…やっぱりイデムが！？」

「落ち着け、ラグ」

ダルテは額に汗を浮かべながらも笑ってみせた。しかしラグは不安げにダルテの体を支え続ける。

「予感通りだ。イデム…私のところに来たのは配下の方だが。何も言わなかったが…これは足止めのつもりだろう。意味がまんまだがな」

ダルテは苦笑すると、大分血の止まった足をさすった。

「あ、ああすまない。急いで止血を…」

「だから。私の世話はいい。大した傷ではないし、痛みも引いてきた。…私を足止めする理由があるのだろう。…ラグ、アリカの元へ急げ。…ティシーは？」

「連絡なし。もう出会ってるころだろう…」

「では、アリカの元は今」

「兵士をやった」
「…おそらく、足らないだろう。…何をしている、早くしろ！私はこの通り…動くに鈍い」
「だが…」
「命令だ」
ラグは片目を細めると、観念して目を瞑った。
「了解。…ダルテ、ちゃんとここにいるんだぞ」
ダルテは笑うと、ラグをそっと押した。
「私は元帥だぞ。それにお前より一年多く生きてるんだ。幼い扱いをするな」
「…そういうつもりで言ったわけじゃないけどね」
「…ありがとう」
ラグは最後まで心配そうな色を浮かべていたが、振りきるように扉を出た。
ダルテはその背中をいつまでも見守り、血にまみれたガウンを脱ぎ棄てた。そしてそれを引き裂き、足にきつく巻きつける。もう血は止まって乾いているが、傷口は浅いとはいえない。それに両足とも負傷している。
（どこまで歩けるだろうか）
兵士たちの心配にならないよう、しかし元帥として倒れないよう、ダルテは自分自身に活を入れる。
どこに行くかは決まっていない。アリカのところだろうか、入口だろうか、それともひたすらにさまよおうか。
（イデムを捕えなくては）
元帥として捕えれば戦争の火種が消え、陰謀が暴かれるかもしれない。アポトーシスの件も、馬車の件も全て。
だからダルテは動く。仮とはいえ、元帥としての使命を果たすために。

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

慣れたぬくもりがじんわりと全身を包む。心地の良い匂いではあったが、どこかよそよそしく冷たさと、違和感があった。
アリカはうっすら目を開け―いつの間に目を閉じたかと焦り、そして状況に困惑した。
「おはよう」
聞きなれた声に近かったが、そこにあるのはアリカの想像していた顔とは違った。
「え、あ、…」
ティシーとたがわぬ笑顔でアリカに微笑みかけているが、その実酷く冷たい形ばかりの笑みだった。アリカはそのことを何となく肌で感じ、全身に恐怖が走った。その瞬間、体が拘束されていることに気づき、もがいた。
「動かない方がいいよ。返って締まって痛くなる」
ティシーと似ているが黒髪と群青の瞳をもつ男―イデムはゆっくりとアリカの前髪を分けた。その先にアリカのおびえた紫の瞳が震えている。イデムは満足そうに口元を歪ませると、手を離した。
二人は闇に包まれていた。アリカはどこにどういるのかわからず、目を凝らしたが月明かりで浮かび上がるイデムの立ち姿以外わからなかった。だが目がこなれるとここは部屋―しかしティシーの部屋ではない、幾分か小さな小部屋にいることがわかった。そしてアリカは拘束され、床に転がっていることも理解できたがなぜこのようなことになり、そして再びイデムがいるのかはわからなかった。
「どうして…」
「ねえ、アリカ。君はアポトーシスについてどれくらい知っている？」
「…え？」
唐突な質問にアリカは何とか頭を動かし、イデムを見上げる。彼は窓を背に、目を細めてアリカを見下ろしている。その表情は笑っているが、冷めている。時折見せる黒く粘着質な感情にアリカはや

はり怯えた。ティシーに似てはいるが、全くの異質な存在だった。
「アポトーシスはねえ…自然に発生したものじゃない。創られたんだよ」
「……」
「はは、知ってた？それとも今知った？…表情豊かでいいね、君。兄貴が君を欲しがる理由がちょっとわかるな」
くつくつと笑う声はティシーに似ているため、アリカは少し困惑した。
「…はは、おもしろい顔。…戦争が起きた理由ってわかる？知らないよねえ。生まれてないし」
イデムは独り言のようにつぶやき、楽しそうにアリカを見つめる。
「元々不仲だったんだよ。この国とタルス国は。一番栄えているディルティス帝国が嫌いだったんだよねえ、きっと。だから虎視眈々と狙ってた―そのことにディルティス帝国も気づいていた。だから一挙に殺そうとしたんだ。タルス国の上の人たちをこっそりね。もしかすると国全員だったかもしれないけど。そうすれば不穏なものは消えるし、国を吸収できて大きくなれる。そこで作ったんだよ」
アポトーシスをね、と彼はどこか子供のように無邪気に笑った。
「人間兵器さ」
「兵器…」
「そう、兵器。触れた人間を溶かす、人間の形をした兵器。…それを作ったのは」
くすくすと笑い、勿体ぶりながらしゃがみ、アリカをじっと見つめた。アリカは脅えながらもどこか遠い話のようにぼんやりと聞くことしかできないでいた。
「俺の親父…そして、ティシー」
だからこの台詞を信じることができないでいた。
アリカは消えかかる意識と格闘しながら、イデムを見続ける。
「ティシーは君をだましてるんだよ。自分だけが保護できると言いながら、その原因を作ったのはあいつ。特に君は」

「どういう…こと…」
「どうして君だけここにいると思う？数あるアポトーシスの中で、どうして君だけ？どうして実験に君が必要なのか。…特別だからに決まってるっていうのはわかってるよね？」
アリカは答えれなかった。ただどうすることもできず、イデムを見続けるしかできない。
彼は意地悪く笑うと、アリカの胸倉を掴んで自分の目線と合わせた。
「ん…！」
突然のことにアリカは目をつむり、反射的に顔をそむけた。怯えを満面に出すアリカを見てイデムは笑い、息を吹きかける。
「君は…君の母親は、最初に造られたアポトーシス。そして君は…ティシーの欲望で勝手に造られた哀れな子供。最も強力とされた最初の人間の子供」
アリカはうっすら目を開け、横目でイデムを見た。彼は飄々と、だが黒い気配を吐き出し続けている。真偽はわからないが…アリカはどことなくこれが真実のような気がした。まだ飲み込めてない部分が大半だが、何となく理解はできてしまった。
戦争のために造られた人々。その子供たち。そして―ティシーの話と合わせるのであれば、その人々が広めていったアポトーシスという存在。
アリカはああ、と落胆と夢のような話に頭をもたげた。
「ティシーは…」
「実験のために君を飼いならしたんじゃないの？治療薬はまず元となる体を調べないとね…。本当は資料があるんだけど、親父の奴が消しちゃったからね」
アリカの中にあるティシーの姿が少し消えた。笑みも、声も、姿も、全てが曖昧になっていく。
「あ、そうそう」
アリカを軽々持ち上げた状態でイデムは世間話でもするように軽

い声をあげる。
「親父はもう死んじゃったからその資料ってやつはもうないんだ。死んだと同時に消えたからねえ。…何といっても」
「も、もう…聞きたくない…」
アリカは消耗しきっていた。ただでさえ拘束されているというのに、事実だけを淡々と告げられる。どれも理解したくないもので…でもその通りのものばかり。どうしてティシーではなく、イデムから言われなくてはいけないんだろうとアリカは無性に泣きたくなった。
「だーめだよ」
あはは、とイデムは笑ってアリカを落とした。とすんと軽い音を立ててアリカの体は床に力なく倒れた。
「だってさ、親父を殺したのはティシーなんだよ？」
「嘘…」
「嘘？どうして信じてるの？あんなやつ。あいつさーのんびりしてるように見せてるけど、本当はすごーく冷たいやつだよ？自分のことしか考えてない、嫌なやつ。自分だけが世界なんだよ、あいつは」
「そんな…」
「そんなことないって言いたい？ふーん…随分と信頼してるんだね。気持ち悪い」
イデムは足を延ばし、アリカの背中を踏みつけた。アリカは小さく呻いたが、歯をくいしばって我慢した。
「あいつはさ。アポトーシスを造りあげ—君のお母さんを恋い焦がれた」
イデムは目を細め、アリカを睨む。
「だけど自分は触れることができない。だからアポトーシスが効かないような体になりたかった」
ぎりぎりと足がアリカの小さな体に食い込んでいく。
「まず俺を実験台に使った。そしてダルテ、ラグを。最終的に完成された形で、ティシーは自分を改良した。人間自体を作ろうとした

こともあったよ。…あいつはさあ…友人だろうと兄弟だろうとそんなの関係なく、切り刻むことができるんだ。俺たちはまだ小さくて抵抗できなかった…それでも、容赦なく」
「あ……ぅ」
アリカの口から唾液が流れる。堪え切れず、アリカはせき込んだ。
「でもねえ…皮肉なことに、君の母親は親父のものになった。親父もまた、君の母親が好きだったみたいだね。気持ち悪い連鎖だろ？だから、あいつは親父を殺した。そして君の母親を見限った」
イデムはアリカの体から足を退けると、つついで仰向けにした。アリカは苦しそうに何度も咳こみ、体を震わせて不規則な呼吸を繰り返した。
「君の母親は親父が手をつけたから、遺伝子を受け継ぐ子供を作り、自分のものにしようと考えた…でも自分と血がつながるのが嫌だったんだよねえ。適当に組み合わせて、体内に宿し…君を誕生させようとした。でも」
アリカの意識が遠のくのがわかったのか、イデムはアリカを軽く蹴った。
「俺が邪魔してやったんだけどね。…さて、これくらいでいいかな？時間つぶし」
イデムは窓の外を見つめ、煌々と光る月を見上げた。
「俺の部下たちが来たら引き上げるから、もうちょっと―」
「二人だったらもう少し遅れるよ」
イデムは振り返り、アリカは耳をぴくんと反応させた。
そこに立っていたのは、イデムの予想していた人物だったのだろうか―イデムは動揺せず、兄を笑みで迎えた。
「なんだ。兄貴が先に来ちゃったよ。よくわかったね。ここだって」
「……アリカに何を言った」
「しまったなあ…声が漏れてたか。…別に？世間話だよ」
アリカは浅く呼吸を繰り返しながら、少しだけ顔を上げた。ティシーの顔は暗く、わかりにくい。

「アリカを返せ」
「いいけど…この子は兄貴のところに行くかなあ？」
「…お前……！何を吹き込んだ！言っておく。お前の情報は間違ってる！」
イデムは兄の声を無視すると、アリカの縄をほどいて腕を持ち上げ、ゆっくり立たせた。小さな体にダメージはあれど、軽傷なのだろう。アリカはふらつきながらもその場に立ってティシーを恐る恐る見つめた。
ティシーは微笑んで見せたが、彼女に見えているだろうか。
「ありこちゃん…」
アリカはためらった。何かを信じていたいのに、それが何かわからない。
「兄貴。十秒時間をあげる。もしこの子が兄貴のところにいかなかったら…俺がもらっていくから」
「うるさい。…ありこちゃん」
アリカは動けず、ティシーをひたすら見つめた。そしてティシーは近寄り、手を伸ばした。
「あ―」
アリカの手が怯えた。

震えながら、ティシーの手を拒絶した。

「…！」
憔悴し、焦点の合わないアリカの体をイデムは自分の元へと引き寄せた。ティシーの手から離れ、二人の距離は大きく開いた。
「兄貴、残念でした」
「ティ、シー…」
アリカは自分の行動がわからず、ひたすらティシーを見た。
ティシーは目を見開き―その先に悲しみを広げていた。
酷く寂しい目をしていた。どこまでも辛そうに、アリカを見続け

た。
その後の動きは全てスローモーションのようだった。
イデムはアリカを抱え、窓から降り立つ。
ティシーは動けず、その姿を見続ける。
アリカは一瞬だけ手を伸ばし、口だけ開いたが声はない。
全ては闇に飲み込まれ、消えていった。

二章十一話

銀色の糸が落下するイデムとアリカの体を捉え、上に一気に引き上げる。イデムは遊具で遊ぶように笑いながら壁をけり、窓に滑り込んだ。抱えられたままのアリカはただ呆然と、最後に見たティシーの悲しい顔を思い浮かべては涙をこぼした。

「エルン、リィナ。遅かったじゃないか」

ブロンドの双子はイデムに頭を同時に下げ、「申し訳ございませんでした」と横目でリリーシアの姿を見ながら上げた。息の根は小さいながらまだ生きている。

「子飼いのシノビね…弱いくせによく動いてくれるよ」

「殺しますか？」

「いいや。このままでいいよ。今回の目的は違うところにあるからさ。…他に誰か殺しちゃった？」

ロングヘアのエルンがおどおどと前に出て、実はと顔を上げる。

「メイドに見られてしまったので…その、殺してしまいました…」

「メイドかあ…一応死体処理しておこうか。…どこにある？」

「こ、この先です」

エルンは安堵の息を漏らし、先に進んだ。その姿をイデムは見つつ、リィナに声をかける。

「元帥の場所はわかってる？」

「はい、もちろん」

「よし。じゃあメイドの死体処理はエルンに任せて、俺たちはそっちに行こうか。アリカも手に入ったしね」

イデムは子供のような笑顔を浮かべ、アリカをひょいと上に持ち直した。肩に担がれる形になったアリカは抵抗せず、ぼんやりと床に目を落としていた。

「意識は？」

「あると思うよ。ただ…ショックだったみたいだねえ。アポトーシ

スのこと」
「話したんですか？」
「暇だったし…何より兄貴を信じてるのが気持ち悪かったから、つい」
アリカは聞こえていないのか、反応はない。ただ目を開いたままぼんやりしている。
「エルン。君はメイドの死体処理をしてから、国に帰っていいよ。俺たちは目的達成してからいくから」
「わかりました」
エルンは頭を軽く下げると、走って廊下の闇の奥へ消えた。その姿を二人は見届け、そしてリィナは踵を返した。
「場所は？」
「ここからすぐ近くにあります」
「警備は？」
「大丈夫でしょう。私が蹴散らします」
「頼もしいねえ。でも今回はあんまり派手に動いちゃいけないって言われてるから、ちょっと控え目にね」
「了解しました」
それきりリィナはしゃべるのをやめ、黙々と歩く。そしてイデムもまた、笑顔を浮かべたまま黙って歩いた。

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

ダルテに報告が全て回ったのは、アリカがイデムと共に窓の外を出たと同時だった。足の痛みにも慣れ、廊下を一人歩いている時に兵士たちが駆け寄ってそれぞれ報告をしていった。そしてしばらくしてラグも合流し、部屋にいろと言ったのにとこっそり元帥を怒ったが、ラグを含む一同はとりあえず安堵の息を漏らした。しかしダルテだけは浮かない顔をしていた。
「アリカの姿がない…ティシーもまだか？リリーシアからの報告も

ないが」
　兵士たちは廊下だったがとりあえず椅子を用意させ、元帥を座らせる。
「今のところ不審な影は見当たりません。ただ、ティシーの部屋だけがもぬけの殻という状態です。今、他の兵士が目下捜索中ですが…」
「そうか…」
　ラグの報告にダルテは爪を噛み、思考を巡らせる。
「まだ私以外、イデムの影を見ていない…アリカとティシーとリリーシアか…。敵がまだ城内に潜んでいる可能性は、多少なりともあるということか…」
「元帥！」
　兵士の一人が滑り込み、敬礼する。
「どうした」
「上の階でリリーシアが見つかりました！」
「なんだって？状況は…」
「その、命に別条はありませんが…かなり深い傷を負っています」
「話せるか？」
「はい」
「…では行こう。医務室でいいな？…ラグ、付いてきてくれないか？」
　いや、しかしとラグは言い淀みながらダルテの足を見るが、彼女は獰猛な目つきで「平気だ。だから早く」と静かに言った。
「…了解」
　ラグは心配で仕方のない目でダルテの足を見つめ、彼女に肩を貸す。
「他のものはそれぞれ自分の持ち場で待機だ！敵がいても深追いは禁物、ただし何かしら被害がありそうな場合、極力足止めをしろ！」
　了解、と一斉に声が揃った。ダルテとラグは頷き、医務室へと急いだ。

申し訳ありません、と入るなりリリーシアのか細い声が二人を迎えた。彼はベッドに埋もれるように力なく横たわっていた。全身とまでいかないが、包帯がくまなく巻かれている。呼吸も浅く、細かい—傷が深いことはよく理解できた。
ダルテは唇を噛むと、医者を外にやり、三人だけにした。
「…リリーシア。何があった」
「…ブロンドの女が二人。どちらも爪と糸という武器を使用していました」
「イデムの子飼いか…。…ティシーはどうした？」
「アリカ…ランザートの元へ行きました。その後は…申し訳ありません、この有様です…」
「…そうか」
ダルテは息をつきながら近くの椅子に座り、ラグを見上げた。
「ラグ。すまないが、見てきてくれるか？ティシーのことだ、特に何も…いや、大丈夫だと思うが…」
「了解、元帥。…お願いだから、もうここにいて治療を受けてくれよ？」
「わかってる。これ以上は足手まといになりそうだからな。…くれぐれも、無理せぬよう」
「ああ」
ラグは敬礼すると、急いでその場から去った。
「元帥…非常に無礼だとは思っているのですが」
「ああ、なんだ」
「彼女たちは…何者なんですか？」
その問いに、ダルテは自重めいた笑みを浮かべた。くしゃりとつぶれた果実のように、憎々しげに眉間にしわが寄る。それでも笑っている口元が不気味で、恐ろしかった。
「あれは…あれらは、この国の汚点だ」
ぎり、と拳が握り締められる。

「我が父と、ティシーの父親と…私たちが作り出した、欲望だよ」
ダルテはそれきり黙ると、うつむいて歯を食いしばった。
「元帥、再び申し訳ありません…敵の狙いは、アリカ・ランザートだけですか？」
「…どういうことだ？お前に何か意見があるのであれば、言ってみろ」
「いえ…出すぎた真似をしてすみませんでした…。違うんです。何となくですが…敵はまだ城内にいます。曖昧な言い方で申し訳ないですが、気配がするんです」
彼は隠密に活動する職にある。気配に敏感であり、自分自身にまとわりつく気配にもかなり気を使っている。ダルテもそれはわかっているが、同じような感覚になれないためか、その気配と呼ばれるものは感じ取れなかった。しかし彼の瞳を見れば嘘ではないこと、そして敵を刺そうとする意志のようなものが感じられた。
ダルテは頷き、彼を肯定した。
「ティシー様も私も、女二人に足止めされていました。…昼間、イデムと呼ばれた人物はティシー様の部屋を訪問し、アリカ・ランザートがそこにいることを確認しています。ということは、私たちがあの者たちに囲まれている時点で、アリカ・ランザートとイデムという人物は接触していると考えています」
「なるほど…そうだな。…二人はどうしたんだ？」
「彼女たちは窓から逃走しました。しかしまだわずかに気配を感じるのです」
「ふむ…。お前たちが子飼いたちと接触している間、アリカとイデムが接触し嫌な展開だが―捕えたとして、まだ城内にいる…とお前は踏んでいるのだな？」
リリーシアは無言で頷く。ダルテは顎に手を当てると、少し考えた。
「…そうなると…もしお前が言うことが正しいのであれば…。ティシーと接触し、手こずっている…」

ということはないなとダルテは即座に否定した。なぜなら彼は弱い。戦うという技術がまるでないことを幼馴染である元帥はよく知っている。
「ティシーが見つかったという報告はまだないから…イデムと接触はまだしていない可能性も…？いやしかし、それは」
ならどういうことなんだ、と元帥はさらに思案する。医務室に兵士が慌てて入ってくる様子はまだない。
「…まだこの城に用があるということか？」
狙いは自分だろうかと一瞬考えがよぎったが、もしそうならこの足程度で済むはずがない。
「…リリーシア。お前ならどう考える？」
「わ、私…ですか」
いきなり発言を求められ、リリーシアは目を見開き、すぐに考えに入る。
「私は…どうでしょうか。イデムという方がどういう方かわかりませんが…」
「非道な奴だ。ティシーと同じぐらい…でも違う次元で狂ってる。…そんな奴が何を目的で…」
ダルテは思考という思考を巡らせ、ここが城であることを思い出す。
「…リリーシア。お前がもし城に忍び込むとしたら？何をやる？」
「そう…ですね。私なら…城という特殊な場所ですから…宝物庫でしょうか…？それとも…あとは、国の書類を盗む…機密を偵察する…あとは、暗殺などで王を倒す…」
その台詞にダルテは勢いよく立ちあがった。椅子がぐわん、と音を立てて鼓膜を劈き、何度もこだました。
「王の…暗殺…？」
「た、例えの話です…！」
「いや…」
ダルテは足の痛みも忘れ、一歩一歩後に下がる。

「お前の、言う通りかもしれない…もし機密であれ書類であったとして…その最高峰にいるのは…」
杞憂かもしれない。単に神経が張りつめ、過敏になっているだけかもしれない。たった一人の部下の台詞だ、流してもよかった。しかし今のダルテに正確な判断はつかない上に、イデムという彼女にとって恐ろしい存在がいるせいか…彼女の中でその台詞は信ぴょう性を増す。
「ダルテ様！」
リリーシアが叫んだときにはもう遅かった。ダルテは引き攣るような痛みの走る足を抱え、医務室から飛び出して行った。

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

かわいいアリカ。かわいいアリカ。
早く生まれて、僕に触れて。
それだけが、僕の願い。
（それだけが―）
望みなのに。たった一つの望みなのに。
ティシーの中でアリカの姿が駆け巡る。しかし現実には誰もいない。残るのは暗闇だけだ。
すり抜けていった窓には風もなく、月もない。まるで闇に埋もれてしまったように感じる。
アリカは自分を拒絶した。ほんの一瞬、ただびっくりしただけかもしれない。その後はちゃんと手を握ってくれたかもしれない…何度もそう考えた。しかしあの時の瞳は脅えていた。信じていない。やはり拒絶の色だ。
手から何かが零れおちた。
（手に入れたと、思ったのに）
ティシーの中で深い悲しみの泉が広がる。じわりじわりと侵食しながらも胸を食いつくし、痛みが全身を覆った。

しかし体内で悲鳴をあげる細胞たちが徐々に赤く染まり、ふつふつと怒りに変わっていく。
（イデム…どこまでも僕の邪魔をする…！）
飄々と笑い、アリカに抱きつくイデムを思い起こす。煮えくりかえるほどの怒りと嫉妬がティシーの表情ににじみ出ていく。
（僕は、何をしているんだ）
ティシーの表情は最早怒りをあらわにしている。そして拳をきつくかため、ぼんやりとしていた自分の不甲斐無さにも怒り、活を入れる。
そして踵を返し、扉を蹴破った―ところで、裏返った悲鳴が響いた。
「……ラグ？」
「ふえ…」
眼帯が月光に照らされ、半開きの口をした間抜けな顔が登場する。
ティシーの顔から怒りが一瞬すっぽ抜け、眼鏡がずれ落ちた。
ラグは急いで体制を立て直すと、頭を抱えながらも驚いた様子でティシーの名を呼んだ。
「びっくりしたー…お前、ここで何してたんだ？」
「…はあ。なんだか毒気抜かれちゃったよ。……別に」
「アリカは？あとイデム…来なかったか？今、城内で何が起きているか調査中なんだけど…」
「君っていうか、君たちって悠長でいいねえ…羨ましいよ」
「いや、嫌味は後で聞くからいいよ」
「ふん、たっぷり聞いてもらうから覚悟しておいてね？……イデムなら来たよ。アリカちゃんは…連れていかれた」
ラグは再び驚いたように瞳孔を収縮させると、まじまじとティシーを見つめた。
「ど、どこへ！」
「わからない。…でも城内にまだいるような気がする。勘だけど」
「勘上等。…でもいるとしたらどこだ…？一応城中に兵士たちは配

置したんだが…」
「特にどのあたりに？」
ラグは腕を組み、見えている片目を瞑った。
「ええと…出入り口は完全に封鎖してある。…そういえば、血の匂いがしたような気がしたんだが…ティシー、心当たりは？」
「イデムの手下たちが誰かやったみたいだよ。死体は見てない」
ティシーも同じく、目を泳がせながら考え込んだ。本当はこうしている時間も惜しいのだが、落ち着いて行動しなくては本当に取り逃がしてしまう。焦る気持ちを何とか沈め、ティシーは眉間に力を入れた。
「全部にくまなく配置した？」
「いいや。分散しすぎを考えて、とりあえず下の階だけを。何せ敵が確認されてないまま、勘で動いてたからなあ…」
「君も勘、ということはダルテも勘、ねえ…おそろしくアバウトな集団だよねえ」
「いやいやまったく、本当に。でも当たってたんだからいいにしよう。…とりあえず、警備手薄な上の階にでも行くか？」
「…そうだね」
二人は頷くと、同時に走り出した。
血の匂いはもうしない。しかし絡みつく不安と容赦なく襲う冷汗が、まだ何かが潜んでいるという予感をさせる。証拠はもちろんない。だが、ティシーにはなぜだかわかるような気がした。
（どこにいればがわかればさらにいいんだけど）
ラグの登場といういきなりのことで、ティシーの心は和らいだが不安は払拭されない。
（ありこちゃん…）
二人は静まり返った城内を激しく駆け抜けた。

二章十二話

城内は静かだった。あまりの静けさに兵士たちが眠りそうになったほどだ。しかし彼らは決して気を抜かない。攻める軍隊はないとしても、ここを過剰なまでに守るのは使命だ。その使命を全うせずに兵士と誰が言えようか。彼らは自分自身を勇め、それぞれ背筋を伸ばした。

しかしその気合いは空振りとなることとなる。

そして肝心な時に自分は使えない兵士だと、落ち込むこととなる。

ダルテが足を引きずり、壁にもたれかかりながらも上の階を目指している時、ティシーとラグもまた共に上の階を目指していた。それぞれの息が夜に交る。

そしてようやく交わろうとした時—タッチの差で、ダルテはある部屋に入った。兵士たちも知られていない、単なる扉。装飾もなければ名札もない、質素な作りをした扉だった。

きい、と小さな音が大げさに響く。

「……」

ダルテは杞憂だった、とその場にしゃがんだ。

扉同様、質素な部屋だった。家具らしきものはティシーの部屋と同じぐらいなく、小さな部屋にしては大きすぎるベッドだけで構成されていた。そこで上下する布団を見て、ダルテは安堵の息を漏らす。

「よかった…」

そして体を引きずり、這うようにベッドに向かう。よじ登るようにして体を起こし、ベッドの主を見つめた。

「お父様…」

そこに眠っているのは、ダルテの父—そして正式な元帥の姿だった。ダルテに似て大げさともいえる大づくりな顔をしているが、憔

悴している。それもそのはず、彼女の父親は長いこと病魔にむしばまれているのだから。
ダルテは仮であるとはいえ元帥の仮面を外し、子として父親を見つめる。
病魔―その正体は、アポトーシスだった。
アリカが放つような、一瞬にして溶けてしまうものではない。そもそもアリカのアポトーシスが特殊すぎるのだ。本来のアポトーシスは、こうして徐々に細胞をつぶしていく。ぷちん、ぷちんと徐々に溶かして死に至らしめるのだ。
ダルテは黙って父親の額に手をあてた。アポトーシスに侵されている間、感染した相手もアポトーシスになる。しかし彼女は幸か不幸か―平気であった。
全てはティシーのせい。全てはティシーのおかげ。
彼の顔がぐるぐるとまわり、ダルテはとたんに泣きたくなったが―そうもいかない。
ダルテは顔をあげ、振りかえる。
「イデム…」
「なんだ。早い到着だったね」
ダルテの頬に冷汗が流れる。
目の前に佇む細い姿―イデムは窓を背に、にやにやと笑っている。ティシーに似ていて、しかし彼とは違う黒い笑み。ダルテは体を震わせると、それでも気丈に彼を睨む。
「よくここに来るってわかったね」
「勘、かな。…それよりも、アリカとお父様をどうする気だ」
「ふうーん…そこまでは回らなかったか」
イデムは唇を舐めると、よいしょと腕を上げた。そこにはぐったりと力ないアリカの姿があった。ダルテは驚いてアリカを見つめ、代わりにイデムが口を開いた。
「ちゃんと生きてるよ。生きてないと意味がないからねえ」
「…どうする気だ。それに、お前の子飼いたちはどうした」

「俺だけで十分だからね、ここは。二人は別の場所で待機してるよ」
イデムは余裕たっぷりに笑い、一歩近づいた。
「何をする！」
「まだ何もしてないのに…」
「近寄るな！」
イデムは唇をとがらせると、子供のようにふてくされてみせた。
「そうやって俺ばっかり邪険にする…ま、いいんだけどさ。俺もそれは本望ってやつだし…」
文句を言いながらもまた一歩、一歩と近づく。その間に表情が元の猫のような笑いになり、意地悪くダルテを見下ろす。
「俺が何をやるか、あててみせてよ」
「……お父様をどうする気だ」
「もちろん、こうするよ」
イデムはアリカの頬を叩いた。浅いところで気を失っていたのだろう。アリカはすぐに目を覚ました。
「アリカ…」
「う…ん…。あ…」
アリカは現状がわからないのか、イデムの腕の中でぼんやりとしながらも困惑していた。大きな瞳がきょろきょろと暗い部屋を見回し、そして自分の体がイデムの中にいると知ってさらに慌てた。
「や、やだ、は、放して！」
「暴れない暴れない」
イデムは赤ん坊を撫でるようによしよしとアリカをあやし、目を光らせた。
「イデム！何をしようと…！」
「だ、ダルテ様…？」
アリカはイデムの腕の中で振り返り、さらに困惑した。しかしダルテの目にはアリカは入っていない。刺す勢いでイデムを見つめていた。
「何が目的なんだ、何がしたいんだ！お前は、恨んでいるのか…？」

「恨み？」
はは、とイデムは笑った。おどけるような笑い方だが、目は死んでいる。
「そう、恨んでるよ。でも同時に感謝もしている。特に、兄貴にはね。俺の大っきらいな親父も殺してくれたし」
「イデム、それは―」
「俺は兄貴のおかげでここにいるわけだし。…確かに色々あるけど…結局は楽しいだけかも。あはは…もう話すの飽きたし、そろそろやろうかな」
「来るな、イデム―！」
イデムはさらに一歩踏み出す。
「は、放して、わからないけど…何をする…」
「君の使命を。はたしてもらおうと思って」
「お、俺の―？」
「イデム！」
それぞれの声が錯綜する。空気は徐々に生ぬるくなり、さらなる闇を生み出す。
「ダルテさん、危ないよ？近づいたら君だって―」
「やめろ、やめろ！」
ダルテは大きく手を振り上げ、父親を守る。しかしイデムの足は無情にも彼女の傷口をえぐるように踏みつけ、蹴り飛ばして転がす。それきり動かなくなってしまった。
「う…」
「ダルテ様！」
アリカはイデムの腕でもがき、ぐいぐいと体を動かす。
「うーん…起こしたの、面倒だったなあ…」
イデムは余裕たっぷりに笑い、頭をかいた。アリカの体は相変わらず動いたが、腕からは抜け出せそうもない。
「何を、す、するんだよ…！」
「君を使うといったら…一つしかないんじゃない？」

にっこりと作った笑みが浮かび、彼は懐に手を入れ—銀色に輝く鋭いナイフを取り出した。あまりに美しく光るので、アリカは思わず身震いした。
「わかってもらえたかな？」
アリカは首を横に振り、顔をそむけた。
わかっている、とどこかで思う。こうして誘拐されてから、そして現在こうしていること、さらにナイフ。
「放して…！」
不意にティシーの姿が浮かんだ。悲しい顔をしていた。あんなに辛い表情を浮かべるティシーを見たのは初めてだった。そんな顔にしてしまったのは他ならない自分だ。それなのに助けを求めようとする。今ここにいてほしいのはティシーだと、アリカは強く思ったが—ここにいるのは同じ顔を持った別人。
ぽろり、とアリカの目から涙がこぼれた。
「放して、放して！」
「ダメだよ。君はこれからたっぷり利用される運命にあるんだから」
ナイフが閃光を放つ。
銀色の道筋の先にアリカの指があった。
音もなく皮が裂けた。
アリカの涙のようにぽたり、と鮮血がこぼれる。
「！！」
アリカの脳内に痛みよりも、記憶が先に蘇る。
自分のせいで死にゆく人々。ティシーになだめられ、忘れていた死の匂い。
「やだあああああ！」
「あはははははっ！」
二つの声が狂喜乱舞に入り混じり、黒い部屋隅々に響き渡る。
「やだ、やだよ、やめてえ…！やだやだ、やだよ…！ティシー…、ティシー…！」
「はは、そういう風に嫌がる姿。気持ち悪い。ぞくぞくするよ。…

そうやって兄貴の気を引いてるのかと思うと、やっぱり君のことが大嫌いになりそう。アポトーシスであることも性格も、存在も何もかも」

ぽたり、ぽたり、と絨毯に血がしみこんでいく。

そしてその血は徐々にベッドに近寄り、アリカは泣き叫ぶ。

しかし懇願しても返ってくるのは狂ったように笑う裏返った声のみ。

深い闇にまぎれ、何かがはぜた。

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

風が吹いた。どこかの窓が開いているらしい。廊下の奥で、ぱたぱたと白いカーテンがはためいている。

ティシーとラグは肩で呼吸すると、扉に手をあてた。木でできているが、ぬくもりはない。

悲鳴らしきものが聞こえたのは数分前のことだった。声を頼りに急いできたが、もうざわついた気配は消えていた。

二人はこくり、と唾を飲み込み—無言で扉を開けた。

「…誰か、いますか？」

ラグは一応敬語で入り込む。何せここはダルテの父親・元帥が眠る部屋だ。ほとんど目覚めることのない眠りに落ちているが、それでも敬意は払わなくてはならない。

しかしティシーはずかずかと入り、奥に足を踏み入れ—異臭に顔をしかめた。

「…やられた…」

絶望的な声。ティシーは自分の声に落胆し、ラグもまたその変わり果てた姿に声なく沈んだ。

「そんな…」

跪いたその下に赤茶色の沁みが点々と浮かび上がっている。まだ乾いていないのだろう。月光にぬらりと光る。

ベッドは胸が腐りそうな腐敗臭を放ち、べっとりと汚れていた。
同じくぬらりと光る液体は、赤とも緑ともつかない灰色の泥だった。
それだけで何が起こったかわかる。何あったかわかる。
ラグは拳を固め、思い切り床に打ちつけたが絨毯のため、衝撃は悲しくも吸収されてしまう。
不意に横目に何かが映った。
ラグははっとなって顔をあげ、転げるように近寄った。
「ダルテ！」
ラグは倒れるダルテを抱き起した。
「う…」
「よかった…生きてる…」
幼馴染はすぐに意識を取り戻し、まつ毛を震わせながらラグに手を伸ばした。
「ラグ…」
目の端からぽた、と涙がこぼれおちた。
「お父様…」
ラグは唇を噛みしめ、首を横に振った。
「…そうか…」
思いのほか、彼女は落ち着いていた。実感がわかないのかもしれない。哀しいという気持ちも衝撃もまだ来ないだけなのかもしれない。その時が来たら、自分は守ってやろうとラグは密かに誓った。
「…ティシー」
ダルテはラグの手を借り、上半身を起こした。
ティシーの細い体は微塵も動かない。ベッドを見つめ、開け放しの窓を見つめている。眼鏡に月が映り、瞳を隠している。
「すまなかった…」
「…君が謝っても何もならないよ」
「ティシー…！」
「いいんだ、ラグ。私の判断ミスなのだから…」
ダルテは起き上がると、ティシーの隣に立って同じようにベッド

を見つめた。深緑の瞳にはべとべどした液体のみが映る。
「…哀れな、最後だった」
自嘲気味に彼女は続ける。
「元は父のせいだったんだ。父の判断が悪かった。…だからこれはこれでいいんだ…父は責任を果たした…そう、考えるぐらいはいいだろう？ティシー」
ティシーから答えはなかった。月明かりの加減でターキスブルーの瞳が眼鏡から覗いたが、その目はもう彼女を許していた。いや、最初から許していたのかもしれない。ただ少し呆然としていた。
「…ティシー。アリカを、助けよう」
ダルテの手がティシーの服を掴む。
「あの子はまきこまれた可哀そうな子。本来なら幸せに暮らしていないといけない子…それをゆがめてしまった」
ティシーはゆっくりとダルテを見つめる。
「もう、被害を見たくない」
ダルテは横目にベッドを見たが、すぐにそらした。口元は力なく笑っているが、やはり目の奥では泣いている。それでも彼女は気丈に奮い立たせる。
「ティシー。作戦を考えよう。そしてできる限りの情報を見つけ出し、何が起こっているか把握しよう。…ラグも」
ダルテは振り返り、もう一人の幼馴染に微笑みかける。
「これからは私が元帥だ。これから私の父ではなく、本当に私の直属の部下となるが…」
「俺は元々、ダルテの命令に従ってたよ。これからもそうするつもりだ」
「…ありがとう。さあ、早く行こう。このことをしっかり考え、伝達しなくてはいけない…。課題は山積みだ」
ダルテは腕をまくると、一足先に扉をくぐった。足はまだ痛むらしく、ぎこちない。ラグは急いで彼女の傍に立ち―肩を貸した。
ティシーからは聞こえなかったが、おそらく彼女は泣いているだ

ろう。しかしラグがいる。彼は強く、そして純粋で真摯な人間だ。
彼女を支えることがしっかりできるだろう。
ティシーは二人の姿が消えるまで見守り、そして扉をくぐった。
再び静まり返った城内。
ぬくもりが消えた。
アリカの姿も。
事実までもが曖昧に姿をくらまし、ティシーは闇に飲み込まれそうな体を必死に抱く。
(僕はありこちゃんを裏切らない…信じて、ありこちゃん…)
アリカの言葉がどこか遠い。
再び出会えた時、彼女は自分のところに帰ってきてくれるだろうか。
ただ不安ばかりが胸に残る。
ティシーはよろめきながら、自室へ戻った。
これから始まる戦いのために、せめて今だけでも静かに眠りたかった。

第二章　終了

三章一話（前書き）

イデムの登場によって混乱するティシーたち。果たして、無事アリカは戻るのか。国は戦いを避けることができるのか。

三章一話

元帥の葬儀は密葬という形でごく一部の人間だけで行われた。
国はおもしろいほど変わらなかった。それもそのはず、随分と前から国はダルテがしっかりと手綱を引いて守ってきていたのだから。誰も、死んだ元・元帥に悲しみはしなかった。
これで正式に元帥となったダルテは、同じく変わらず椅子に腰掛け、部下に指示を出していた。
これからもしかすると起きてしまうかもしれない、戦への準備。
おそらく敵対するだろう、タルス国への警戒。
国の強化。
そしてアポトーシスの調査。
ダルテは動揺なく、淡々と的確に腕を振り回した。兵士たちも慣れたもので、いつも通りに命令を聞いてせわしなく動いた。
全ては日常と変わらず。時は一秒も変わりなく、ただひたすら動いた。

大体のことが収まると、ダルテは人を払って代わりにラグとティシーを呼んだ。慌ただしかったが、やはり長いことダルテが指揮をしていたせいなのか、アリカ誘拐・元帥暗殺からたった三日で全ては正常に回復していた。
ノックが響いた。
「入れ。今は誰もいない」
その声を聞いて、ラグそしてティシーは部屋に入った。ダルテはいつも通り、強気な目で二人を見つめると椅子を勧めた。二人は同時に腰掛け、前かがみになって話を聞く姿勢を取る。
「回復、思ったより早かったな」
ラグはいつもの明るさでダルテに接した。彼らにとっては病気で伏せていた元帥という認識しかないが、彼女にとっては父親だ。本

来ならもっと悲しんでもいい、そうした方がいい時もある。しかし彼女は気丈に保ち、その席にいる。
ダルテは不敵に笑うと「ああ」と満足そうにうなずいた。そこからは悲しみはまるで感じなかった。
その代りと言っていいのか—ダルテはちらりとティシーを見た。
「ティシー。アポトーシスの調査はどうだ？」
「どうだろうねえ…」
「…ちゃんとやってるんだろうな？」
「やってるけどねえ…」
「曖昧なことを言うな。とりあえず、進んでいるのか止まっているのか。まあ三日しか経っていないからなんともいえないだろうが…」
「逆走中かなあ…」
「…それでも妙に嫌味な感じのする返事をするところが、腹立たしいな…」
ティシーはぼんやりとどこか見ると、力なく笑ってそれきり黙った。ラグとダルテは顔を見合わせると同時にため息を深くついた。
アリカ誘拐から三日、ティシーはいつも通り飄々としつつアポトーシスの研究のためにも部屋にこもっているのだが…やはりどこか螺子が足りなかった。酒を飲んだようにへらへら笑っていたかと思うとむっと黙ってしまい、ふと思い出したようにターキスブルーの瞳を冷たく輝かせ、そして俯く。
ダルテとラグはティシーの考えていることはよくわからないが…とりあえず落ち込んでいることはよくわかった。
ダルテはこっそりラグに近寄り、耳打ちする、
「…ティシーのやつ、落ち込んでいる…と思っていいんだろうなあ…？」
「んー、まあそうかな…。元気と言えば元気みたいだけど」
「やっぱり…アリカ誘拐が堪えているのか、それともイデムに螺子取られたとか？」
「俺、よく知らないんだけど、ティシーとアリカって…？」

「ティシーが一方的にいじってた。猫可愛がりというやつか…」
「げ…ティシーが？想像できないな…。というか、ロリコンだったのか？」
「うーん…まあ、ティシーがアリカをかわいがるのは何となく、ほら…アポトーシスの関係で色々と…なあ？」
「うんー…ま、確かに俺たちはわかってはいるが…でもなあ…ティシーが。アリカを？」
「ちょっと…かなり狂気の沙汰みたいな愛情だが、本人は気づいてないようだが…多分、あれは本気に」
「それは、その、友情とか、妹とか、ペットとかじゃなく…？」
「うんうん。そんな気がする」
「へえ～…ティシーが。あの、こっわいこっわいティシーが…」
二人は同時に「うんうん」と頷き、ちらりと横目にティシーを見たが、彼は二人の小声（とはいえ、よく聞こえる声）にも気づかずぼんやりと絨毯を眺めている。話す気はないらしい。
ダルテは額を抑えると、席に戻った。
「ええと…その、なんだ。たまには三人で食事をとろうかと思って、用意させているんだが…構わないか？」
「もちろん」
「ティシーは？」
「ご自由に」
ようやくティシーは口を開いたが、話す様子はない。また俯いて黙ってしまい、二人は調子を崩しそうになる。
そうしているうちにノックとジューシーな香りが届き、メイドたちは黙々とテーブルをセットし始める。白身魚のムニエルにホウレンソウのサラダ、ハムやチーズの乗ったクラッカー、貝のクラムチャウダー、フルーツの盛り合わせ…こってりしすぎず、上品な色の取り合わせでそれぞれテーブルに乗せられていく。本来なら前菜から徐々にくるのだが、ダルテは三人で話がしたかったので食事終了まで人を払うようにと、調整した。

ほわんと湯気が立つ姿をラグは嬉しそうに眺め、ダルテもそわそわと待ち続ける。そしてメイドが頭を下げ、そそと退場するのを見て、二人は「いただきます」とナイフとフォークを手に取った。
「久々だな。こうして食事をするのは」
ダルテは心底嬉しそうに破顔し、ひょいとミニトマトを口に入れた。
「本当に。あー、ムニエルうまいな」
「だろう？新鮮な魚が手に入ったと聞いていてな。折角だからラグの好きなバター系にしてもらったんだ」
「それはありがたい」
二人は目で楽しみ、口で楽しみと食事を堪能していたが、ティシーはフォークも持たずただぽつんと座って料理を眺め…いや、睨んでいた。
ダルテは不安そうにティシーを下から見つめる。
「ティシー、具合でもよくないのか？…その、あの、確かに今はこうしているのが辛いし時間も惜しいと思うが…ほら、そろそろ四君子も来る。それに…」
「にんじん、嫌い」
「は？」
ティシーの長い指がぴん、と跳ねた。同時にオレンジ色の塊が机に飛び出した。
ダルテはぽかんと口を開け、ティシーを見つめた。
「トマト、最悪。ホウレンソウ、生臭い。ハム、豚嫌い。醜い。貝はアレルギー。魚、赤いやつじゃなきゃやだ」
ぴん、ぴん、と次々に飛び出る料理たち。真っ白で清潔だったテーブルは徐々に料理に侵食されていく。
ダルテとラグは唖然としていたが、ティシーは構わず続ける。
「チーズ食べたい。パンはないの？肉は牛肉しか食べれないし、バター系は胸やけする」
ダルテは脳内でティシーの言葉をゆっくり消化し―

「ふ・ざ・け・る・な！！！」
机が割れんばかりの勢いで叩き、立ちあがった。
「貴様…私がせっかく心配してこうして用意してやったというのに…！！二十七にもなったやつが！好き嫌いも大概にしておけ！！」
「ま、まあまあ…」
「第一、にんじんは食べれるはずじゃあなかったのか！！」
「えー、バターは嫌だ」
「甘くておいしいだろうが！」
「そこが嫌なんだって。にんじんのくせに甘いっていうのが許せないんだけどなあ～。ダルテの下まつ毛みたいに」
「どういう比喩だ！！」
「こってりしてる」
「返すな！」
ダルテは肩で息をすると、ふらふらと倒れるように椅子に座り込んだ。
「まったく…ふざけるのもいい加減にしろ…」
「嫌いなものは嫌いなんだよ。ということだから、僕は部屋に戻るよ。どーぞ、お二人で仲良く」
ティシーは片手を挙げると、ふらりふらりと部屋を出ていった。
ちらけるだけちらけたテーブルとダルテとラグが残され…部屋は一気に静かに沈黙した。
「…馬鹿だ。あいつは。…気づいてないんだよ。自分が思った以上にショックだって。だから必要以上に嫌味なことをする…いつも通りといえばいつもだけどな…」
「しばらくはそっとしておこう。何するかわからないし」
ダルテは口元を引きつらせ、頷く。
「そうだな…」
「それよりも」
ラグはフォークを置くと、じっとダルテを覗き込んだ。
「お前こそ大丈夫か？」

「…平気さ。覚悟していたことだ、これは。それに落ち込んでいる暇なんてないし」
「無理するなよ」
「ラグは心配症だな。とりあえず…ワインでも飲むか？」
二人は心配ごとを振り払うように微笑み、グラスを持った。

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

一人部屋に戻ったティシーは、ぼんやりとベッドに腰かけていた。誰もいない部屋は非常に広いくせにどことなく酸素が足りないような気がした。元々生活感のない部屋だったが、今は何もない真っ白な箱に見える。
ティシーは額を抑えると、息を吐き出しながらうつむいた。
（こんなにショックを受けるなんて。想像してなかった…。いや、そもそもイデムが登場するとは思わなかった…）
ティシーはそのまま髪を思い切り掴むと、怒りを胸に灯した。
自分に似た姿でにやにや笑う黒髪のイデム。漆黒の瞳は光がなく、何かを虎視眈々と狙っている。
そしてアリカ。
怯える瞳、震える体。つい数日前までは触れていられた暖かい感触はもう冷たく、どこにもない。遠いなとティシーは自分の手を見つめた。
（イデムのやつ、何を吹き込んだんだ…）
そもそも勘違いをしている。
イデムは何も知らない。
知るはずがないんだ。
ティシーは拳を固め、顔を上げた。
「…リリーシアくん。いる？」
黒い塊が颯爽と現れた。ティシーは眼鏡を直しながらリリーシアを見る。彼はいつもの無愛想な表情のままその場に膝をついた。

「四君子はいつごろここに？」
「予定では、明朝にとのことです」
「そう…。情報はどれくらい確保できたか、聞いてる？」
「いいえ、今のところは…全ては到着を待たないと」
ティシーは鼻を鳴らすように返事をすると、力なく笑った。
「やだよねえ…たった一人いなくなっただけでこんな嫌な思いをするなんて。理解できないよ」
「あの…ご自分のことでも？」
「僕だからこそわからないって感じかなあ…。ねえ、暇なら僕と何か話してよ」
その台詞にリリーシアは珍しく感情を表に出し、返答に困った様子でおろおろと目を泳がせた。黙って仕事をこなしていれば機械的な冷たさを持つ冷淡な人物に見えるが…こうして感情を出すと、やはりまだ十代の若さがにじみ出る。
「あの、その、私は…仕事で」
「つまんないなあ～」
「では、失礼します…」
リリーシアは逃げるようにその場から姿と気配を経った。
「ダルテをもっといじめてくればよかった…」
ぽす、と後ろに倒れる。
（…イデムはどうして元帥を殺そうと思ったのか…タルス国の差し金？）
眼鏡をはずし、手を頭の後ろで組む。
もしもタルス国の差し金だと想定する。もしあの時、ダルテが死んでいれば話はわかる。元帥を失った国はたちまち均衡を崩し、その隙に―他国が攻めてきたとして、対応はできない。あっという間に占領され、配下となるだろう。
しかし死んだのは父親の方だ。随分と前からアポトーシスに侵されていた元帥はまだ意識がはっきりとあり、話せる状態の時に娘・ダルテにバトンを渡した。もうこの時、彼は元帥という地位を全て

明け渡したように思えた。それはダルテも思っていただろうが、彼女はあくまでも父が元帥だと言い張り、仮と頭に付けて仕事をしていた。最初の頃は確かに反発する者もいたが—あの外見と傲慢とは違う横暴な強さ、そして絶対的なカリスマパワーにより、兵士や国民たちはダルテこそ元帥だと認めた。

だから今回の一見は謎が多い。

なぜ死にかけの元帥を殺したのか。アリカを誘拐したのか。

後者についてはわかる部分がある。

アリカはアポトーシスの中でも最上級だ。彼女の血液—いや、体液でもいい。ただ流すだけでも凶器となり、もし科学者が調べあげて解明したならば、毒薬が作れるだろう。

そうすれば、いつかの戦争の時のように利用され、国は滅びる。

(イデムだろうと、タルス国だろうと、どちらにしてもこの国の破滅を望んでいる…でも)

思考は続く。

しかしいつまでも考えはまとまらず、空は次第に明るくにじんできた。

その空の元、四つの影が伸びる。

「最近風が騒がしい騒がしいと思っていましたが…」

「ふーん、風って声してたっけ?妄想じゃね?」

「風情ないなー」

「さあ、早くしましょ。元帥がおまちかねよ」

風が吹く。生ぬるい風は一瞬にして四つの姿をかき消した。

三章二話

四君子とはティティル国で密やかに訓練された諜報部隊…俗に言う忍びという独自の組織の頂点といっても過言ではない集団だ。通常、リリーシアのように単独で行動するのだが、この四君子という集団は違う。優秀には違いないが、格別優秀というわけではない。

はっきり言ってしまえば、彼らはデルティス帝国とティティル国を良好に保つ道具。そう表現されても構わない…だがもちろん、優秀だ。

そうして駆り出され、帝国に雇われている彼らはさして色々考えず、与えられた使命を淡々とこなす。それが無事達成できればそれが最高なのだった。

四君子のまとめ役である女性—通称「梅」。四君子である限り本名は名乗れず、与えられた番号のような名で自分をあらわさなければならない。

梅はダルテを目の前に、他三人よりも一歩前に踏み出て跪いた。それにあわせ、三人も膝をつく。

「梅。顔を上げろ」

「はい」

麗しい声と共に梅は顔を上げた。忍びという生臭い職についている割に、彼女は一線の筋がぐっときつく入った、凛とした女性だった。ダルテのような強気な姿勢と眼力は男たちを一蹴する。高潔とも取れる姿は血の匂いはしない。

「四君子と私だけにしてほしい。あと、ラグとティシーを」

「は」

兵士たちは一糸乱れぬ敬礼でそれぞれ部屋から出ていった。

ダルテはふむ、と頷くと両手を膝の上に組んだ。

「まず私から言いたいことが。…父が…元帥が死んだ。国民には病気が悪化した結果、死に至ったと伝えているがそうではない」

「タルス国の差し金…でしょうか。だとしたら申し訳ございません。私たちの動きが遅かったばかりに…」
「いや、気にしなくていい。…お前たちは知ってるか？イデムという男の存在を」
「イデム…ですか。…私の報告を入り交えて発言してもよろしいでしょうか」
「許可する」
名実ともに元帥となったダルテ。彼女の威厳に損傷部分はまるでない。高慢とも取れる態度は国を束ねれるだけの度胸が見え隠れしていた。梅は満足そうに口を緩ませると、空に似た深い青を帯びた髪を揺らした。
「タルス国の調査結果です。まず馬車の件」
「ありゃー完全にシロだ」
控えていた体格のいい男…一見山から飛び出て来たような野性的なたくましさを持つ彼・竹は元帥を目の前にしても乱暴な言葉遣いで言い捨てた。
その声を聞いて梅は素早く振り向き、指をはじいた。
「うっわ、こわ！」
「竹。無礼ですよ」
元帥と同じぐらいの年齢である竹は子供のように舌をぺろりと出すと、梅から弾かれたもの—銀色の針を懐にしまった。これが毒針なのだから恐ろしい。
ダルテは「いい。四君子四人とも、発言を許そう」と苦笑いを浮かべた。
竹はひゅう、と口笛を吹いて「元帥様の言うことは寛大だ」と無邪気に喜んだが、梅をはじめとする他の仲間、蘭と菊は頭を抱えた。
「ええと…続けます。馬車は見事に白。城にはさすがに忍びこめませんでしたが、馬車屋の記録は各店にありますからね。その記録に間違いもなく、亭主の話もしこりに残るようなものはありませんでした。ただ…」

「ふむ…。それはことがスタンダードに進みすぎている」
「さすが元帥様。私もそう考えてます。かいくぐり過ぎかもしれませんが…」
「いや、あれは絶対何かの力が働いてる！」
続いて最年少の少年・菊が拳を握りしめて立ち上がった。十六とはいえ、少年の心はまだ幼いらしい。じっとしているのが辛かったのだろう、少々リアクションがオーバーだ。
梅は再び頭を抱え、仕方なく続けた。
「…ええ、まあ、その。もちろん根拠もあります。どの亭主も同じような台詞を言うんです。多少違う部分はあれど、大体は同じことを言います」
「そうか…作った台詞を言った…というところか？」
「そうですね。そんな感じがします。その裏を取ろうとするとどうしても行動が派手になってしまいます故、推測が限度です…申し訳ございません」
「いや、いい。十分だ。…そうなると、馬車の件は陽動で決まりだな…全く、無駄金を使う。首謀者は…まあ、イデムが現れたことを考えると、タルス国の主か」
ダルテはため息をつくと、肘をついて手の甲に頬を乗せた。
「そのイデムという人物ですが。名はわかりませんが…最近、タルス国に出入りしている男がいるという情報が、わずかながら入っています」
「役職ふめー、存在ふめー、ついでに男ってわかったのも最近。謎だらけも大概にしろって」
「竹」
竹は肩をすくめると、すごすごとしゃがみこんだ。
「不明…か。イデムらしいな…」
ティシーに似た飄々とした読めない動きは見えるようでいて全く影に隠れてしまう瞬間がある。一たび出れば派手なのだが、それまではにやにやと笑いながら虎視眈々と隠れて機会を待つ。今回の謎

の男の出現…イデムの行動の仕方に似ていた。
　ダルテが二度目のため息をついた時、二つの足音が近づいてノックをした。
「開いている」
　扉がゆっくり開き、見なれたラグとティシーが出てきた。ラグはいつもの顔だったが、ティシーは少しやつれて見えた。アリカ誘拐が相当堪えたのか、それとも研究にせいを出しているのか―どっちもだろうとダルテは目を細め、何も言わなかった。
「お、四君子か。…元帥、どこまで話進んでる？」
「二人はこちらの椅子に。…今、馬車は陽動だったこととタルス国の影はイデムだということを話していた」
「ふうん、まだそこまでなんだね」
　ティシーはつまらなさそうに口を尖らせ、椅子に座って肘をついた。発言できるぐらいならまだ元気なのだろうと事情を知るラグとダルテは心中で頷いた。
「…じゃあ続けてもらおう。梅、よろしく頼む」
「はい。そして一番不穏に思っていた戦争についての影ですが…銃機器や剣などの動きが多少見られますね。ただ、帝国相手にするには随分と少ない量です」
「そうか…だとしても、戦を起こさないという理由にはなってない。それに…ああ、そうだ。言い忘れていた。そのイデムというのが、今回―本当の死因…父の暗殺をやってのけた男だ」
「あん、さつ…」
　予感はしていたのだろう。四君子たちは眉はひそめども、それ以上声を上げることはなかった。ただ梅は軽く目を伏せ、一瞬だったが元となってしまった元帥を憐れんだ。
「しかし、どうにも腑に落ちん。なぜ私も殺さなかったのか―」
　自分自身の生命の問題なのだが彼女はさらりと言ってのける。それに梅たちは何も言わず、次の台詞を出した。
「元帥様。他に被害は」

「被害―アポトーシス誘拐の関係だろう。こちらで保護した一人が攫われた」
「例の、ですか？」
ダルテは頷き、ちらりとティシーを見たが彼はとことん興味がないらしい。そっぽを向いたまま発言する様子は見られない。
「あのアポトーシスは特殊でな…以前少し説明したと思うが、あれが一人いれば国が滅びる」
「そのアポトーシスは一人なんですか？その、一人しか現存していないと」
「ああ。今のところ…確実ではないが、可能性は大いに高い。あれが一人…手に渡っただけで戦争の可能性はある」
「そう、ですか…」
梅は整った唇に指を当て、少し考え込んだ。ダルテも同じように考え―
「少し思案したいことがある。発言したい者は勝手に言っていい」
それだけ言うと、軽く頭をもたげた。
「あ、じゃーちょおっと足崩させてもらうわ」
早速とばかりに竹は姿勢を崩し、その場で胡坐をかいた。その姿勢にラグは睨んだが、元帥以外の言うことは基本的に聞かないのでぐっと言葉を飲み込んだ。代わりにぼんやりしている幼馴染に顔を向けた。
「ティシー。何か進展はないのか？」
「まーだ一日しか経ってないのになーんでわからなきゃいけないんだ」
「…す、拗ねるなよ…」
自分より三つほど年上でさらに四捨五入すると三十路であるティシーは子供のような態度だ。ラグは呆れるが、彼がいつも通り（？）なので少し安心した。
「じゃ、じゃあそれは置いておこう。…他に何か思うところってないか？」

「さあ？ラグが考えてなよ」
「……」
ラグは苦笑し、仕方なく前を向いた。
女二人は考え込み、ティシーはやる気なし。竹は耳をほじる始末で、蘭や菊は顔を伏せているが…もしかすると寝ているのかもしれない。なんでこうもまとまりなく、しかも自分勝手なんだとラグはこめかみを押さえつつ一応考えることにした。

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

目を開けているのかそれとも閉じているのか。アリカの眼前は一面真っ黒に塗りつぶしされていた。
そこにふっと影が現れた。
（…ティシー…）
それは幻だとすぐにわかった。
（俺、ティシーにあんなに悲しい顔させた…）
信じたいと思った。信じたと言った。伝えたのに、心もそうだと決めたのに―アリカは寸前でティシーに迷いを見せてしまった。その結果がこの暗闇だというのなら、アリカは黙って受けようと思った。
アリカは暗闇に意識を落とし、繰り返し繰り返しイデムとティシーの声を巡らせた。
アポトーシス創造からその裏にあった人々の思い、そして悲劇と現在。どれが本当かわからないくせに、どれ一つ確かなことはないくせに、アリカはイデムの言葉を飲み込んでしまった。
（俺は、お母さんの身代わりに生まれた…？…だから、優しいのかな…）
だとしたらそれは不幸で、幸いなことだった。だからこそアリカは人触れる（ティシーだけだが）ことを覚え、暖かさを知った。知ったからこそ、
（苦しいよ…）

信じたくないのに、どれが真実かわからなくて、ひたすらに迷う。ここにティシーがいれば聞けたかもしれない、いや謝る方が先だろうか。

思考は堂々めぐりばかりをし、アリカの小さな体を痛めつける。だが力はまるで出ず、視界も晴れなかった。

一体どれだけそうしていたか—こつん、こつん、とゆっくりとした足音が響く。金属音に似た硬質な音は徐々に大きくなり—やっとアリカの視界に光が入った。まっすぐな白い線はあまりに眩すぎ、アリカはきつく目を瞑った。

「やあ。目、覚めた？」

長い指がスイッチを入れた。とたんに辺りは無機質な空間に変わる。四方を壁に囲まれた小さな部屋。そこにアリカは両手を上に拘束され、足に鉛の枷を付けられていた。悲劇な現状だったがアリカは慌てなかった。否、慌てれなかった。体力はとうに尽き、精神は虚ろだったからだ。

飄々と入ってきた男・イデムはにやにやといやらしく笑みを浮かべてアリカを見下した。

「本当はもうちょっと丁寧な扱いをしてあげたかったんだけど…ほら、俺君のこと嫌いだしさあ。その方がいい気味っていうか、いい格好っていうか」

くすくすと笑い声が小さな部屋に籠る。

「でも悔しいなあ。こういうのって兄貴好きそうで。体もぼろぼろ、心もへこんでる。加えて身動きできない格好。うわ、三拍子そろっちゃったよ。やだやだ」

イデムは少しオーバーな振りで首を振り、一歩アリカに近づいた。

「本当は君を抹消しちゃいたいんだけど、それってまずいから今はやめておいてあげる。それにこれ以上俺が兄貴に嫌われるのも悲しい話だからね」

イデムの足先がアリカの頬を軽く蹴った。アリカは呻きもせずただうなだれ、イデムはつまらなさそうに舌打ちした。

「言っておくけど。助けてもらえるとか、そういう甘いこと。考えない方がいいよ。腹立つし。…じゃあね～」
イデムはぱたぱたと手を振ると、扉を閉めた。幸い、スイッチは切られなかったので暗闇に閉じ込められることはなかった。
今になってじんわりと痛くなってきた頬を感じつつ、アリカは唇を噛みしめた。
（俺に、何ができる？それに…これからどうなるんだろう…。俺を、誘拐して徳することなんてないのに…人殺しの道具が…）
アリカはまだ気付いていない。自分の価値を。

そして代わりに気づいた者が二人いた。
ダルテは顔を急いで上げ、見ると梅も同時に顔をあげていた。
二人は顔を見合わせると、驚いた顔から一変…苦虫を噛んだように歪んだ顔に変化した。
「なんとなくだが…向こうの考えが読めたぞ。梅、お前もか？」
「…はい」
「え？本当？じゃあ早く言ってくれよ」
待ってましたとばかりに竹は飛び跳ねたが、二人の放つ殺気に似たプレッシャーは彼にこれ以上発言を許さなかった。
その場にいた全員、唾を飲み込む。
ダルテの額に汗が浮かぶ。
「何も戦わずともこの国が簡単に転ぶ方法がある。血は流れず、話し合いで。早ければ一週間…いや、三日でけりはつくだろう」
全員、体を身を乗り出す。
「…私を生かしておいた理由も、なるほど…納得いく」
ダルテの瞳孔がみるみる凝縮していく。
「タルス国は……誰が首謀かはまだ何とも言えないが…。
首謀者は、戦争での金と名誉はなく、そして国民の不満も血も流さず…国の頭同士で話を付けるつもりだろう。その駆け引きに出すのはアリカ。強力なアポトーシスで私を、この国を恐喝するのかも

しれない…」
梅は頷いた。
「くそ…」
ダルテの毒づいた声で空気はいったん止まり、苦々しく時間は過ぎていった。

三章三話

それぞれが目を点にする中、ティシーはそっぽを向いたままぼんやりとしていた。

（ふうん…なるほどねえ。あくまで話し合いでけりを付ける、か）

指で自分の髪をくるり、といじる。

つまり。ダルテは仮の元帥であり、最終結論の決定権はない。そこで父王を消すことによってダルテは完全に元帥となる。そうすれば決定権は全てダルテに委ねられる。もしあの時ダルテも殺していれば―王権争いに乗じて乗っ取ることは可能だったはずだ。それをあえてやらなかったのは、あくまでこれを秘密裏に行いたかったからだろう。

（国のトップ同士でけりをつければ国民の反感も少なく、戦争のような争いにまではならない。被害も少ないし、余計なものはついてこない…）

そもそもタルス国はどうやってもデルティス帝国の戦力には勝てない。デルティス帝国は他国と提携も結んでおり、武器も格段にいいものが流れてくる。そうなるとタルス国は金を儲けるどころか借金を抱えてしまう。一度負けたタルス国、おそらく国の被害というより金銭被害が膨大立ったに違いない。それが最近回復しつつあるのであれば…。

それに丁度と父王は病気で、しかも強力なアポトーシス…アリカの存在が明るみになった。それも城に来ている。

（アポトーシスを誘拐、そして元帥を殺す…一石二鳥だね）

しかし一か八かの作戦だ。失敗すればタルス国の不正は一気に明るみになり―

（いや、タルス国はどちらにしてもこの作戦は成功する。…不正が明るみになっても、結局の話し合いは父王がしなくてはならない―病気である父王は最早しゃべることもできないから、結果はタルス

国の勝利か…頭の回るやつがいるな)
こうしてまんまと元帥に収まってしまったダルテ。おそらく近々タルス国は話し合いを持ちかけるだろう。
そこで引き合いに出されるのはアリカ。
アリカの血一滴でもあれば、人は簡単に死ぬ。
ただでさえ触れた者を溶かすもしくはアポトーシスに変えてしまう兵器なのだ。
(十分、この国を渡す価値がある—もしあの子のアポトーシスが巻かれれば、国一つ滅ぶのはたやすいからね…)
しかもあちらにはイデムがいる。
自分と血を分かち合う…そしてアリカを惑わせるには十分の存在。
(…僕があの子に全てを教えていても、あの子は迷っただろう。…まいったなあ。今回の作戦、向こうは完璧だ)
ティシーは内心で舌打ちすると、頭をかいた。
(あの子を取り戻すには内密に、それも確実に見つからないで向こうに侵入するしかない…)
もしタルス国に侵入すれば、デルティス帝国の差し金だと喚いて戦争を起こすかもしれない。勝とうが負けようが、ディルティス帝国が吹っ掛けた事実は変わらない。
(完璧な、作戦ねえ…)
ティシーは脳内でもしもの話を繰り広げる。
もしも自分の欲望のままにアリカをぐちゃぐちゃに痛めつけてこの場に縛りつけておいたら?彼女のいい分など何一つ聞かず、あの愛らしい、恥ずかしがる感情を通り過ぎ、泣いて叫んでそれでも自分しかいないとわかり、ここにいたのなら…?全て思い通り、ただ彼女を縛ることができたら。
(僕はそれをしなかった。思っているのに、ね。……やめよう。どうやっても、あの子はここにいない)
ティシーは一度瞬きをすると、少しだけ彼らの方に頭を向けた。
「もしアリカを引き合いに出されたらこちらは術がない…」

ダルテは爪を噛み、腕を組んだ。
「もしあれが散布されれば国は滅びる」
「元帥様。アポトーシスを中和させる薬はないのですか？」
「ああ、まだ…」
ダルテは顔を少し上げ、傍にいるティシーに目を向けた。それに気づいたティシーはにっこりといつもの笑みを浮かべると、悠々と足を組んだ。
「確かに特効薬はまだないよ。でも止めることは、可能だ」
「…なんだって？」
ダルテをはじめとする全員がティシーに注目した。
「それは、本当ですか？ティシー所長」
梅の台詞にティシーはぴくんと耳を動かす。
「その所長ってやなんだけど。まあいいや。…アポトーシスは体温と密接な関係にある。体内の構造としてアポトーシスは誰にでもある。体を形成する上で必要なものなんだ。それが特化し、変化したのが僕たちの呼んでいるアポトーシスと呼ばれる人」
ティシーはゆるやかに続ける。こういった説明の時は彼もティシーとしてではなく、アポトーシスを研究するものの顔に変わる。
「ま、アポトーシスという名称はそこから来てるから実際は別名でいいんだけどね。…その細胞。それを増やし、自分ではなく自分以外の細胞…つまり他人の細胞を破壊することだけができる。もしくは感染。侵されるもしくは一発で死ぬことが多いんだけど、自分と似たような遺伝子を持つ人は感染という結果になる。どちらにしても、彼らは人間兵器だ」
「それで…」
「止める方法ね。この細胞はやっぱり細胞なんだねえ。体温がなければ、流れる血潮がなければ生きていけない。流れた体液は数秒は保てるかもしれないけど、結局死ぬ。それを持続させるには体内を巡る体液に似た液体を流出しなければならない」
「ということは…」

全員ごくりと唾を飲む。ティシーは満足そうに微笑むと、軽く片手を上げた。
「ポイントは液体、というところ。流れる場所がなければ、アポトーシスはさして脅威にはならないよ。直接触れるにしたって、国全員を触りにはいけないでしょ？それにアリカのアポトーシスは感染ではなく、確実な死だ。もしあれと同等のアポトーシスを作ろうとしてるのなら…それは僕しかいないよ」
ティシーはくすりと笑うと、全員糸を切られたようにふう、と力を抜いた。
「でもあの子を使って毒薬を作ることは可能だよ。前の戦争の時みたいに」
ぶるりとダルテ、そしてラグは震えた。彼らはよく知っている。その悲劇の光景を。
「そしてイデムは作れる。僕と同じだからね」
そしてティシーは口を閉ざした。代わりにダルテは咳払いをし、息をゆっくり吸い込む。
「とりあえず皆の口にする河川をしらみつぶしに調べ、特に大きい河川敷は見張りを付けよう。四君子、その仕事頼んだ」
「はい」
一同は短く返事をすると、再び膝をついて頭を垂れた。
「また後で詳しい説明をしよう。それまで解散」
四君子は風が吹くようにさっと一瞬で姿をかき消し、その場にはいつもの三人が残る。
ダルテは息をつくと、悩んだように眉間にしわを寄せて頬杖をついた。部下の前では決してしない、ゆるんだ表情だ。ラグもまた息を吐き出し、前にかがんだ。
「なんだか…袋小路だな。どこまで行っても行き止まりだ…はあ」
ダルテは額を拭い、再び息を漏らした。
「ほんっとうに…頭が回るやつがいて怖いなあ。俺は作戦は立てれないから、せめて兵士たちの訓練を強化しておくよ」

「そうだな。しておくに越したことない。兵士たちのことは頼んだ。じゃあティシー。お前は何か案はないのか？」
　すっかり黙ってしまったティシーはどこかを見たまま発言しようとしない。ダルテは吐きたい息をのみ込み、もう一度名を呼んだ。ラグも顔をティシーに向けたが、一向にしゃべる気配はない。
　ダルテはこそっとラグに顔を寄せて耳打ちした。
「ちょっと…怖いな」
「うんうん。ああいうティシーは…ちょっと危険な気がするなあ」
「ラグもか？私もそう思う。無茶なことはしないと思うが…。…ええと、て、ティシー」
　じっくりじっくりとティシーの顔が横を向く。いつもの笑みはなく、どことなく不機嫌に見えた。ダルテは思わず身を少し引き、また近づいた。
「さっき言っていたあの、止める方法だが…」
「…他に方法はあるよ。さっき言ってた体液のこと。あれの機能を止める薬をあらかじめ放り込む必要があるね。でもそれは…もし川や湖といったところだったら流れてアウトだけど、井戸や貯水庫ならいいね。ただ、これあんまり体によくないんだよねえ…」
　ティシーは先ほどと同じような調子でゆるりゆるりと語る。幾分か気だるそうだが、研究者としての発言は忘れていない。
「死なないにしても、何かしら影響がある。…ま、僕としては誰がどうなろうといいけどねえ」
「ティシー」
「怖い顔。…冗談だよって言えば、やめてもらえる？」
「貴様…何を言っているかわかってるのか！」
「ダルテ」
　ラグは手を伸ばし、ダルテを制す。明らかに殺気に似た気配を噴き出すダルテに、ティシーは興味なく見上げるだけだ。しかし口元だけはにんまりと猫のような笑みを浮かべている。
「僕としてはアリカちゃんがここに戻ってきて、僕の傍に居てくれ

るだけでいいんだけどねえ…。でもそのためには君に援助しなくちゃいけない。…ちゃんと手を貸すよ。全力でね」
浮かび上がりかけたダルテの腰は震えながら椅子に落ちた。ラグは安心したように双方を見、ティシーはいつものにやにや顔を一面に広げていた。
「その変わり、ちゃんとアリカちゃんを奪還してね。…少しでも傷があったら、ダルテを腹いせにいたぶってあげるから。牢屋と、うーんそうだなあ。ベッドと」
「ティ、ティティティ、ティシー！」
ラグとダルテは同時に立ちあがり、ラグは反射的にダルテをかばい、ダルテはラグの腕を握った。騎士と姫、完全な構図にティシーは笑い声をあげた。
「なーんてあっははは、冗談はこれくらいにしておいてあげるよ。ダルテを抱くほど悪趣味なことはないからねえ」
「どーーーーいう意味だっ！」
ダルテは赤面しつつさらにラグの服を握りしめた。ラグもぱくぱくと魚のように口を開き、慌てふためいている。
「じゃじゃ馬を馴らすのはすっごい楽しそうでそそるけど…やっぱりぴいぴい泣いてしがみついてくれそーな方が好みだから」
「理由になってないし、第一下世話だ！」
ティシーは立ち上がり、不敵な笑みで指を口元に当てる。
「下世話？あは、そりゃあ僕も男だし？ねー、ラグ」
「は、はえ？！な、何で俺に振るんだっ」
「ラグもたまにはいじらなきゃねーと思って。せいぜい仲良く、お二人さん。あー思春期の子供みたいでおーかし」
ティシーは手を振り、背を向ける。
「僕はしばらく研究室にいる。用事があったら、リリーシアくんを通して言って」
ばいばい、とティシーは扉を出ていった。
残された二人は冷汗をかきながら椅子につぶれた。

「まったく…どう扱っていいかわからんな、あいつは」
「ほ、本当に…ここ最近特にそう思う…や、やれやれ」
ラグは人一倍汗をかき、額を拭いに拭った。それを見てダルテはふと不思議そうに顔を傾ける。
「ん？ラグどうかしたか？」
「い、いいや…。さて、俺も兵士たちの訓練に向かうかなー」
「あ、その前に。ペンタゴンたちへの連絡はまだにしておいてほしい」
ラグの汗がぴたりと止まり、二人は仕事の顔になる。
「なぜ？」
「確かに彼らにも頼んで兵士たちの訓練や武器の輸入、他国への援助など頼みたいところだが…まだことを荒げたくない。ただでさえ父が死んだ後だ、多少ぴりぴりしているものがあるだろう。これはうちうちで解決しよう」
「ダルテ…偉いなあ」
ダルテはちらりと斜めにラグを見て口をすぼめた。
「その幼い扱いはやめてくれと言ってただろう。…でも準備は怠るな。兵士たちも無駄に動かぬよう、気を張っておいてくれ」
「あ、ああ。じゃあ俺は行くからな」
「頼む」
二人は力強く頷き、ラグは部屋を出た。

三章四話

ちゃり、と虚しく鎖が鳴った。アリカは力を奪われながらも少し足を動かした。薄暗い中、延々拘束された状態なのであれからどれくらい経ったのかまったくわからない。繰り返される思考も何度巡らせたか分からず、アリカは虚ろに床を眺めていた。

イデムは気まぐれに現れ、適当に危害を加えて帰る。触れる程度の攻撃だが、アリカには痛くてたまらないが涙は不思議と出なかった。ただ、イデムはティシーに似ているというだけで、胸までも痛くなる。それを思うと涙は出てきてしまうが、やはりぐっとこらえた。

何度目かの足音が響いた。アリカは自然と身構え、きつく目を瞑った。

「…パルブロ様。こちらです」

しかし声の主は違った。鈴を転がしたような麗しい声質をしていたが、どことなく緊張している。アリカはゆっくり目を開き恐る恐る扉に顔を向ける。

そこに立っていたのはイデムと並んでいたブロンドの女性と、年齢という年齢を肌に重ね合わせたように重厚で硬い顔をした中年の男だった。薄暗い光でもわかるほどまとっている布は繊細に輝いた。おそらく質がよい…すなわち、様とつくように位が高いのだろう。

アリカは用心しつつも上目に二人を見つめた。

パルブロと呼ばれた中年の男は一歩前に出ると、アリカを品定めをするようにじっくり見た。どことなく油気のある粘着質な視線にアリカは見ていられなくなった。

「ふん…」

パルブロは顔を引き、顎を撫でた。そしてブロンドの女性―エルンに目を向ける。

「こんな細い子供が、驚異と？」

「はい、そうです。特別に造られた子ですので、アポトーシスは強力です」
「あの元帥を一滴で殺したと聞く…」
「その他にも多数の人間が溶け、死に至っています」
その台詞にアリカは深くうなだれた。それが決め手となったのか、パルブロはにちゃりといやらしく口を歪めた。
「これで材料は揃った。後はイデムだ。あやつの作る薬は、本当にあの戦争のような？」
「はい」
エルンは多少目を震わせながらも頷いた。怯えているのは性格の問題だ。
「どれ…」
「なりません、パルブロ様。触れればたちまち感染、もしくは死にます」
伸ばしかけた手をエルンは急いで掴み、首を振る。
「アポトーシスを扱えるのはイデム様だけです」
「ふん…あんな小僧にいいようにされなくてはいけないなんてな…。あやつに伝えろ。作戦を進める。アポトーシスたちを移動させろ。もちろん、こいつもな」
パルブロは鼻を鳴らすと、忌々しげにアリカを睨んだ。そして颯爽と出ていき、エルンも後に続く。
（作戦…何が起こるんだろう…。…怖いよ……）
アリカは唇を結び、ティシーを頭に浮かべる。何度浮かべても、最後に見た哀しい顔しか出てこない。
（早く会って…謝りたい…謝りたい、のに、）
信じられない自分がいる。イデムの言葉ばかり耳を傾けている。
（…まだわからない…でも、ここから出なきゃ…きっと悪いことが起きる）
不安の闇ばかりが胸にとぐろを巻く。それにアポトーシス、そして強力である自分。

アリカはしびれた手足をぼんやり眺め、瞼を落とした。

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

ぐねぐね、と芋虫に似た動きをする一つの塊が冷たい床を這いずる。薄暗い中で蠢く姿は異様であり、ある者が見れば、

「ボス…それ、むっちゃ気持ち悪い」

バカげたものに見えた。

鉄格子が迷路のように立ち並ぶカビ臭い部屋…所謂牢獄と言われる場所で、縄にがんじがらめにされた男が蠢いていた。先ほどからぐねぐねと動いているのは彼であった。

その反対側にいる男は対照的に、手足は自由に効いているが一か所でじいっと芋虫男を見てはため息をついていた。

「ボス…いい加減、あきらめましょうよお」

「いや、待てい！まだ早いぞ、あきらめるには…もうちょっとで、この、縄が…あいててて、ちみっと痛い、ちみっと…縄、食い込む食い込む！」

一人で五人分以上の賑やかさを見せるボスと呼ばれた男…とはいえ、まだ少年のあどけなさも残る。成人手前あたりだろうか、それでも声は深く体格は縛られているとはいえたくましい。その様子を正面の牢屋に入れられている男…こちらも同じく、まだ幼さが残る。薄暗い辺りを見渡せば、そういった少年のような人たちが多く、中には中年の女性や男性、まだ幼い子供までも混ざっている。しかし誰もが暗くうつむき、自分の行く末を案じている。

しかし芋虫男は違う。それに一人だけ拘束されている。

「ボスう…だからもうやめましょうって…」

「いやいやいや！いける！今度こそ脱獄を図るんだ！お前も行くだろう、ハヤト！」

「いやあ、俺は…」

「あきらめるな！」

「はあ…そうやって何度兵士に捕まったと思ってるんですか。それにその縄」
「そうですよ」
と、また他方から声。声質からして彼らと年齢は変わらないようだ。
「ボス、もうやめましょうって。俺たちがいくらもがいても意味ないですから」
「くそう、ジャンもか！意味ないなんていうな！寂しい！」
「寂しいって…」
「とりあえず、縄を…あいててててて」
男たちはため息をつき、ボスと呼ばれた男のもがく声だけが虚しく響いた。
そこに唐突に光が差し込み、わらわらと兵士たちが入ってきた。誰もが武装をしており、甲冑に似た防具と重装備だ。
緊迫した空気が一瞬にして生まれ、人々はわずかにざわめきを見せ、動揺した。その中から颯爽とした金色の風が吹き、厳つい兵士たちを押しのけ堂々と女は前に出る。体は華奢で折れそうだが、態度は人一倍大きい。
彼女―リィナは牢屋の前に立つと、手を上に掲げた。すると意思を持ったかのようにするりするりと腕輪から糸が噴き出た。そして「あ」を言う間もなく人々は腕を拘束され、リィナとつながれた。
「全扉を開けてください」
「は。…しかし、この小僧はどうしますか？」
兵士は疲れたように芋虫男を見下ろす。リィナの糸によって引っ張りだされてはいるが、まだがんじがらめの拘束からは抜け出せていない。
「ほーーーどーーけ！毛が、毛が、腕の産毛がつるっ！」
リィナはほとんど表情を変えず、冷たく見降ろしてそのまま引きずった。
「いっててててて！頬が半分すりおろされるっ！」

「…アポトーシスを六分割しておきました」
六つに分かれた糸をそれぞれ兵士たちがきつく握りしめる。その先はもちろん、老若男女の人々。引きずられないように、兵士たちは過剰と言える人数で糸を持つ人の周りに待機する。リィナは頷き、兵士たちも呼応する。手の空いている兵士たちはそれぞれ太い縄を各自に巻きつける。足以外、自由のないように。
「各場所へ。よろしくお願いします」
リィナは頭を下げると、先に出ていった。帰る時も堂々としている。
「俺たちをどこに連れていく気だー！」
「ボス～」
人々はこの世の終わりのような顔で兵士に連れていかれたが、芋虫男だけは賑やかくその場を過ぎるのであった。
そして一通り文句や悲鳴や罵声を言い、兵士すら呆れて倒れたくなるような駄々をこねてとある部屋に放り込まれた。
「いてーーー！！」
耳が思わずキン、と筒抜けてしまいそうな大声をあげ、芋虫男は部屋にごろごろと転がりこんだ。それに続いてハヤトと呼ばれた男、同じくジャンが転がされた。ちなみに彼らは大人しかった。
「何しや……あー！また閉じ込め…」
ばたん、と大声に負けぬ音を立てて扉はつぶれるようにして閉ざされた。
ハヤトとジャンのため息が見事に重なった。
「ボス…少しは危機感を持ちましょうよー」
「そうそう」
「くよくよしてても仕方ないって言うだろ？それに今度は個室だから何となく安心…お」
芋虫男は顔を起き上がらせ、じっと前の壁を見据えた。薄暗がりなのでどこまでが壁かわからないが、明らかに壁とは違うふくらみがある。一際濃い影を落とし、壁に埋まるようにしてそこに存在し

ている。
目は徐々に慣れていき、それが人だとわかった瞬間、男は声を荒あげて再び鼓膜を破りそうになるのだった。
「ハヤト！ジャン！見ろ、そこに人が…」
「は？」
「嘘…」
三人は凝視し、それが何かを確認すると…。
わずかに呻き声が返ってきた。
三人は飛び上り、身を寄せ合った。
「…誰…？」
声からしてまだ幼い少女だろう。三人は頷き、再び目を向けた。目はほとんど慣れたのでそれが何か確認することができたが、声はでなかった。出すことなどできなかった。
目の前の少女は彼らのように手足を拘束された状態とはまた違う束縛を受けていた。芋虫男のそれとも違う。手は上から鎖でつながれ、足は鉛を付けられている。少女につけるものにしては頑丈すぎ、見る者を同情させるには十分な悲劇さだった。さらに付け加えるなら、少女の全身は小さな擦り傷でいっぱいだった。血は出ていないものの、皮が所々めくれている。痛みだけを加えられた、拷問の跡のようだ。
男たちは唾を飲み込むと、恐る恐る近寄った。
「来ちゃだめ！」
少女の叫びに再び体を震わせる。
「…アポトーシスだから、触ると溶けるよ…」
三人は顔を見合わせ、首をかしげた。少女は続ける。
「それに、どうしてここに…？」
その問いに芋虫男はぐるりと体を転がせ、少女に近づいた。
「だ、だめ、近づいちゃ…」
「大丈夫だって」
少女の大きな瞳が見開かれ、まじまじと驚愕の様子で男を見た。

男はにかっと快活に笑うと体を反転させ、顔を上げた。
「俺はイース。イース・タールだ。あんたもアポトーシスか、そりゃ難儀だったなあ」
少女は答えず、ただ芋虫男―イースを見つめている。驚愕とどことなくな期待を込めて。
「俺もそうだけど、俺の部下、ハヤトとジャンもみんなアポトーシスだ」
「え…？あ、う」
少女は何かにつまったように口をぱくぱく動かし、それでも怯えの様子を解かないでじっとイースを見つめている。
「ボス～あんまり怖い顔で見たら泣いちゃいますよー」
「そうそう」
彼らも目が慣れてきたのか、少女の存在に微笑みかけた。それでも少女は躊躇していた。
「あんた、名前は？」
「俺…」
「俺？あんた、男か？」
言って、イースはじろじろと少女の体を舐めるように上下させた。その視線に少女は困ったように口を曲げ、赤面し始めた。
「ち、違う…こ、これは癖で…」
「ふーん。で？名前は？」
「お、俺…。俺は、アリカ。アリカ・ランザート…」
「わかった、アリカな。…で？何でここにいるんだ？」
「それは俺たちもですよ、ボス」
「そうそう」
二人は頷き、イースは振り返り、鬼神の形相と狼のような吠え方で威嚇した。
「俺たち、よーくわかんねえけど捕まっちまってさ。よくわかんねえうちにここに入れられたんだが…。ところであんた、何でそんな格好なんだ？」

「ボスに言われたくないだろ」
「うんうん」
「黙れよ？」
二人はしんと黙り、イースはアリカに向いた。
「俺たち、アポトーシスってだけでよくわかんないうちにここに入れられたんだが…あんたもか？」
「う、うん…そう、…だと思う」
「にしても、あんただけその鎖って大変だなあ…」
アリカは何も言わず、視線を落とした。
「ところで…」
イースはごろんと転がったままの姿勢で不敵に笑ってみせた。八重歯が覗き、怪しく光った。
「俺たちと一緒に、脱獄しないか？」
「へ？」
満面に笑う顔からは偽りは見えない。ぱっと見ただけでは不幸とも残酷とも言える光景にはひどく場違いに見えた。
ただ、それはあまりに突飛な台詞で、ハヤトとジャンの深いため息だけが今最も似合っているようだった。

三章五話

通常、アポトーシスと呼ばれる人種はアリカのように自ら寄せ付けない空気をまとい、ひっそり暮らすか、それともおびえながらも、虐待を受けながらも何とか街に暮らすか…どちらにしても平穏に生きていくことはおろか、誰もが持つ人としての活気も持てずに過ごしている人たちが大半だ。

それ以外はいないとアリカは思っていたが、今を持ってそれは覆される。

アリカはきょとんと、自分が悲痛な格好でいることも忘れてただただ目を丸くして「へ？」と素っ頓狂な声を上げた。

その声にイースはにかっとまたしても場違いな笑顔を浮かべ、部下二人はため息をついた。

「な、な、え、え？」

「だから、脱獄」

「あー、えっと」

答えたのはハヤトだった。彼は申し訳なさそうに頭をぽりぽりとかくと、アリカに向いた。

「ボスの言うことは気にしないでください。…ボス、もうやめましょうって。そんなことばっかり言ってるから芋虫状態になるんですよ」

「殺されなかっただけいいとして、大人しくしてましょうよお」

二人は情けない声をあげてボスことイースを見て、もう何百回目となるため息をついた。

「だ、だつごく…したの？」

「もちろんだ！…どれも残念ながら失敗だったけどな、あっはっは」

「…そ、そうなんだ…」

「でも！」

縄がなければ拳を高く掲げていただろう。イースは声を高らかに

すると、鼻息荒く天井を見つめた。
「次こそは！」
「その自信はどこから…」
ハヤトは頭を抱えると、壁に寄り掛かった。その迎えにジャンが寄りかかる。
「どうでもいいですけどね、ボス…なんで俺たちこんな目にあっちゃったんでしょうねえ…」
「うんうん」
「はあ？そんなの知らねえよ。それよりも脱獄だ！」
「もうやめましょうって」
「脱獄は男のロマンと相場は決まっている。ということで、さてと。縄をどうしようか…ハヤト、ジャン、あとアリカ。どうしたらいいと思う？」
天真爛漫にもほどがある台詞に三人はただぽかんとするしかない。特にアリカは自分の置かれている状況にも関わらず、目を点にして不思議な生き物を見るようにイースを眺めた。そして、頬が緩むのを自然と感じた。その姿を見て、イースは「お」と声を漏らしながら同じように口元を緩めた。
「そうそう、その余裕だ。笑え笑え。無駄に元気になれるぞ」
「ボス。無駄ってわかってるんだったら、笑ってないでやめてください」
「何を言ってるんだ、ハヤト。いいか？俺たちは盗賊なんだ。盗賊が脱獄をしないで何になる…おお、韻を踏んでラップ調。さあ、縄を…縄…」
明るい調子はまだまだ続く。イースが蠢くほどハヤトとジャンはため息をつき、アリカは胸が満ちていくのを感じた。
「おもしろいね、イースさんって…こんな状況なのに」
「そういうお前の方が余裕っぽく見えるけどな。鎖、痛くないか？」
「少し、痛いけど…平気。…ねえ。脱獄ってどうやるんだ？」
その台詞にイースは目を光らせ、ごろりと再び体を起こしてアリ

カに顔を向ける。
「興味持ったな？」
「うん。俺…謝らなきゃいけない人がいるから…その人に会いたいから、早く出たい」
「よしよし。そういうことだ、ハヤト、ジャン」
部下二人は「はあ」と生返事を返しただけだが、イースは満足そうに笑った。
「脱獄準備を開始するぜ！まずは…うん、やっぱり縄か。お前たちの縄はほどけないのか？」
問いかける台詞に
「できますよ」
「もちろんです」
思った以上に軽く返答が返ってきた。
アリカは大きく目を見開くと、あっけなくはらりと落ちる縄を見つめた。ハヤトとジャンは手首をさすりながら立ち上がり、イースを見下ろした。
「いいですか、ボス。これで失敗したら脱獄ごっこはもうやめましょうね。俺もジャンも神経が持たないですから」
「それに次は捕まるどころか殺されるだろうし」
部下二人はうんうんと頷き、イースは一人底抜けの明るい笑みで
「ああ」と芋虫体をぐねぐね動かした。
「な、何で、縄…」
その問いに答えたのはハヤトだった。
「俺たち、盗賊っす。だから縄抜けは初歩中の初歩」
ハヤトは自慢ぶるわけでもなく、淡々と言うとボスことイースの縄の端を持った。
「そーれ」
ごろごろごろごろごろ！
イースは縄の分だけ大いに転がると、うめき声をあげて、それでも「ばっちりだ」と余裕の声で親指を掲げた。その姿にもちろん、

ハヤトたちは呆れた。
「あーすっきりした。さて、次はアリカのだな」
イースは体を伸ばし、ぐるんぐるん腕を回してアリカの前に立った。こうして立ち上がると、彼の体は案外と大きい。アリカは色々な意味でぽかんと口を開けると、イースを見上げた。
「イ、イースさん…すごいんだ、ね…？」
「お、そうか？そうかそうかそうか～そう思うか！さあ、早く鎖を解くぞ！」
気分をよくしたイースは意気揚々と指を鳴らす。とても牢屋にいるとは思えない明るさだった。
彼らはアリカを囲むと、ふむふむと鼻を鳴らしながら枷に触れる。どういったものでどういう鍵か、どういうつながりがあるのか…詳しく調べている。しかしそれもたった数分で、ハヤトは髪からヘアピンを引き抜くと、鍵穴に差し込んだ。かちゃかちゃと軽い音が続き―ぱちんと小気味いい音がしてアリカは解放された。そして足も軽くなり、アリカの体はたちまち自由になった。
あっという間の出来事にアリカはぽかんとしてしまったが、少し気分を楽にし―それでも不安で目を曇らせる。
「ありがとう…でも、イースさん。脱獄しても…捕まっちゃう」
「確かに、な。何度も逃げたが捕まった。でも殺されはしない。なんでかわかるか？」
その問いにアリカは首を振る。
「俺たちアポトーシスにやつらは安易に触れない。血に触れることもできない。それに、もっと…殺す以外のやり方っていうのかなあ…どうにも俺たちを利用して何かやらかすらしい」
「どういうこと？」
「んー、どうだろうなあ？ハヤト、ジャン、わかるか？」
「そうですね…大分人数が集められてましたから。何かするのはわかるんですが…それ以上は」
「同じく。共通項目っていったらアポトーシスぐらいしかないです

からねえ…」
　三人はつぶやきながら手の甲を無意識にさすった。そこにはアリカと同じく、烙印ともとれる痣が薄暗がりでも浮かび上がった見えた。アリカはある種の安堵と気安さを覚え、瞼を軽く閉じた。
「聞いて、いい、ですか？」
「はは、敬語はやめろよ。照れるし」
「こんな人に敬語使う必要ないし」
「そうそう」
「こら！こんなとはどんな！まったく…一応俺がボスなんだからな！」
「だから俺たちは一応敬語っぽく言ってるんですよ。もう癖みたいなもんですけど」
「うおー！やっぱり俺のことボスだって思ってないな～！」
　イースは淡々と言うだけのハヤトの首根っこを捕まえると、ぐりぐりと拳でこめかみを攻撃した。
「や、やめてくださいって！いた、いた、いだだだだだだ」
「おしおきじゃー！」
　二人はじゃれ合うように絡み、アリカは自然と笑みをこぼした。
（久しぶり…こういうの。笑ったのも、安心するのも…）
　アリカはティシーといる時とは違う安心感に心満たされるのを感じた。徐々に氷のようなものが溶けて、体が自由になるようだ。やはりアポトーシスはアポトーシスの中にいるのがいいのだろうか。彼らのように、痣を持つ者同士が集まれば、悩まされることなく過ごせるのだろうか。
　気がつけばハヤトは解放され、「痛い、くそう」とつぶやきながら壁にもたれかかっていた。
「それで？俺に聞きたいことって？」
　イースはにっかと快活な笑みでアリカを覗き込む。アリカはあまりに天真爛漫な笑みに少し照れ、うつむきながらもぽつりぽつりと言葉を出す。

「何で…そんなに元気にいられるんだ？俺たち、アポトーシスで…病気の源なのに」
「あーそういうことか」
イースはいとも簡単に言葉を返す。
「それなあ、俺も散々考えたわ。俺の両親もアポトーシスでさ、大分疎外されてた。生まれた俺もこの通りだから、なんつーかそれなりに他のアポトーシス並に辛い暮らしっつーやつをしてたわけよ。まあ楽しくない話だけどな…それから色々あってさ。暗くても明るくても現状は変わらないってことがわかった。だからこうして楽しい方をとった。ま、元々親父も似たようなことしてたし」
その隣でジャンがひょこりと顔を出す。
「そんなボスに誘われて、俺たちは気がつけば盗賊なんていうものになったんですよ。最初は飢えをしのぐための日常の一貫だったんだけどねー、気がついたらこれ。アポトーシスっていうこともあって、案外スムーズに物取りできるんですよ」
言いかえると物騒な気もするが、彼らは平然としていた。盗賊と言う行為は悪いことだが、何も悲観していない。アポトーシスであることに苦しみはあれ、彼らはそれ以下の気持ちを持っていなかった。
なんて強いんだろうとアリカは目から鱗が落ちる勢いだった。今まで逃げるように生きていた自分とは違う。
（そういう生き方も…していいのかな…）
「ん？他に何か疑問でもありそうだな？」
「え、う、うん…。その…感染はしなかったの…？」
「感染、ね…。俺の知ったことじゃあないって言ったら…俺は俺自身を殴りたくなるけど。…そりゃあるさ。悪いと思ってる。それなりに俺も苦しんだ。…でもどうすることもできない。俺は助けることも、救いの言葉もかけれない。…現状が転がってるだけだ。そこには何もないんだ。…だから考えない。まったく考えないわけじゃないが、それでも…なあ。わかるだろう？」

アリカは軽く頷いた。何も変わらない、ただそこに事実だけがあることをアリカはよく知っている。でも懺悔したいのだ。それがたとえ自己満足であろうとも、祈らずにはいられない。そうして罪を拭い、きれいな体になろうなんて…それこそ自己満足な問題だが、アリカには他の方法が思いつかなかった。

「とにかく、悩んでいる暇はないんだ。…さてさて、ここはどういうところか考えるぞ、ジャン、ハヤト」

「はーい」

二人は気の抜けた声と共に立ち上がり、壁を探り始める。

「あの、イースさん…もう一ついい？」

「もちろん」

「…昔起きた戦争のこと…何か知ってる？」

「戦争？生まれる前のことだったかー？どうだっけか。んーまーよく知らないわ。すまん」

「そ、そう…」

「何かあるのか？」

アリカは急いで首を振って否定する。イースは再びにかっと笑い、立ちあがった。

「どうだ？」

「うーん、壁の響からして随分と重厚な建物にいるみたいです。この湿度やカビの発生具合を見て—多分地下。使われた痕跡があまり見当たらないので、もしかしてどこかにぼろがあるかもしれません」

ハヤトはてきぱきと言い、壁を叩いた。確かに音は響かない。

「家でもどこでも、使われないものっていうのは脆いですからね」

「俺たちが最初に放り込まれてた所より大分ぼろいし、外に人の気配もしないので…突破しやすいかと」

「そっちにある扉は？」

「こっちも使われた形跡はほとんどなしです。ヘアピンで開くかな…」

「ただ開いたとして…外に出れるかっていう問題だ」

「最初の牢屋の時はすぐつかまりましたからねえ…ここがどういったところなのかわかればいいんですが…。ううーん、検討つきません」
三人は腕を組んで唸った。それぞれ眉間にしわをよせ、顔を上下に傾ける。
「広い建物なのかどうか、どこの国にあるのか…。牢屋から近かったので、無茶苦茶広いっていうこともないだろうし…」
ハヤトはつぶやき、うつむいた。
「よし」
対称的に、イースは顔を上げた。
「とりあえず扉を開こう」
「…適当すぎますって。いい加減にしてくださいよ」
「次は真面目にやられるって…」
「後ろ向きな考えはするな！多分、大丈夫！」
「…この人の無意味な自信ってどこから来るんだか…。とりあえず、開けますよ。いいですね？後で全部ボスのせいにしますからねっ」
ハヤトはややヒステリックに言い、イースはただ笑って頷いた。ハヤトはため息をつくと、ピンを扉の鍵穴に差し込み―かたん、と音がした。
ハヤトの肩が飛びあがった。
それだけでわかる。
扉が、開いた。
ハヤトの手がノブを回す前に。
「くそ…」
イースは舌打ちをすると、自然とアリカを後ろにかばった。
ハヤトとジャンは体をこわばらせ、扉に集中する。
ぎ、と苦しげな音と共に金色の髪が流れおちた。
「…な、縄が…」
おどおどとした口調、細い体、ブロンドの髪―エルンは瞳孔を縮め、扉を力強く握った。

「あなたたちですね…脱獄を繰り返す方たちは！」
いつも怯えているエルンだが、さすがに怒りで強気に出ていた。
彼女は扉から手を離すと、腕に納めていた爪を降りだした。しゃき、と金属がこすれる音にハヤトとジャンは一斉に身を引き、イース達は固まった。
エルンは一歩、一歩と確実に詰め寄る。
「また脱獄するようなら…殺しても構わないとイデム様より言伝があります」
「くそ…」
イースたちは舌打ちする。体は震えていても、瞳は強気の姿勢を保っている。その中でアリカは一際怯えを見せ、イースの背中にしがみついていた。
「…お前たち、いいか。一気に―」
イースはアリカをそのままゆっくりと背中に固定させた。ハヤトとジャンも頷き、三人は腰を浮かせる。
エルンの金色の髪がふわりと揺れ、視界が一瞬だけまばらにノイズを走らせた。
その一瞬。
瞬くのも遅いと感じさせるその隙間に、イースたちは立ち上がった。
アリカは彼らが何をしようとしているのかわからず、ひたすらしがみついて彼から落ちないように手に力を込める。
「っあ―！」
エルンが声を上げたとき、四人はすでにドアを蹴破っていた。そのスピードは躊躇なく、風すら切れそうだ。
エルンが小さくなるのを感じ、イースは思わず満面の笑みを浮かべた。
「いや～何度やってもこの脱獄って楽しいなあ！」
とんでもなく大物な人物に出会ってしまったのではないだろうか、とアリカは今になって心強さを感じてしまった。

三章六話

「ふうん…」

その声はひどくつまらなさそうだった。表情もへの字に曲がり、どことなく不機嫌そうである。

その姿にエルンはびくんと怯え、おどおどと視線を落とした。隣で同じ顔―しかし凛と強いまなざしを持つリィナがそんな彼女を小突いて無理やり頭を上げさせる。

「す、すみません…油断してしまって…」

「いいよ。もう済んだことだし」

二人の主であるイデムは音を立てて紅茶を飲んだ。

深緑を基調とした古典的デザインの部屋は、複雑かつシンプルにまとめあがった文様のカーテンと絨毯、無地だが生地の整った長いソファ、使い込まれているが艶のある形の良いテーブルがそれぞれ配置されていた。所々置かれた観賞植物は日差しに照らされ、ちらちらと光っている。とても清涼でいて、来る者をすっぽり包み込んでくれるような丁重さのある部屋だ。広さはそこまでないが、こうして三人でいても窮屈さを感じさせないのはデザインがいいからだろう。

そのソファにイデムは足を放り出し、背中を手すりにもたれかからせていた。足は気だるげに組まれ、長い黒髪は絨毯に流れおちていた。

イデムはカップを机に置くと、にんまりと目をゆがませた。

「…中々楽しいね。こういうのってさ。しかも、アリカも一緒だなんて…逃げるネズミを捕まえる作業は嫌いじゃない」

ぺろりと細い舌先が唇を舐める。

「逃げた代償は何にしようか？もうちょっといじめておけばよかったかな～足の骨ぐらい折っておけばよかったかなあ？あ、でもそれだったら逃げれなかったし追いかける楽しみもなかったか」

その問いに二人は答えない。イデムは体を起こして普通に座りなおした。
「とにかく…捕まえようか。どちらにしても逃げれないしね。エルン、君は他のアポトーシスたちの様子を」
「わ、わかりました…しかしアリカ・ランザートたちは…」
イデムはふふ、と笑うと目を光らせた。
「アリカ捕獲は俺とリィナで行うよ」
「そ、そんな…イデム様自ら…」
「いいんだよ。言っただろ？こういうの嫌いじゃない…いや、楽しいね。うん、楽しくなってきた。早く捕まえていたぶりたくなってきたよ。そういうことだから、エルン」
「はい…わかりました」
エルンは頭を下げると、すごすごと出ていった。耳としっぽがあったら確実に垂れさがっている。
その姿が消えるのを見計らい、リィナはイデムを見つめた。
「イデム様…いいんですか？」
「いいんだ。どうせ暇だし」
イデムはリィナを手まねき、隣に座らせた。リィナの腰にイデムの手が絡み、彼女は柄にもなく頬を赤らめた。その姿を知ってか、イデムは顔を寄せる。
「それに俺が動きたい理由ぐらい…わかるよね？」
「も、もちろんです…」
「そして君たちが俺について来てくれる理由も…同じだ」
「…私は、そんな…」
リィナはゆっくりイデムの顔を見る。彼の顔はいつも通り、深い黒に覆われていて真意は見えない。それでもリィナは心地よさを感じた。
「私は自分の生まれを憎んでいますが…それ以上に、イデム様にお仕えできて嬉しく思います」
イデムはさらに深く笑みを浮かべ、リィナの額に自分の額をくっ

つけた。
「わかるなあ、その気持ち。恨めば恨むほど感謝したくなるよ…」
イデムはそのままリィナと唇を合わせる。そして二人の体はゆっくりとソファに倒れこんだ。

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

荒い息が、それでも押し殺しながらじめじめとした狭い空間に響く。
イースはへへっと笑い、口の端を釣り上げた。
「ほーらみろ。今度こそ…うまくいったなあ…」
「あーしんどい…。もう、捕まりたくないですからね…俺たちも本気ですよ」
「本気本気…」
それぞれ脱力しきった声をしながら壁に寄りかかる。そしてずるり、とアリカも落ちた。
「はーあ…あんたが軽くて助かったよ」
アリカはぽかんとイースを見上げる。何が起こったかいまいち把握できてなかった。
「大丈夫か？」
「え、う、うん…平気…。あ、あの、えっと…」
「まだ礼を言うのは早いぜ。…さて、ハヤト。ジャン。ここをどう捉える？」
「そうですね…。風がないのとこの湿度…やっぱり地下って可能性が高いですね。苔の具合もすごい」
ハヤトはまじまじとレンガの目を見つめ、指を這わす。じゃりっと音と共に黒に近い深い緑色の苔と泥が指につく。あと、とジャンが続く。
「ここ…あまり使われた痕跡がありませんね…そして古い。ハヤト、何かわかったか？」

「んー…確かに古い。十年以上…それ以上か？うーん…今は使われてない牢屋…？だとしたら」
二人は頷いたが、イースは首をかしげた。
「どういうことだ？」
「俺たちも知識でしか知らないんですけど…そもそも牢屋ってほいほい作っちゃいけないんですよ。あと、地下を作ることもそうあっちゃいけないんですよ」
「え、そうなのか？すごいなあーお前たち頭いいなあ～」
「知識の問題なんですけどね…。…ということは、限られてくるんです。地下に牢屋を作っていいのは貴族、城、あとは学校施設など…学校は牢屋を作ってはいけいので、もしかすると…でもまあ、こっそーーーり作っちゃえばいいって言ってしまえばおしまいなんで、確実にとは言いませんけど」
「ふうーん、まあその通りだとして、じゃあ人身売買でも企んでる貴族がいるのか？」
「そう考えてもいいですけど…俺たちに価値はないですよ。なんといってもアポトーシスですからね。使うに使えません。感染しちゃうし」
「そうかー」
イースは腕を組み、頭を壁にこつんと倒す。その隣でおずおずとアリカは身を乗り出した。
「あの…ここにいて大丈夫…なの？」
「大丈夫ですよ。今のところ人の気配はありません。下手に動くよりも…もう少し考えてからにしましょう」
イースとは違い、ハヤトとジャンはどこまでも冷静だ。それに三人はしゃべり声はもちろん小声だが、動きに音はない。アリカは思わず感心し、自分も音をたてないように気を付けることにした。
「一番よくわからないのが…風がないんですよね…」
「つーことは？出口らしきものがない？」
「単純すぎますが、可能性はありますよ。どういうことかはまだわ

かりませんけどね。じゃあそろそろ進みましょう」
四人は立ち上がり、そっと一歩を踏み出した。
ここまで逃げるのにいくつか適当に道を選んだ。右か左かで分かれている道だが、それだけでも迷うのはたやすい。だからなのだろうか、エルンは追ってこなかった。
それにしても広い場所だとアリカはふらつきながらも、壁に手を添えながら進んだ。
「大丈夫か？」
「う、うん」
傷は大したことない。アリカの血は何といっても猛毒だ。いくらイデムとはいえ…まずいと考えたのだろうか。打撲ばかりで切り傷はない。それでも足や腕は引き攣る。歩くのに注意しなくては、イースたちに迷惑がかかるだろう。
「しっかし…広いな。どうしたらこんな場所が作れるんだか」
「というか、無駄ですよね。俺たちがいた牢屋と、次の部屋…それ以外にも部屋はあるようですが、今のところありませんし…。この場所の使用用途がまるでわかりません」
先頭を行くハヤトはどこかうんざりしたように言い、ゆっくりと目くばせしながら進む。その後ろでジャンも天井を見ながら声を発した。
「上の方まで苔がびっしり…相当使われてなかったんですね、ここ。あと、川が近いのかも…こんなに水浸しになることもないし」
床も苔が生えている。その隙間に所々水が溜まっていた。今は暗闇に慣れたからわかるが、目が慣れないと水も苔も触れただけで驚いていたところだ。
ぴたん、と水がはねた。
その音に四人は体をこわばらせる。
「…大丈夫です。何もありません」
その人声に後ろ三人は息をつく。
「しっかし…焦るなあ」

「本当ですね。どうしたものか…。とりあえず進むしかないようですけど…。闇雲に行くのもどうかと思うし…」
「でも進むしかないんだろ？入ってきたんだから出口は必ずあるし…まあどうにかなるって、あっはははは」
あっけらかんと笑うボスに部下二人は呆れるほかなかった。アリカもどうしていいか分からなかったが、わずかに安堵の息を漏らした。
イースは鍋に穴があいたような底抜けの明るさがあって一瞬不安になるが…次の瞬間、妙に安心する自分がいる。言動一個一個を見ると、どうにも無責任に見受けられるし、根拠もないし不安といえば不安なのだが…性格というのは随分と相手の気持ちを左右させるものだ。彼の明るさに、ここにいる全員が安心している。
こうして気持ち的には救われているが、現状は怪しいままだ。
不意にイースの顔が厳しく強張った。その気配に部下二人も体を引き締め、双眼を細める。
「気をつけろよ、二人とも。アリカもだ。…確かに簡単に脱獄できた。抜けると信じて脱獄したが、どこか捕まる気配っつーのかなあ…鬼ごっこみたいな遊び感覚があった」
「遊びだったんすか。迷惑も甚だしいですよ」
「…日常会話で甚だしいなんて出るとは思わなかったぞ、ジャン…。…というか、例えだよ例え。捕まると思っても脱獄したっていうか、気持ちが軽いっていうか」
「脱獄してもすぐに捕まるなーとわかっていながらしたんでしょ…」と、ハヤトがつなぐ。
「おお、それそれ。そんな感じ。で、今回も捕まるなーとは思ってたんだが…あのねーちゃんが気弱なせいか？なんつーか、捕まる気配はあったのに俺たちはここにいる…どことなく、違和感があるんだよなあ…。変に気を持たせてるっつーか、なんかもったいぶってるっつーか…。わからんなあ」
「わからないなら進みますよ。捕まりそうになったら逃げるまでで

す」
冷静なジャンに言われ、イースは苦笑して頬をかいた。
「ま、それもそうだよな。…さて、進むぞ」
三人は頷くと、再び恐る恐る前に進んだ。
そしてその不安要素が明確になるのは、もう少し後のことだった。

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

細長い、針金のような指先から力が抜け、ペンが転がり落ちた。
真っ白な紙に点々と黒い跡がつく。
青白い光が水面のように揺らめく広い研究室に、ティシーは一人ぼんやりと椅子に腰かけていた。白昼夢でも見ていたのだろうか、前後の記憶が曖昧だ。
アリカ誘拐、そしてイデムの行動。それらの完璧性に気づた後、それでも元帥・ダルテは動こうと策を練り始めた。兵士であるラグもまた武力の準備をし、四君子たちはそれぞれ水路を回っている。
ティシーは指を鳴らした。音もなくリリーシアが浮かび上がる。研究所はシノビの者たちなど関係者以外立ち入り禁止にしていたが、ここのところ部屋に帰っていないし面倒なため、まあいいかと許可した。
「何か御用ですか」
「無愛想だねえ、リリーシアくんって」
「……」
呼んでおいていきなりなんなんだ、と思いはすれど決して顔に出さず、リリーシアはティシーを見る。そんな心情をわかってかティシーはくすりと笑って机に肘をつき、頬杖をした。
「なんだか似てるんだよね、これ」
唐突にティシーは言葉を漏らし、リリーシアは首をかしげた。
幼かった幼馴染ダルテとラグはきっとぼんやりしていてその辺りのことは覚えていないだろう。ティシーも似たような年齢だったが、

生憎と嫌と言うほど覚えている。覚えているどころではない。
記憶と言うガラスにくっきりと刻みこまれているのだ。
ティシーは目をつむる。眼前に赤い光景が浮かび上がる。
「…戦争って本当に無意味だけど、少しだけいいこともあった。僕だけ、だけど」
アリカの姿が浮かび上がる。
何度待ち、何度切望したか。
「でも何人も何百人も死んだ。ほとんどが…アポトーシスの力のせいで」
ティシーは目を開け、遠くを眺める。
「多分、ダルテは動けないだろうね。これからおそらくだけど向こうの国から使者が来る…となると」
かたんと揺れた椅子が大げさに部屋に響き渡り、リリーシアは思わず体を引いた。しかしティシーはお構いなく立ち上がり、にんまりと笑って瞳を光らせた。
「僕が動く以外、ないと思うんだよね…」
「し、しかし…四君子もまだ探している最中ですし…」
「きっと四君子にも何か足止めするようなことするかもしれないし、それよりなにより…」
この現状は前の戦争、アポトーシスが生まれる原因となった戦いに似ている。それはずっと思っていたことだし、ダルテたちも気づいている。だからこそ水のあるところを捜索している最中だが、それ以上に相似しているところがある。
ティシーの脳裏に自分と似た姿が浮かび上がる。黒い髪をたなびかせ、同じようににんまりと笑う存在。
「イデムが、いる」
それが何を暗示しているか、ティシーだけにわかる。
イデムは同じなのだから。
「きっと僕を呼んでる…だからこんな回りくどいことをする…」
ティシーの胸にふつふつと怒りが浮かび上がる。でも怒りに身を

任せてはいけない。イデムの怒りはもっともで、でも勘違いしている。
「ということだから、行こうか」
「…はい？」
勝手にしゃべった揚句、ティシーはリリーシアの肩をぽんと叩いた。それは、つまり。
「わ、私も…行くんですか？」
「当り前でしょ。僕は闘うの苦手だし、面倒だし。そういうことだから、ありこちゃん迎えに行く時と同じように護衛、よろしくね」
有無を言わさない笑顔が怖い。リリーシアは硬直し、どうしていいかわからず目を回した。
「し、しかし…ダルテ様が…」
「ああ、いーのいーの。後で適当に報告すればいいんだからさ。さて、行こうか。目星は付いてる…」
ティシーは再びリリーシアの肩をぽんと叩くと、部屋の扉に手をあてた。
きっとイデムは何かする。何かしたくて言いたくてこうして遊んでいる。
色々なことがわかりすぎて胸が焼けてきたが、アリカのことを考えれば心は何とか保ってられる。
「逃げたら死にたくなるようなお仕置きをたっぷりしてあげるから、覚悟して」
「あ…う」
リリーシアは結局何も言えず、すごすごとティシーの後ろについていった。

三章七話

「やっぱり行ったか…」
ダルテは窓によりかかり、息を吐いた。そうなるであろうことはわかっていた。
「どういたしましょうか、ダルテ様」
ダルテは窓から離れると、ひっそりと跪く四君子の一人・蘭に近づいた。流れる髪は艶やかで絹のよう。ゆっくり顔を上げる仕草も柔らかく優美でどこか貴族の匂いを漂わせている。全体的には女に見えるようでいて、眼差しは男の闘志を持っている。四君子の中と言わず、彼は恐ろしいほど美しいという言葉が似合う男だ。そしてしたたかで、どこか狡猾さを持っている。
その他の四君子たちには水路検索などを任せたが、彼だけはティシーを偵察するのにここにおいておいた。それは正解だった。他の四君子だったら、迷わずティシーを追いかけて連れ戻そうとしたに違いない。
ダルテは髪をかきあげると、椅子に腰かけた。
「いい、放っておけ」
「わかりました」
狡賢そうなくせに上のものの言葉はしっかり従う。ダルテはそういうところが気に入っていた。
「きっとティシーも気づいているだろう…だからこそ出て行ったんだ。……イデムはきっと、ティシーを呼んでいる。そのために画策して…いるような気がしてならない」
「イデム、ですか。私にはわかりかねます。どうしてそのようなことをしなくてはならないんでしょう。回りくどい上にまるで美しくありません。どちらかというと醜悪なやり方だと思いますが」
つらつらと流れるような台詞は所々に棘があるが、その通りだ。
ダルテにはイデムのやり方がわからない。確かに頭のいいやり方

だしこちらには打つ手がない。もうすぐ国から使者がきておそらく取引をするだろうが、どう答えていいかまるでわからない。もっとも最善の道はどれだろうかと考えるが、どれも違うような気がする。
「不安そうですね」
「…まあ、そうだな……私は頭の回る人間ではない…かといって一貫した考えも持っていない。何もできない…」
「ダルテ様。そう言ってはいけません。それでは民はもちろん、仕える部下たちも不安がります。ですが弱さを認める元帥はとてもいい」
言い終えると蘭はにっこりと特上の微笑みを浮かべた。単なる部下なのにダルテもさすがに動揺する。
「ま、まあ……。…回りくどいと感じるのは、これもおそらくなのだが…この作戦を考えた人の意思とイデムの意思がずれている気がする。イデムはティシーを呼んでいるだろうが、アポトーシス誘拐や暗殺などを考えた人はそうは考えてない。向こうとしては、ただ単に話し合いで私を陥れたいに違いない」
ダルテは頭を高速回転させる。
イデムは誰かに従うような男ではない。かといって単独で動く愚かさもない。前回戦争で敵対した国に行ったのは、恐らくこの国に復讐まがいのことをしたかったからに違いない。そしてそこで―頭の回転のいい人物がいたのだろう。それに従いつつも自分のこともやろうと考え出した。
そう考えればこれまでの陽動からアリカ誘拐まで自然と繋がる。
だがその先はわからない。話し合いによって何が起こるか、イデムは何をしようとしているか。
結局のところ、ちりばめられた意味はわからずじまい。
ダルテは頭を抱え、肘をついた。
「大丈夫ですか、ダルテ様」
しゃなりと涼しげな音と共に蘭はダルテの横に立つ。
「ん？あ、ああ…少し疲れたな」

「ではこの薬をどうぞ。私たちも使う栄養剤です。即効性があるのですぐに元気になりますよ」
言いつつ、丸薬を二つ取り出しダルテの手に乗せる。
「すまない。早速飲んでおこう」
「それでは、私はティシー殿の動向と水路を調べに行きます。報告は後ほど」
「ああ、わかった」
蘭は優美に頭を下げると、颯爽と翻し扉を開けた。
「あ」
丁度ノックをしようとしたらしい、手を挙げたままのラグがそこに立っていた。蘭は無言で頭を下げると、ふわりと残り香を漂わせて廊下の奥へと消えた。
その行く先をラグはじっと凝視し、そして中へ入った。
「ああ、ラグ」
「……四君子の蘭？どうしてここへ」
「ああ。ティシーの動向を頼んでおいたんだ。あいつは何かするに違いないし、イデムもそう望んでいると思うからな」
「そう…」
ラグは少しだけ顔を歪めると、首を振った。
「どうした？疲れているのか？だったら、これをやろう」
「何その怪しい丸薬…」
「今、蘭にもらってな。疲労回復に役立つそうだから一個ずつ、どうだ？」
「……ダルテ。こんなこと言いたくなんだが…四君子を信用しすぎてもどうかと…」
「何言ってるんだ。四君子はずっとこの国に仕えてきたシノビだぞ。ティティル国と良好であるうちは何もないぞ。あったとしたらそれは国問題になりかねない」
「む…ま、まあそうなんだけど」
ラグは煮え切らない思いでそっぽを向いたが、ダルテはきょとん

とした。それ以上何も言わないようだったので、ダルテは先に丸薬を飲んで眉間にしわを寄せた。
「うーん…苦い。効くことを願って…それで、ラグ。兵士たちは」
「ん、うん…。準備は着実に整ってきているよ。武器も豊富だ。先日のこともあって、兵士たちの士気も十分ある。…あとは待ち構えるだけだ」
「そうだな…待つ…。…ん？」
ほんの少しの会話の中で引っかかるものがあった。
「どうかしたか？」
「いや…何か引っかかる…」
ダルテはこめかみに指をとんと当て、目をつむる。何が引っかかったか、ラグの声を忠実に頭の中で再現する。準備、武器、豊富…先日のこと、士気、待ち構える…待ち構える…待つ。
「そうか…」
頭の中で何かががっちり組み合わさる。一分の隙もない当てはまりに、ダルテは笑みを浮かべた。
「ラグ、ティシーの動きは正解だったよ」
「え？どういうことだ？」
「…ちょっと頭を使う。ラグはしばらく兵士たちの士気を保っておいてくれ。多分必要はないだろうが…」
ラグは了解とも何とも言えず、不敵に微笑む幼馴染を凝視した。
「あとラグ、もう一度蘭を呼んでくれ」
蘭、の言葉にラグは一寸眉をひそめたが、黙って頷いた。そんなラグの様子にダルテは構わずにやにやと笑い続ける。
「そうだな…その必要はないんだな、多分…」

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

「うがー！！」
「うるさい」

「黙ってください」
叫ぶイースの余韻も残さず、一秒と間を開けずジャンとハヤトは冷静に突っ込みを入れた。おかげでイースはそれ以上暴れ回るわけでものたうつこともなく、しょんぼりと肩を落として壁にもたれかかってずるりと腰をおとした。
「辿りつかないもんだなあ…」
「仕方ないですよ。案外と入り組んでますし、わかれ道も多かった。出口の確率は数百本のうちの一本だけですよ」
「右手をついて進めば迷わないって聞いたけど」
「それ、だめです。複雑な迷路の時は使えない技ですよ」
そうかー、と息を吐き出すとイースは頭を抱えた。ぐだぐだと文句を言うボスにジャンもハヤトもそれ以上何も言わなかった。
迷い続けてどれだけ時間が経っただろうか。暗欝とした廊下はひたすら続き、歩けば歩くほど湿度で靴や服がびっしょりと濡れて不快になる。
「アリカー、大丈夫かー？」
「うん…」
イースたちの列から少し後でアリカは何とか頷いたものの、やはり体力の消耗が激しかった。体力はイデムの暴行により大分削がれ、今は気力で進んでいる部分が多い。その気力も実のところ尽き始めていた。
（いけない…暗くなっちゃ）
アリカは急いで頭を振ると、ぐっと手に力を入れた。
（早くティシーに会わなきゃ…）
ティシーに謝ることだけを心の糧に、アリカはまた一歩一歩と進んでイースたちに追いつく。
「少し休みましょう」
言ったのは、ジャンだ。ジャンは気だるそうに髪をかきあげると、壁に寄りかかってしゃがんだ。その隣にハヤトも座り、アリカも遅れて座り込んだ。一斉に息が吐き出され、疲れがどっとあふれ出す。

誰もしゃべらず、うつむく中、ジャンだけが目まぐるしく眼球を回して鋭く辺りを見回している。
「何かわかったのか、ジャン」
「……ボスの言いたいこと、何となくわかった気がします」
イースは身を起こすと、ジャンの顔を覗き込んだ。彼は冷静だがどこか苛立ったように爪を噛んでいる。
「もしかの話ですよ…」
眼球の動きが止まり、指を口から離す。おどけた調子だったイースも顔を引き締め、ハヤトと共にジャンの顔を覗き込む。突然がらりと変わった空気にアリカは思わず唾を飲み、背中を震わせた。
(何だろう…嫌な予感…)
ぞわぞわと背中に虫が這いずるように悪寒が走る。
「…やっぱりここ…出口がない……」
「何言ってんだよ」
静かに吠えるイースにジャンは舌打ち混じりに顔をゆがめ、こんこんと壁を叩く。
「たしかにいくつかわかれ道があった。…さっき言いましたよね？こうした牢屋を作るのは限られている、と。限られているということはつまり、狭い……というのはちょっと違いますが、その土地の領土分しか作れないということです」
つまり、とハヤトも目を細め、ため息をつきながら続く。
「ジャンはこの牢屋が広すぎるって言いたいんだな？」
「そうだ。……俺の知ってる限り、こんなに広い土地を持ったところなんて…」
「ふんふん、さすが俺の部下だな」
イースは満足そうに頷き、張り詰めかけた空気が一気にぱちんと弾けてしまった。イースの真面目さは一分と持たないらしい。無駄に偉そうに笑い、ふんぞり返る。
「つまり、あれだな、あれ。えっと…同じ場所をぐるぐるしてるイコールさっきから出口らしきものはない、それどころか窓もなけれ

ばなんだか色々ないイコール、出口がないってやつだな！」
「ま、まあそうですけどね…」
ジャンも顔を緩ませ、呆れたようにボスを見つめたがイースはどこかうきうきとしている。
「くう～！これはきっと、隠し扉ってやつだな！いや～、男のロマン、隠し扉！よし、適当に押していくぞ」
「どこをどうつなげればそんな結果にいきつくんですか！」
「いい加減にしてください、ボス！」
二人の部下は同時にボスの頭を叩いた。小気味いい音がスパンと静かな廊下に響く。
「俺たちはボスと漫才してる暇ないんですからね！いいですか、まあ隠し扉はそうかもしれませんけど……つまり、ボスの感じていることは…敵の余裕」
ジャンは目くばせすると、ハヤトも頷く。
「ようは、袋小路…！」
「向こうは最初から…俺たちが逃げようとなんだろうと、その扉を見つけることができなければ逃げることができないとわかっていて…」
「じゃあ、脱獄する度にいちいち捕まえてくれなくてもいいのになあ」
「ボスは黙れ！」
ジャンとハヤトの声が見事にハモった。二人の外見は特に似たところがないが、こうも雰囲気や思考が重なると兄弟と思ってしまう。…もしかすると、イースといるとみんなこのように突っ込み属性になるかもしれない。緊迫の瓦を一刀両断する天真爛漫なボケのせいで。
三人の会話にアリカはただぽかんとするだけだが、事態は飲み込めた。その瞬間、悪寒が走り思わず両肩を抱く。
捕まったらまた、イデムに…しかも今回は脱獄という事実もある。ティシーと似た空気を纏いながら、顔をしながらアリカをいたぶる

のかもしれない。アリカは肉体的な痛みには慣れていた。でも心はどうにも制御できない。
（怖い…）
ティシーに早く会いたいのに、目の前にはイデム。謝りたい相手はティシーなのに、イデムが汚く言葉を吐き出す。
アリカの全身が氷のように冷えていく。恐怖の念が込み上がれば込み上がるほどティシーに会いたいと思うのに、それは叶いそうにもない。
「アリカ、大丈夫か？」
気がつけばイースが心配そうにアリカを覗き込んでいた。アリカは急いで顔を上げると、首を振った。
「だ、大丈夫…」
「んー、そうだよなあ。疲れてるよなあ。しかもこんな疲れる話」
「由々しき事態ですよ」と、またジャンだ。
「…しかも由々しき、なんて、またまた日常で使わなさそうな言葉を…。…おい、二人とも。結局歩いてどうにもならないならもう少し休もう。俺も疲れたしなあ」
イースは思い切り伸びをすると、こてんとその場に寝転んだ。地面は苔が生えてじっとりと濡れているが、イースは何にも気にならないらしく普通にあくびまでした。
「ボス、図太すぎ」
「しかたないだろー。結局のところ、捕まるの待つだけだしさー」
「うっわ、あきらめモード」
「最悪ですね」
「開き直ったといってくれ。でも、実際そうだろ？」
落ち付いた声が返って背中をうすら寒くさせた。ジャンもハヤトもぐっと押し黙ると、壁に背を付けて俯いた。
「まー、脱獄したいって言ったのは俺だからさ、なんとか責任は持とうと思うけど」
イースはこつ、と床を叩いた。湿気と苔のせいで鈍い音がわずか

に響くだけだ。そしてまたごろり、と横を向いた。
「……水、だな」
イースは目をつむると、じっくりと床の下の音を聞いた。
「…水、ですか」
ジャンもかがみ、音に集中した。
そこに誰もいないのではないかと思うほどの静寂の後、思い出したかのようにさらさらと水の音が聞こえ始めた。
イースは起き上がると、よっと一気に立ち上がる。
「うんうん。やっぱりこの苔具合といい、水路なんだね」
「水路？」
三人は同時に聞き返すと、イースはけろんとした顔をして頷いた。
「ああ。川が近いってジャンだっけ？ハヤト？どっちでもいいけど、言ってただろ？…俺たち、間違ってたな。ここは牢屋じゃなくて水路として活用してたところだ…と思う。水気が少ないからもう随分と昔の話だろうけど」
ふむ、とジャンとハヤトは頷く。イースが何を言いたいか、まだわからない。
突然、イースはにっかと満面の笑みを浮かべた。辺りが思わず照らされるほどの明るさに三人はぎょっとしてしまった。このじめじめした空間には似つかわしくない、快活な笑顔。
「俺たちってさあ、ちょっと勘違いしてたみたいだな」
言って、こつこつと床を叩いた。ジャンもハヤトもまだわかっていない。もちろん、アリカもだ。イースは勝ち誇ったように胸をそらすと、鼻息を勢いよく出した。
「ふふふん、わからないか？ふふん、つまりだなあ……ここは水路であってそれを改良した牢屋だ。ということはつまり、牢屋じゃない。……ここは地下じゃねえんだよ」
しばしの沈黙。ちょろりちょろりと水の音がする。
「……はい？」
ようやく口を開いたのはジャンだった。

「ボス、なんて？」
「いや、だからここ、地下じゃないんじゃない？って」
「えーっと」
三人は腕を組むと、顔を伏せた。
「つまり、ここは……牢屋じゃなくて、水路で…あの、混乱するんですけど」
「だーーからあ、聞こえるだろ？水。……水の音が伝わってくるんじゃない、この下を流れている音だ」
激しくこつこつと床を叩く。アリカはそう言われてもわからないし、ジャンもハヤトも同じのようだ。ただなんとなく、水の音がするぐらいで特に変わったことはない。
「……ボスの聴覚と視覚と嗅覚のすごさは知ってますが……それ、本当ですか？」
「本当だって、ジャン。……ということは、だ」
イースは言いながら辺りをうろつく。こつこつこつ、と執拗なまでに足音が響く。
そしてぴたりと止まると、おもむろにジャンプし―
「とおおおう！」
がごん！と床が崩れた。
一同はあっけにとられ、しばらくぱらぱらと石が脆く崩れる音だけが聞こえた。その間もイースだけは、せっせと床を破壊し、敷き詰められた石をはがしていく。
「そーーーれ、見てみろ」
にっかにっかとイースは笑い、指示した先に―
「あ」
一同の声が揃う。
水の音が先ほどより大きく響き渡る。
そこにあったのは、さらに下層―緩やかに流れる川、水路の痕跡だった。
「ふっふっふ、これで脱獄成功だな！」

イースの誇らしげな声が強くこだました。

三章八話

あまりの冷たさにアリカはぴくりと震えた。
イースの発見した水路に四人は滑りこんだ。まずはイースが入り、深さを確かめる。思ったよりも浅く、膝少し上ぐらいまでしかない。流れも緩く、底はぬるぬるするものの、踏ん張ればなんとか流されずに済むはずだ。続いてジャンが降り、ハヤトが降りた。アリカはイースに手伝ってもらいながらも恐る恐る降りた。
水路は上の階よりも真っ暗だ。ほとんど見えず、アリカは中々一歩を進めないでいた。
「アリカ。よかったら手、つないでやるけど？」
暗がりでイースの手がにょっきりと現れる。アリカは一瞬戸惑ったが、その手を取った。水にぬれた手は少し冷たかったが、つないでいくうちにぬくもりを思い出す。その温かさにアリカは安堵の息をついた。
（なんだかティシーを思い出すな…）
離れ離れになってどれくらい経つだろうか。いきなり現れて、いきなり手をつながれ―恥ずかしさのあまり、赤面する思いばかりしてきた。それが徐々にアリカに染みてきて、前よりも穏やかに暮らせるようになった…気がした。
そのティシーを疑ったのは…もしかしてここにいるのは、アリカ自身のせいかもしれない。あの時のティシーの顔が忘れれず、アリカは自然と体をこわばらせた。
「アリカ、平気かー？背負ってやろうか」
「あ……う、ううん……平気。大丈夫」
イースは頷くとゆっくりと前に進んだ。まずはハヤトが前を歩き、ジャンが続く。そしてイースとアリカだ。
「ハヤトージャンーどうだ？何か」
「特にないですけどね……ジャンは？」

「俺も。特には……ただ、まだ続きそうですね。この道のり」
水の音だけがさらさらと響き、それぞれの息遣いが耳の傍で聞こえる。空間はさして広くなく、だが通る分には支障はない。
「しばらく歩いてみないとわかりませんね」
ジャンの声に三人は頷くと、滑らないようにゆっくりと歩いた。

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

車は目立つ、ということでティシーは一人、国境街道を歩いていた。帝都を抜けるまではいいが、さすがにタルス国で帝国の車は何事かと思われてしまう。
「リリーシアくーん」
ティシーは歩きながら欝蒼と覆い茂る森に向かって声を投げる。すると背後からリリーシアの影が伸びた。シノビという職業は、どうしてかひっそりとしていなくてはいけないようで、お供といっても森を伝って行くらしい。やれやれとティシーは息を吐くと、にっこりと笑った。
「一人で歩くのってつまらないから、並んで歩こうか」
はあ、と気の抜けた返事を返しながらもリリーシアは隣―斜め後ろを歩く。
「やだよねえ、男二人がこうして歩くのって」
だったら呼ばなければいいじゃないか、と思ったが命令には逆らえないリリーシアだ。ぐっと口を引き締める。
「やっぱり早くありこちゃんを助けないとねえ……」
「……ティシー殿。何か考えがあるんですか？」
「あれ、珍しい。リリーシアくんから尋ねるなんて。これは幸先いいかもねえ」
「……」
「はは、やだなあ。そんな変な顔しないでよ。……考えねえ……特にないけど」

がくっと肩がずれ落ちそうになった。動揺を表に出さないように、リリーシアは極力前を見て平静を保つ。しかしティシーは飄々と笑顔を作った。
「ただ、心当たりがあるだけだよ。イデムがいそうな場所、ね」
言って、ティシーは右折した。タルス国にはもう入っているが、首都方面は真っ直ぐいかなくてはならない。
「あの」
「わかってるよ。……僕たちが行く場所は首都じゃない。ねえ、リリーシアくん。君はどれくらい戦争について知ってる？まあ生まれてないから微妙だと思うけど」
「大体の方が知っている知識程度ですが」
「そう。……井戸にアポトーシスが入れられたことがあってね。それで大半の兵士はアポトーシスになった。簡単に言うとこんなものだけどね。もう一つ。―井戸と繋がる、水路があってね……そこから流れ、人々は―」
ティシーは顔を上げ、遠くを見据える。いつものおどけた調子はなく、真剣だった。いや、どこか憤怒しているようにも見える。ターキシブルーの瞳の奥は煮えたぎっていた。
そしてその先に、彼はいた。
「予定通りってやつかな？」
一瞬、リリーシアは誰が言ったかわからなかった。ティシーにも似てるが、どこか違う。
黒い髪が揺れた。ティシーに似た瞳が嬉しそうに歪む。
「……イデム」
「嬉しいなあ、兄貴。俺のこと、一番わかってくれるのはやっぱり兄貴だよ」
今は使われていない、錆びた水門とコンクリートの塊。水路が街に流れる道はすでに閉ざされているが、川は十分ここまで来ている。その水は街ではなく、近くにある湖に流れ、湖の水は他国―帝都に通じる川に続いている。

それらを背負い、イデムは悠々とその場に立っていた。青い目がうっすら笑い、ティシーを見据える。
「アリカはどうした」
「なんだかねえ…脱獄しちゃってさ。今行方不明なんだよね」
「脱獄？」
「そ。脱獄」
くつくつと喉で笑うと、イデムは一歩前に踏み出した。
「……ねえ、兄貴。もうあんな子供のことなんて放っておこうよ」
ティシーに似た細長い指がティシーの頬に触れたが、ティシーはすぐさまイデムの手をはたき落とした。
「痛いな…」
「何を考えてる、イデム」
にやりとイデムは笑った。引きずり込まれそうな黒い笑みに、リリーシアがひるみそうになる。
「俺は特に何も？ただ、兄貴があの子供と一緒にいるって聞いて、嫉妬しちゃったんだよね。ほら、こう見えて俺ってブラコンだしさあ。他の人が兄貴を取るっていうの、許せなくて」
「ふざけるな」
「ふざけてないよ」
「リリーシア！」
ティシーは前を向いたまま叫ぶと、リリーシアはすぐさま手に刀を装備した。
「酷いな。俺をどうする気？」
イデムは少し顔を傾けると、背後からすっとリィナが現れた。手には既に糸が絡みついていた。
リィナとリリーシアの視線が交わり、閃光が弾けた。キイン、と金属音が空中で飛び交う。
「シノビなんかに俺のこと邪魔させないよ。……じゃあ、兄貴。俺たちはこっちに行こうか」
「…リリーシアくん。もういいよ」

「じゃあうちのリィナも」
二人は主の声にぴたりと攻撃の手を止めた。リリーシアはいつもの仏頂面のまま、ティシーを見ていたが、リィナはどこか恨みがましい目でティシーを睨みつけた。
落ち着いたのを確認すると、イデムは堂々と背を向けて水路へ向かった。そして手早く鍵を開け、ゆっくりと扉を開く。水は流れ出てこないが、代わりに音はする。
ティシーはリリーシアにここで待機するよう命じると、イデムの後ろについた。
「イデム。まさか…戦争を蒸し返すつもりか」
「蒸し返し、かあ……そうかもしれないね」
イデムは振り返り、笑った。どことなく少年の香りが残る眼差しでティシーを見つめた。
「確かにずっと、復讐したいと思ってたよ。実験の最中に生まれたリィナとエルン…それらを使って俺を試そうとしたこと……色々とね」
イデムはふう、と息を吐き出しながら中に入る。それに続き、ティシーも足を踏み入れた。カビ臭さとぬるい水の匂いに酔いそうにやるが、アリカのためを思えばこれくら苦ではない。
くるりとイデムは振り返った。まだ入口はすぐそこ、一歩前に出れば水路から出れる。
「……でもね。何よりも一番ムカツクのはね…」
イデムは黒い髪をいじると、兄の姿を上から下までゆっくり眺めた。
「俺が、作られたことだよ」
ぴん、と髪を弾く。黒い髪は水路の暗がりも吸い込んで、重くイデムに絡みつく。
「……ムカツクよねえ。あの子供を生みだすために、遺伝子を配合してくれちゃってさ。俺が生まれて、リィナとエルンが生まれて……でもいいよ。あいつたち、金色の髪してるからさ。でも俺は違う」

イデムは兄の前に一歩踏み出す。二人の距離が縮まる。
「どうせなら俺は…兄貴になりたかったな」
そっとティシーの髪を手に取る。後ろの光を受けてか、白く輝いている。
「どうして俺を兄貴にしてくれなかったんだよ。……いや、どうして…兄貴は俺じゃなくてあいつを選ぶんだよ。俺も同じように生まれたよ。俺も同じように、あいつの遺伝子を持ってるよ…？だから俺はあいつみたいに、真っ黒な髪」
「……何、そのわがまま」
ティシーは静かに言い放った。冷たい声にイデムはせせら笑った。
「酷いなあ、兄貴って。どうしていつも俺に冷たいの？俺が国のやつらをアポトーシスにしたから？でもさあ、仕方ないじゃん。俺だって…好き好んでこんな風に生まれたくなかったしさあ」
「うるさい」
一括する声に、イデムはまたしても笑った。どこまでも、つついても手ごたえのない人物だ。
「兄貴ってさあ…人のココロってやつ。わかんないの？俺、結構傷ついてるんだよねえ」
ティシーの目がぬらり、と光った。凶悪な光を秘めて、イデムの目を睨む。自分と同じ目を。
「確かにお前は過程で生まれたもの。…でもねえ。最初からお前のことは興味ないんだよ」
「…生んでおいて、その台詞？」
ティシーは喉を鳴らして笑った。どこまでも闇の広がる冷たい顔をする。
「勝手に生まれたんだろう？僕のせいじゃないさ。…いくらでも、何とでも言えばいい。……残念ながら、僕は最初からアリカ以外興味がない。…いや…そうだねえ……むしろ生んだことを感謝してほしいよ。お前が…お前たちが生まれる確率は少ないんだよ？普通に出産するよりも低いレベルで生まれてるんだ…奇跡だと思って、僕

に礼を言うべきだね」
「……兄貴のそういうところ」
散々な言われようだったに違いない。しかしイデムは笑っていた。しかもなぜか、安らかに思える遠い目をしている。
「……すごい非道な部分。俺にしか見せない部分。……そういう兄貴、好きだよ。ぞくぞくする」
イデムは水路に背を向けたまま、一歩下がった。遠くでこつんと足音がこだまする。
「だからつい、俺もこんな風にまわりくどくしちゃう。……兄貴、もっと俺を見ていようよ。あいつじゃなくてさ…」
「気持ち悪い」
「……とりあえずさあ、もうちょっと楽しませて」
ふ、と金色の風が吹いた。細い筋が水路の奥へと投げ込まれる。それが何か、頭が理解すると同時にティシーは目を見開いた。
「…リィナをどこへ行かせた」
「さあ？どこだと思う？」
「何を考えてる」
「だから、俺は兄貴と楽しくしていたいだけ。…それだけじゃ不十分かなあ」
ティシーは舌打ちすると、水路の奥へと駆けた。イデムは追ってこない。ただティシーと同じ顔でにやにやと笑っている。
「……あいつの遺伝子と兄貴の遺伝子で作られた俺。……兄貴はどうして俺を選んでくれないのかなあ？」
子供よりも純真な笑みを浮かべ、イデムはふらりとその場を後にした。

木陰で隠れていたリリーシアは、水路からイデムだけが出てくるのに首をかしげた。しかし疑問に動く前に、慣れた気配が背後に立った。
「……梅」

そこにいたのは四君子のリーダー・梅だった。どうして、とリリーシアが口を開く前に梅は一歩前に出た。
「リリーシア。元帥が、タルス国に入ったわ」
「元帥が……？」
リリーシアは自然と顔が硬直するのを感じた。タルス国が訪問に来て、アリカを人質に何か言いだす…そういう予定だと聞いていたのだが。
しかし梅はリリーシアの思考を読んだように首を振った。
「私も言われて初めて気づいた。……タルス国の使いが来る、それは予想で出した結論。つまり、現実のものではない」
リリーシアは首をかしげた。うまくつながらない。
「つまり…元帥は、タルス国が仕掛ける前に行動したということよ」
「え……」
「元帥が言っていたことだけれど。…何も待つ必要はなかった。だって、全ては自分たちが予想したもの。可能性の一つとして考えたこと。だからそれに囚われて、待つ必要はない。仕掛けられる可能性が一番高いのなら、それをつぶすように動くまで……そう結論を出したわ」
ようやくリリーシアの中で繋がった。
「しかし…梅はなぜ」
「護衛だったら、蘭が行ってる。それよりも私たちはやることがあるわ」
梅は水路を睨んだ。
「ティシー所長とアリカ・ランザートを、助けることよ」
リリーシアもつられて見る。イデムの姿はもうないが、ティシーが水路から出てくる様子はない。その奥にアリカがいるのだろうか…そう考えていると、梅は一足先に水路へと向かった。
まだリリーシアの中にいくつか煮え切らないものがあったが、命令に従うのがシノビだ。リリーシアも続いて、水路へ入った。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3103d/

Plastic opera

2010年10月28日23時03分発行